学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

# 令和6(2024)年度　九州栄養福祉大学・大学院　教員情報

## 【リハビリテーション学部 理学療法学科】・【健康科学研究科 健康栄養学専攻】

タカハシ　セイイチロウ
髙橋 精一郎　　TAKAHASHI Seiichiro　学長補佐(小倉南区キャンパス担当)・教授

| | |
|---|---|
| 所　　属 | 九州栄養福祉大学　　リハビリテーション学部　　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・理学療法学概論<br>・運動療法学概論<br>・キャリア教育<br>・スタートアップ教育Ⅰ<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ<br>・理学療法研究法演習<br>・理学療法基礎演習<br>・理学療法総合演習<br>・理学療法卒業研究<br>・臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ<br>〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕<br>・健康科学特別講義Ⅰ<br>・健康運動機能特論Ⅰ<br>・自律神経障害支援特論Ⅰ<br>・特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ |
| 専門分野 | ■運動機能障害理学療法分野<br>■内部障害系理学療法分野 |
| 最終学歴 | 山口大学大学院　医学研究科博士課程修了 |
| 学　　位 | 博士（医学） |
| 職　　歴 | 労働福祉事業団 九州労災病院　理学療法科　(1971年4月～1978年3月)<br>労働福祉事業団 九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 助手(1978年4月～1979年3月)<br>Heidelberg Universität Orthopädische Klinik 留学　(1978年5月～1979年3月)<br>九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 講師　(1979年4月～1984年3月)<br>九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 助教授　(1984年4月～2004年3月)<br>学校法人 国際医療福祉大学 大学院 教授　(2004年4月～2013年4月)<br>学校法人 国際医療福祉大学 福岡リハビリテーション学部 理学療法学科 教授兼任　(2005年4月～2013年3月)<br>学校法人 九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 学部長　(2013年4月～2020年3月)<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部理学療法学科教授兼大学院教授　(2013年4月～現在に至る)<br>九州栄養福祉大学 学長補佐（小倉南区キャンパス担当）　(2020年4月～現在に至る)<br>学校法人東筑紫学園 評議員　(2020年4月～現在に至る) |
| 教育上の業績 | ○理学療法概論テキスト 改訂第3版（分担執筆）2017年　細田多穂監修、南江堂<br>第7章「理学療法士の職能って何だろう？」 |
| | ○理学療法管理学（分担執筆）2018年　奈良　勲編著者代表、医歯薬出版<br>第7章「教育・研究のマネジメント」 |
| | ○理学療法管理学 第2版（分担執筆）2024年11月に出版予定　橋元　隆編著者代表、医歯薬出版　第2章「職業倫理」③行動規範 |
| | 【学術論文】 |
| 主な研究活動 | 1.（共）「全身振動刺激が自律神経系におよび呼吸機能に及ぼす影響について」：廣滋恵一、髙橋精一郎、神﨑良子、Hossain Mahbub：九州栄養福祉大学研究紀要第11号：51～62, |

2014

（概要）近年、スポーツ分野で全身振動刺激（WBV）を用いたトレーニングが行われている。そこで大学生を対象に 0Hz,15Hz,20Hz,25Hz の４条件でそれぞれ２分間 WBV を与え、生理的反応を調べた。4 条件では振動周波数の増加に伴い、主観的運動強度、心拍数、交感神経活動、酸素摂取量、MET s 、呼吸数は増加し、副交感神経活動は低下した。0Hz と他 3 条件の比較では心拍数酸素摂取量、MET s 、呼吸数は有意差を認めたが、交感神経活動では差は見られなかった。以上より WBV は交感神経活動の上昇は大きくなく、運動強度も 2～3METs で家屋内の日常生活活動と同等の活動強度であることから虚弱高齢者や呼吸・循環器疾患患者への適用性は高いのではないかと考える。

**2.** （共）「座位バランス訓練装置の開発（第３報）～症例報告～」：四元孝道、髙橋精一郎、廣滋恵一、長尾哲男、奥村克博、渡邉恭弘、島田泰裕：九州栄養福祉大学研究紀要第 13 号：259～264，2016

（概要）これまでに座位バランス訓練装置の開発を行ってきたが、前回当機器を用いて片麻痺患者に対して座位傾斜時の身体反応を計測し、作業中では作業のない場合に比べて頭部・体幹の立ち直りが良い傾向があることを報告した。今回は本機器を長時間使用することで更なる座位バランス改善が望めるのではないかとの観点から片麻痺患者への介入を行った。前後最大傾斜角度 1.0°、左右最大傾斜角度 2.4°で８の字形に動く座面に椅坐位で１回 13 分、週３回、２週間実施し、間に２週間の非介入期を設け２回繰り返した。結果、麻痺側前方への座圧中心移動が改善し、非麻痺側への重心移動も可能になり、総軌跡長も短くなる傾向がみられた。日常生活自立判定では寝返りから立ち上がりまでが自立となり、入浴も一部介助、家事活動にも参加できるようになった。本機器はバランス機能への改善が期待できる手段であるといえる。

**3.** （単）「入試形態の違いが休学・退学の発生率に関係しているか」：髙橋精一郎：九州栄養福祉大学研究紀要第 15 号：1～10，2018

（概要）本学リハビリテーション学部において、推薦入試と一般入試との入試形態による休学率・退学率の相違の有無について、学部１期生から７期生までの 878 名を対象に分析した。結果、一般入試者の方が休学率・退学率が高く、理学療法学科に比べて作業療法学科の方が高かった。学習習慣や目的意識の違いが考察された。

**4.** （共）「深達温熱刺激が生体の自律神経に与える影響」：中藤佳絵、木村美子、髙橋精一郎：九州栄養福祉大学研究紀要第 15 号：27～35，2018

（概要）健常学生 20 名を対象に 35℃の温水に片手手部を浸水させた場合と浸水+超音波を照射した２方法で自律神経活動に違いがあるか否かをクロスオーバー試験で検証した。結果、２方法間に心拍数や自律神経活動に有意な差は認められなかったが、照射時の方が交感神経の活動が低下する傾向がみられた。今後条件を変えての検討を続ける。

**5.** （共）「要支援高齢者向け介護予防教室における複合的プログラムの効果　―介護予防・日常生活支援総合事業として―」：中藤佳絵、髙橋精一郎、橋元　隆、宮永敬一：九州栄養福祉大学研究紀要第 16 号：17～24，2019

（概要）要支援高齢者向け介護予防教室は、食事や生活に関する項目の改善が複数みられ、特に総合的体力や口腔機能の変化がみられた。通所による複合的プログラムの事業実施による成果と考えられる。日常生活支援総合事業においては、口腔や栄養に関するプログラムを運動器プログラムと同時に提供することで要支援からの悪化を予防し、健康寿命を延伸する総合的かつ継続的な教室開催の意義は大きいといえる。

**6.** （共）「整形外科学に対する学修支援の取り組み」：河上淳一、烏山昌起、井元　淳、石橋敏郎、四元孝道、佐野幹剛、室井廣大、髙橋精一郎：九州栄養福祉大学研究紀要第 16 号：43～50，2019

（概要）学部内のリメディアル・学修支援委員会において、毎年再試験者数の多い整形外科学について、基礎知識の提供と自己学習意欲の向上を目的に支援を実施した。期間は当科目開講中の令和元年5月～7月とし、学科の補習や試験対策ではないことを明確にした上で、学年は問わず学生の参加を呼び掛けた。5回の開催で初回は1名であったが最終回は23名まで増加した。再試該当者は平成29年50名、30年89名であったが、今年度は29名の減少し、支援の効果があったものと判断した。

7. （共）「入試選抜形態別入学者と運動療法学概論小テストの結果との関係性」：髙橋精一郎、大峯三郎：九州栄養福祉大学研究紀要第18号：1～8，2021

（概要）理学療法学科9期生～11期生までの1年生274人に対して、入試形態による成績の相違の有無について分析した。入試形態は推薦入試群・一般入試群・総合型入試群（AO）の3群とし、センター型は少数のため除いた。担当する「運動療法学概論」の小テスト8回分の平均値を成績比較の指標とした。各期で差異があるものの、概して推薦入試群＞一般入試群＞総合型入試群となり、総合型入試群の平均値の低さが明らかとなり、対応の必要性を確認した。

8. （共）「肺がん切除患者における術前栄養状態が術後のPerformance Status の変化に与える影響　―Controlling Nutritional Statusを用いての検討―」：川上　慧、宗　哲哉、山本直樹、大場健一郎、井元　淳、髙橋精一郎：肺癌　63（1）：8～14，2023

（概要）令和元年8月～令和2年11月で肺がんによる肺切除術を行った28名を対象に、術前の栄養状態が術後に与える影響を検証した。入院前の基礎情報、栄養・身体機能、術後PS回復期間を指標として、栄養正常群と不良群の2群で比較した。不良群では正常群と比べて有意にPSの回復期間が遅く、6分間歩行距離も短かった。術前の栄養状態が不良の場合は術後の身体運動機能回復が遅れることが把握でき、術前の栄養状態の評価の重要性が示唆された。

9. （共）「$\beta_1$遮断薬を内服した慢性閉塞性肺疾患患者の運動耐容能と呼吸循環応答について」：大場健一郎、川上　慧、神﨑良子、松永崇史、池内智之、髙橋精一郎、津田　徹：日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌　第31巻　第3号：1～6，2023

（概要）平成30年8月から令和元年11月の間で、安静時心拍数が85回/分以上で$\beta_1$遮断薬を内服した安定期COPD患者8名に対して、処方1か月後の肺機能、運動持続時間、$SpO_2$、心拍数、血圧を測定した。結果、運動持続時間は有意に延長し、安静時心拍数、安静時二重積、最高心拍数は有意に低下し、試験後の呼吸困難感は有意に改善した。$\beta_1$遮断薬内服後の有害事象は認められなかった。安静時心拍数は速いCOPD患者の中には$\beta_1$遮断薬の恩恵を受ける群が存在することが示唆された。

10. （共）「運動療法を実施する際のマスク装着の影響」：神﨑良子、髙橋精一郎、樋口博之：健康支援　第25巻2号：149～154，2023

（概要）若年健常者を対象にAT強度で自転車運動を実施し、マスクなしと比較してマスク装着により室温20℃下で は運動時心拍数が高く、室温24℃下では自覚的運動強 度が高値となった。自律神経活動はマスク装着と室温に よる影響は認めなかった。マスク装着下でAT強度にて 運動療法を行う際に自覚的運動強度を低減するには、室 温を下げることが望ましい。

【学会発表】

1. （共）「筋萎縮性側索硬化症患者に対する呼気抵抗運動が呼吸機能および自律神経系機能に及ぼす効果」：北野晃佑、髙橋精一郎、甲斐　悟：第32回九州理学療法士・作業療法士合同学会
〈主　　催〉沖縄県理学療法士会
〈開 催 場 所〉宜野湾市
〈開催年月日〉2010年11月27・28日

（概要）機器による換気補助を必要としない筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者6名と健常成人10名の2群にPCFの

30%の呼気流速を目標に、ピークフローメータを用いて呼気抵抗運動を行った。10 回を 1 セットとし、1 日 2 セット、連続 12 日間実施した。評価指標は肺活量、胸郭拡張差、自律神経活動とした。結果、介入後では患者群では PCF の増加傾向がみられたが有意な差はなかった。胸郭拡張は第 10 肋骨高位で有意な増加みられた。自律神経活動については副交感神経活動の有意な低下がみられ、健常者群に比べると交感神経活動の遅延がみられらた。ALS 患者は交感神経活動の減少がみられるといわれているが、呼気抵抗運動により深呼吸運動や呼気筋の活動を高めることで、自律神経活動にも好影響を与えることができるのではないかと示唆された。

2. （共）「Effects of respiratory function in physical therapy intervention in patients with Amyotrophic Lateral Sclerosis」: Kosuke Kitano, Satoru Kai, Seiichiro Takahashi, Hitoshi Kikuchi : Japan-Korea 1st Joint Conference
〈主　　催〉日本理学療法士協会
〈開 催 場 所〉長崎市
〈開催年月日〉2012 年 11 月 17・18 日

（概要） 筋萎縮性側索硬化症(ALS)患者 8 名に対して PCF の 30%の呼気流速を目標に、ピークフローメータを用いて呼気抵抗運動を行った。10 回を 1 セットとし、1 日 2 セット、連続 12 日間実施した。評価指標は肺活量、胸郭拡張差とした。結果、介入後では PCF の増加傾向がみられたが有意な差はなかった。胸郭拡張は第 10 肋骨高位で有意な増加みられた。呼吸機能練習はALS患者に対して呼吸機能の改善が可能であることが示唆された。

3. （共）「腹直筋に注目した起き上がり動作における筋活動の解析」: 永尾泰司、髙橋精一郎 : 九州理学療法士作業療法士合同学会 2014
〈主　　催〉佐賀県理学療法士会
〈開 催 場 所〉佐賀市
〈開催年月日〉2014 年 11 月 9・10 日

（概要） 高齢者では起き上がり動作中に後方への転倒がみられることがある。これは腹部体幹筋(腹直筋)の低下が一因となっており、高齢者では腹直筋の低下を補うため上肢支持での起き上がりが必要である。今回は健常若年者 22 名を対象に、一側上肢指示と両側上肢指示における腹直筋活動の差異について検証した。結果、両上肢支持の方が一側支持よりも活動量が低く、最大ピーク値も有意に低かった。腹直筋低下のある高齢者には両側上肢支持での起き上がり方法を指導する必要があることが示唆された。

4. （共）「筋萎縮性側索硬化症患者に対するストレッチのストレス軽減効果」: 北野晃祐、甲斐　悟、髙橋精一郎、菊池仁志 : 第 50 回日本理学療法学術大会
〈主　　催〉日本理学療法士協会
〈開 催 場 所〉東京都
〈開催年月日〉2015 年 6 月 5～7 日

（概要） 筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者に対して，呼吸筋である肋間筋および痙縮や廃用により拘縮が生じやすい腓腹筋にはストレッチの必要性が高い。ストレッチは，精神的リラクセーション効果も知られている。今回は，ALS 患者に対する肋間筋ストレッチと腓腹筋ストレッチのストレス軽減効果の差異について，唾液アミラーゼを用いて検証した。対象は，主治医が ALS と診断し，理学療法を処方した患者 10 名（66.6±11.1 歳）。重症度は，III 3 名，IV 4 名，V 3 名。肋間筋ストレッチは，ALS の包括的呼吸ケア指針に準拠し，第 2 肋骨から第 6 肋骨までを順に下制し左右の肋間筋に伸張を加えた。結果、肋間筋に実施することで唾液アミラーゼが低下し，腓腹筋への実施で変化しなかった。 肋間筋ストレッチは，拘束性障害に対して実施される。肋間筋が伸張されたことで即時的に拘束性障害が緩和し，ストレス軽減効果が得られたと考えられる。

5. （共）「要支援高齢者向け介護予防教室における複合的プログラムの効果　～K 市の介護予防・日常生活支援総合事業として～」: 中藤佳絵、髙橋精一郎、橋元　隆、宮永敬市 : 第 5 回日本予防理学療法学会学術大会
〈主　　催〉日本理学療法学会連合
〈開 催 場 所〉北九州市
〈開催年月日〉2018 年 10 月 20・21 日

（概要） 介護保険認定において要支援 I 及びII に認定されが、介護サービスを受けずに通所型介護予防教室の運動・栄養・口腔機能・認知症予防複合プログラムに参加した、北九州内 2 地区の 252 名のうち同意を得られた 37

| | |
|---|---|
| | 名に対して、プログラム効果のアンケートを実施した。体力では膝の伸展筋力、歩行速度の向上がみられ、口渇感・味覚・咬合力の改善が認められ、予防教室の開催意義が確認できた。 |
| | 6. （共）「肺がん切除患者における術前栄養状態が術後の Performance　Status の変化に与える影響　～Controlling Nutritional Status を用いての検討～」：川上　慧、宗　哲哉、山下直樹、大場健一郎、井元　淳、髙橋精一郎：第 62 回日本肺癌学会学術集会<br>〈主　　催〉日本肺癌学会<br>〈開 催 場 所〉横浜市<br>〈開催年月日〉2021 年 11 月 26～28 日 |
| | （概要）肺がんによる肺切除術を行った 28 名を対象に、術前の栄養状態が術後に与える影響を検証した。入院前の基礎情報、栄養・身体機能、術後 PS 回復期間を指標として、栄養正常群と不良群の 2 群で比較した。不良群では正常群と比べて有意に PS の回復期間が遅く、6 分間歩行距離も短かった。術前の栄養状態が不良の場合は術後の身体運動機能回復が遅れることが把握でき、術前の栄養状態の評価の重要性が示唆された。 |
| 主な社会活動 | ・（社）福岡県理学療法士会会員　（1971 年 8 月～現在に至る）<br>・　同　理事　（1977 年 4 月～2007 年 3 月）<br>・（社）日本理学療法士協会全国代議員　（1993 年 4 月～2007 年 3 月）<br>・　同　倫理委員会委員長　（1999 年 4 月～2002 年 3 月）<br>・福岡県障害者施策推進委員会委員　（2004 年 11 月～2018 年 9 月）<br>・第 43 回日本理学療法学術大会　副大会長　（2006 年 5 月～2008 年 6 月）<br>・（社）福岡県理学療法士会　監事　（2007 年 4 月～2009 年 3 月）<br>・（社）日本理学療法士協会教育局教育部部長　（2007 年 4 月～2013 年 3 月）<br>・（公社）日本理学療法士協会生涯教育業務執行委員会委員　（2013 年 6 月～2016 年 6 月）<br>・行橋市障害者自立支援給付認定審査会委員　（2016 年 4 月～現在に至る）<br>・（社）全国リハビリテーション学校協会常任理事　（2019 年 7 月～2021 年 3 月）<br>・全国リハビリテーション学校協会九州・沖縄ブロック会会長　（2019 年 7 月～2021 年 3 月）<br>・　同　監事　（2021 年 4 月 2023 年 5 月）<br>・大学・短期大学基準協会大学認証評価委員会委員　（2024 年 4 月～現在に至る） |
| 所 属 学 会 | 日本理学療法士学会　（1971 年 8 月～現在に至る）<br>日本呼吸ケア・リハビリテーション学会　（1994 年 4 月～現在に至る）<br>日本自律神経学会　（2010 年 4 月～現在に至る） |
| 受　賞　歴 | 日本理学療法士学会 学会奨励賞　（1989 年 5 月）<br>日本理学療法士協会長賞　（2005 年 5 月）<br>厚生労働大臣表彰　（2005 年 10 月） |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

橋元（ハシモト） 隆（タカシ）　HASHIMOTO Takashi　日本リハビリテーション発祥地・九州リハ大記念館館長・教授

| | |
|---|---|
| 所　　属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担 当 科 目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科、作業療法学科〕<br>・リハビリテーション概論<br>・キャリア教育 |
| | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ、先端医療と理学療法<br>・中枢神経疾患理学療法Ⅱ、<br>・日常生活活動演習、動作分析演習Ⅰ<br>・理学療法管理学<br>・臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ |
| | 〔食物栄養学部　食物栄養学科〕<br>・リハビリテーション概論 |
| | 〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕<br>・健康科学特別講義<br>・リハビリテーション学特論Ⅰ<br>・健康運動機能特論Ⅰ、健康運動機能特論Ⅱ |
| 専 門 分 野 | ■　運動療法治療学<br>■　日常生活活動<br>■　脊髄損傷<br>■　介護予防・健康づくり |
| 最 終 学 歴 | 九州芸術工科大学　大学院後期課程単位取得退学<br>佛教大学　社会学部社会福祉学科（通信課程） |
| 学　　位 | 社会学士 |
| 職　　歴 | 労働福祉事業団 九州労災病院 理学診療科入職<br>（昭和 44(1969)年４月～昭和 47(1972)年５月）<br>労働福祉事業団九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 助手<br>（昭和 47(1972)年５月～昭和 47(1972)年９月）<br>英国ストーク・マンデビル病院留学：労働省奨学生<br>（昭和 47(1972)年９月～昭和 48(1973)年９月） |
| | 労働福祉事業団 九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 講師<br>（昭和 48(1973)年９月～昭和 55(1980)年１月） |
| | 労働福祉事業団 九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 助教授<br>（昭和 55(1980)年１月～平成 3(1991)年３月） |
| | 労働福祉事業団 九州リハビリテーション大学校 教授及び理学療法学科長<br>（平成 3(1991)年４月～平成 16(2004)年３月） |
| | 専門学校九州リハビリテーション大学校 教学部長・理学療法学科教授並びに理学療法学科長<br>（平成 16(2004)年４月～平成 20(2008)年３月） |
| | 専門学校九州リハビリテーション大学校 副学校長・教学部長、理学療法学科教授<br>（平成 20(2008)年４月～平成 23(2011)年３月） |
| | 九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス副学長・リハビリテーション学部 学部長、教授<br>兼 専門学校九州リハビリテーション大学校 副学校長・教学部長、理学療法学科教授<br>（平成 23(2011)年４月～平成 25(2013)年３月） |
| | 学校法人東筑紫学園 評議員<br>（平成 23(2011)年４月～現在に至る） |

| | |
|---|---|
| | 九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス副学長、理学療法学科 教授<br>兼 専門学校九州リハビリテーション大学校 副学校長・教学部長、理学療法学科 教授<br>（平成 25(2013)年 4 月～平成 26(2014)年 3 月） |
| | 九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス副学長<br>（平成 25(2013)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月）<br>九州栄養福祉大学 大学院健康科学研究科 教授<br>（平成 26(2014)年 4 月～現在に至る） |
| | 九州栄養福祉大学 学長補佐（小倉南区キャンパス担当）<br>（平成 29(2017)年 4 月～令和 2(2020)年 3 月） |
| | 九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス就職指導室長<br>（平成 31(2019)年 4 月～令和 2(2020)年 3 月）<br>九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス就職指導室相談役<br>（令和 2(2020)年 4 月～現在に至る）<br>日本リハビリテーション発祥地・九州リハビリテーション大学校記念館館長<br>（令和 2(2020)年 4 月～現在に至る） |
| 教育上の業績 | **【教育実践例】**<br>**（理学療法士教育専門担当科目）**<br>・「運動療法：機能統合訓練」（前. 神経障害系運動療法） 昭和 48（1973）年 10 月～令和 3（2021）年 3 月<br>・「日常生活動作（活動）学」（現. 日常生活活動） 昭和 48（1973）年 10 月～現在に至る<br>・「リハビリテーション概論」 平成 16（2004）年 4 月～現在に至る<br>・「キャリア教育」 平成 24（2012）年 4 月～現在に至る<br>・動作分析演習Ⅰ（前日常生活支援論） 令和 4（2022）年 4 月～現在に至る<br>・「理学療法管理学」 令和 4（2022）年 4 月～現在に至る<br>・中枢神経疾患理学療法Ⅰ・Ⅱ 令和 4（2022）年 4 月～現在に至る |
| | **（教科書等の執筆）** |
| | ○「学びやすい　リハビリテーション論」（編集・分担執筆）<br>（金芳堂　平成 11(1999)年　初版～第 2 版）<br>○「日常生活活動（ADL）」　（編集・分担執筆）<br>（神陵文庫 平成 11(1999)年　初版～第 3 版）<br>○「標準理学療法学　日常生活活動学・生活環境学」（分担執筆）<br>（医学書院 平成 13(2001)年 初版～第 6 版）<br>○「標準理学療法学　臨床実習とケーススタディ」（分担執筆）<br>（医学書院 平成 13(2001)年　初版～第 2 版）<br>○「日常生活活動（ADL）評価のポイント」（単行）<br>（日医総研 平成 15(2003)年）<br>○「理学療法学概論」（分担執筆）神陵文庫<br>（平成 16(2004)年　第 2 版～第 3 版）<br>○「生活環境論」（編集・分担執筆）神陵文庫<br>（平成 18(2006)年　初版）<br>○「理学療法事典」（分担執筆）<br>（医学書院 平成 18(2006)年）<br>○「理学療法概論」（分担執筆）<br>（医歯薬出版 平成 19(2007)年　第 4 版～第 6 版）<br>○「義肢装具学」　（編集・分担執筆）<br>（神陵文庫 平成 20(2008)年　初版）<br>○「新版　日常生活活動（ADL）　評価と支援の実際」（分担執筆）<br>（医歯薬出版 平成 22(2010)年　初版） |

| | |
|---|---|
| | ○「服部リハビリテーション技術全書」（分担執筆・編集協力）<br>（医学書院 平成 26(2014)年第 3 版） |
| | ○「脊髄損傷理学療法マニュアル」（分担執筆）<br>（文光堂 平成 26(2014)年　第 2 版）<br>○「理学療法管理学」（編著者・分担執筆）<br>（医歯薬出版 平成 30(2018)年 初版、同　令和 2(2020)年　改訂） |
| | ○「理学療法概論」（分担執筆：奈良勲　編集）<br>（医歯薬出版 令和 5(2023)年　　〈第 7 版）<br>○「新版　日常生活活動（ADL）　第 2 版　評価と支援の実際」（分担執筆：伊藤利之・他編集）<br>（医歯薬出版 令和 5(2023)年）第 2 版 |
| | ○「日本の作業療法発達史　―萌芽期の軌跡を尋ねて―」　（分担執筆：矢谷令子・他編集）<br>（CBR 令和 3(2021)年 2 月） |
| | ○「基礎科学を融合した理学療法推論の実際（分担執筆：　奈良勲監修）<br>（運動と医学の出版社　令和 4（2022）年 4 月<br>○「臨床精神科作業療法学　理論、実践、効果検証　　：大丸幸　他編<br>（協同医書出版　令和 5（2023）年 4 月）<br>○「理学療法概論」（分担執筆：高橋哲也　他　編著）<br>（医歯薬出版　令和 6 年（2024）年 1 月［第 7 版補訂］ |
| | **（教育に関する職位）** |
| | ・ 九州リハビリテーション大学校理学療法学科教授および学科長<br>（平成 3(1991)年 4 月～平成 16(2004)年 3 月） |
| | ・専門学校九州リハビリテーション大学校理学療法学科教授及び教学部長並びに理学療法学科長<br>（平成 16(2004)年 4 月～平成 20(2008)年 3 月） |
| | ・専門学校九州リハビリテーション大学校理学療法学科教授及び副学校長<br>（平成 20(2008)年 4 月～平成 23(2011)年 3 月） |
| | ・九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス副学長 リハビリテーション学部学部長・教授<br>兼 専門学校九州リハビリテーション大学校理学療法学科教授及び副学校長<br>（平成 23(2011)年 4 月～平成 25(2013)年 3 月） |
| | ・九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス 副学長<br>（平成 26(2014)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月）<br>・九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科 教授<br>（平成 26(2014)年 4 月～現在に至る）<br>・九州栄養福祉大学 学長補佐（小倉南区キャンパス担当）<br>（平成 29 年 4 月～令和 2 年 3 月） |
| **主な研究活動** | 1．「健康づくりと地域連携」公開シンポジウム　健康づくり・地域づくり・そして就労へ」<br>全国地域作業療法研究大会　第 23 回学術大会　シンポジウム<br>（平成 30（2018）年 2 月 25 日　北九州市国際会議場） |
| | 2．「介護ロボットの効果的な活用のための方法と手順（移乗介助（非装着）マニュアル」<br>厚生労働省委託事業報告書　監修<br>（平成 31（2019）年 3 月　北九州市） |
| | 3．「高齢者の身体特性と健康長寿を支援する」<br>休職中や職場復帰計画中の女性薬剤師のためのセミナー講演<br>（令和元（2019）年 10 月 20 日　天神チクモクビル　福岡市） |
| | 4．「生きをひき取る　～～元気高齢者でいるために～<br>小倉南区守恒校区文化祭　健康講演会<br>（令和元（2019）年 11 月 17 日　守恒市民センター　北九州市） |
| | 5．「高齢者の身体特性と環境づくり」<br>高齢者等住宅相談員（建築士）」「すこやか住宅改造助成事業施工業者」更新研修会 |

| |
|---|
| （令和２(2020)年８月４日・25 日　北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」） |
| ６．「高齢者の健康づくり・介護予防の本質は？　ー　ロコモティブシンドローム・サルコペニア予防を通して　ー<br>第 54 回日本薬剤師会学術大会　分科会９：健康寿命延伸への寄与～人生 100 年時代～　シンポジウム<br>（令和２（2021）年９月 19 日　福岡サンパレス　Web） |
| ７．「高齢者の身体特性」<br>北九州市高齢者の運動指導研修会<br>（令和４（2022）年２月 23 日　北九州市総合保健福祉センター２F） |
| ８．「北九州市　介護予防　ひまわり太極拳」DVD 改訂版　監修<br>北九州市保健福祉局　認知症支援・予防センター　制作<br>（令和４年４月　公開 |
| ９．「理学療法の過去・現在・未来をつなぐ　～　温故創新～」<br>九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡　　特別講演<br>（令和４（2022）年 11 月 26 日　北九州市国際会議場） |
| １０．「ケア・トランポリン教室に係る効果検証報告書」<br>北九州市保健福祉局　認知症支援・予防センター　委託<br>（令和４年（2022）年 12 月） |
| １１．「地域在住高齢女性における尿失禁に影響を与える要因」　共著<br>九州栄養福祉大学研究紀要　第 19 号　pp1～11<br>（令和４（2022）12 月 19 日） |
| １２．「障害者スポーツの意義と理念」<br>令和４（2022）年度初級障がい者スポーツ指導員養成講習会<br>（令和５年１月 28 日　　北九州市障害者スポーツ協会） |
| １３．「フレイル予防の基礎知識」<br>北九州市高齢者の運動指導研修会<br>（令和５（2023）年２月 23 日　北九州市総合保健福祉センター２F） |
| １４．「要介護認定の平準化をめざして」<br>下関市介護認定審査会調査員研修<br>（令和５（2023）年２月 24 日　下関市庁舎講堂） |
| １５．「人生 100 年時代：地域が果たす役割」<br>北九州市戸畑区高齢社会を考える区民の集い<br>（令和５（2023）年３月５日　ウエルとばた中ホール） |
| １６．「理学療法士・作業療法士国家資格誕生の社会的背景」<br>日本リハビリテーション発祥地記念館誌第４号：令和４年度版　pp27～40<br>（令和５（2023）年３月） |
| １７．「2040 年の理学療法士への提言」<br>九州栄養福祉大学理学療法学科卒業生研修会<br>（令和６年（2023）９月 16 日　南区キャンパス階段教室） |
| １８．「北九州市とリハビリテーション」<br>第 50 回北九州市地域リハビリテーションケース会議記念シンポジウム<br>（令和６（2024）年１月 27 日　北九州市立男女共同参画センタームーブ） |
| １９．「障害者スポーツの意義と理念」<br>令和５（2023）年度初級障がい者スポーツ指導員養成講習会<br>（令和６（2024）年１月 28 日　　北九州市障害者スポーツ協会） |
| ２０．「フレイル予防の基礎知識」<br>北九州市高齢者の運動指導研修会<br>（令和６（2024）年２月 23 日　北九州市総合保健福祉センター２F） |
| ２１．「要介護認定の平準化をめざして」<br>下関市介護認定審査会委員研修 |

| | |
|---|---|
| | （令和６（2024）年３月８日　下関市庁舎講堂） |
| | ２２．「北九州における健康づくり」<br>健康づくり講演会～健康づくりは未来への投資～　トークセッション<br>（令和６（2024）年３月 28 日　JCOM 北九州芸術劇場） |
| | ２３．「産学官民連携を基盤とした健康づくり・介護予防事業の実践」<br>九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学地域連携センター教育・研究年報（令和 5 年度創刊号）<br>（令和６年（2024）年３月） |
| | ２４．「ボランティアってなあに？」<br>小倉南区葛原臣民センター生涯学習市民講座<br>（令和６（2024）年４月 16 日　小倉南区葛原市民センター） |
| 主な社会活動 | **【協会・行政等委員会委員】** |
| | ・福岡県理学療法士会理事（学術担当・事務局長・副会長）<br>（昭和 45(1970)年４月～17 年間） |
| | ・福岡県理学療法士会会長<br>（昭和 63(1988)年４月～10 期 20 年間） |
| | ・全国理学療法士・作業療法士学校連絡協議会理事<br>（平成 12(2000)年４月～7 年間） |
| | ・北九州市介護認定審査会平準化委員会委員<br>（平成 12(2000)年４月～現在に至る） |
| | ・北九州市地域リハビリテーションケース会議主催コディネーター<br>（平成 15 年 10 月 20 日（第１回）～現在に至る） |
| | ・北九州市高齢者介護の質の向上委員会委員　座長<br>（現：北九州市高齢者支援と介護の質の向上推進会議）<br>（平成 15(2003)年４月～現在に至る） |
| | ・北九州市高齢者介護の質の向上委員会介護保険部会部会長<br>（平成 18(2006)年４月～現在に至る） |
| | ・北九州市障害程度区分認定審査会調整委員<br>（平成 18(2006)年４月～現在に至る） |
| | ・福岡県介護予防市町村支援委員会委員<br>（平成 19(2007)年４月～令和２（2020）年３月） |
| | ・厚生労働省医道審議会理学療法士・作業療法士専門部会委員<br>（平成 20(2008)年４月～平成 31 年 2019 年３月） |
| | ・福岡県老人医療費検討委員会委員（現：福岡県医療費適正化計画推進委員会　副委員長）<br>（平成 21(2009)年４月～現在に至る） |
| | ・リハビリテーション教育評価機構評価員<br>（平成 25(2013)年４月～令和２年３月） |
| | ・北九州市介護ロボット特区ワーキンググループ会議構成員<br>（平成 28（2016）年７月～平成 30（2018）年６月）<br>・名称変更：北九州市介護ロボット等導入実証事業ワーキンググループ会議構成員<br>（平成 30（2018）年７月～令和３（2021）年８月）<br>・名称変更：先進的介護「北九州モデル」推進に関する評価委員会委員<br>（令和３（2021）年９月～現在に至る） |
| | ・北九州市緑の基本計画改定検討会委員<br>平成 31（2019 年４月～令和４（2022）年３月 |
| 所　属　学　会 | 日本理学療法士協会 名誉会員　（令和２(2020)年６月）<br>日本脊髄障害医学学会<br>日本リハビリテーション医学会<br>日本人間工学学会 |
| 受　賞　歴 | 日本リハビリテーション工学協会福祉機器コンテスト’94 グランプリ　（平成６(1994)年８月） |

| | | |
|---|---|---|
| | 厚生労働大臣表彰 | （平成 17（2005）年 11 月） |
| | 社団法人日本理学療法士協会協会長表彰 | （平成 18（2006）年 5 月） |
| | 社団法人福岡県理学療法士会特別功労賞 | （平成 19（2007）年 6 月） |
| | 九州理学療法士・作業療法士合同学会合同士会長会議特別表彰 | （平成 20（2008）年 11 月） |
| | 北九州市市制 50 周年記念市表彰（功労章） | （平成 25（2013）年 2 月） |
| | 日本リハビリテーション教育評価機構　（感謝状） | （令和元（2019）年 5 月） |
| | 公益社団法人福岡県理学療法士会設立 50 周年記念表彰 | （令和元（2019）年 9 月） |
| | 社団法人日本理学療法士協会 50 周年特別表彰 | （令和 2（2020）年 5 月） |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

石橋（イシバシ） 敏郎（トシロウ）　ISHIBASHI Toshiro　リハビリテーション学部長、小倉南区キャンパス学生部長・教授

| | |
|---|---|
| 所　　属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担 当 科 目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・運動学Ⅰ・運動学Ⅱ（理学療法学科、作業療法学科）<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ<br>・医学倫理学<br>・基礎物理学<br>・キャリア教育<br>・理学療法基礎演習<br>・理学療法総合演習Ⅰ・Ⅱ<br>・理学療法総合研究<br>・先端医療と理学療法<br>・臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ、臨床自習Ⅴ<br>〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕<br>・健康科学特別講義Ⅰ、健康科学特別講義Ⅱ<br>・健康科学研究法特論講義、健康科学研究法特論演習<br>・健康運動機能特論Ⅰ、健康運動機能特論Ⅱ |
| 専 門 分 野 | ■　運動器疾患の予防と対策<br>■　姿勢制御メカニズムの解析<br>■　理学療法卒前・卒後教育のあり方について |
| 最 終 学 歴 | 福岡県立大学院　人間社会学研究科地域教育支援専攻卒業 |
| 学　　位 | 修士（地域教育支援） |
| 職　　歴 | 九州労災病院リハビリテーション診療科（5 年間）<br>労働福祉事業団九州リハビリテーション大学校理学療法学科専任講師（9 年間）<br>専門学校九州リハビリテーション大学校専任講師<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部 理学療法学科 教授<br>（平成 28(2016)年 4 月～現在に至る）<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部 副学部長<br>（平成 31(2019)年 4 月～令和 2(2020)年 3 月）<br>九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科 教授　（平成 31(2019)年 4 月～現在に至る）<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部 学部長　（令和 2(2020)年 4 月～現在に至る）<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部 学生部長　（令和 6(2024)年 4 月～現在に至る） |
| 教育上の業績 | ○運動器障害理学療法学テキスト（改訂第 3 版）の出版<br>○Crosslink 理学療法学テキスト 義肢装具学の出版 |
| 主な研究活動 | 【著書】<br>1. 運動器障害理学療法学テキスト（改訂第 3 版）<br>令和３年８月　南江堂　共著　南江堂<br>（概要）骨折状況に応じた理学療法評価を正確かつ迅速に実施したうえで、エビデンスに基づく的確な理学療法アプローチを実施する必要がある。骨折の治癒に要する期間については、骨折部位および固定状況、外力の作用、栄養状態などが総合的に影響し、理学療法士は骨折の癒合形成を阻害することなく、骨折部位周囲の関節可動域を確保し、筋力の維持・増強をはかり、日常生活活動及び生活の質の向上を目指すことが望まれる。<br>担当部分：14 章　骨性障害①骨折（137 頁～146 頁）石橋敏郎<br>監修：細田多穂、編集：高柳清美、中川法一、木藤伸宏、森山英樹<br>【学術論文】<br>1. 体力消耗状態の高齢患者に対する理学療法のあり方（第二報）<br>平成 30 年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要　第 15 号　共著<br>（概要）体力消耗状態にある入院高齢者を対象として、簡易栄養状態評価表にて栄養状態を評価した上で、膝関節伸展運動の最大筋力を測定したのちに低強度での膝関節伸展運動トレーニン |

グを実施し、栄養状態と日常生活活動能力・持久力・歩行速度との関連性を検討した。その結果、対象者の筋力は有意に改善していたことにより、低強度での筋力強化運動の効果が証明されたが、栄養状態が低下していると ADL 能力の改善が良くない結果であった。
共同研究者：石橋　敏郎、木村　美子、津上　勝、川嶋　恵美 、松﨑　英章、末松　廣郎、財前　暁、河本　展良（執筆頁 11 頁～18 頁）

2. 体力消耗状態の高齢患者に対する理学療法のあり方（第三報）
平成 31 年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要　第 16 号　共著
（概要）体力消耗状態にある入院高齢者を対象実施した低強度運動は、身体機能だけでなくフレイル状態の有意な改善が認められた。低強度運動によるフレイル状態の変化に与える重要な要因は、歩行速度と 6 分間歩行試験、FIM セルフケア項目の各変化量であった。
共同研究者：石橋　敏郎、木村　美子、津上　勝、末松　廣郎、河本　展良、倉本　愛実、達城　政仁、松﨑　英章、寒竹　啓太（執筆頁 1 頁～6 頁）

3. 遠隔授業に対するリメディアル教育・学修支援委員の取り組み
令和元年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要　第 17 号　共著
（概要）新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、遠隔授業を試行錯誤の中で実施した際の問題点や課題点を学生のアンケートからまとめた。遠隔授業システムの意見としては、多くの学生が授業視聴に問題ないと答えた反面、チャットサーバーに関しての問題点があげられた。遠隔授業を円滑に実施するためには、教職員と学生が共にそのシステムと周辺機器を十分理解する必要がある。
河上　淳一、烏山　昌起、神﨑良子、吉岡　奈々、四元　孝道、佐野　幹剛、室井　廣大、石橋　敏郎（執筆頁 1 頁～7 頁）

4.　リハビリテーション学部における中途退学者の原因分析と防止の取り組み（1）
令和元年 12 月　九州栄養福祉大学研究紀要　第 18 号　共著
（概要）これまでの中途退学者の原因分類・分析やリハビリテーション学部における様々な取り組みについてまとめてきた。中途退学者を減らすためには、日頃から学生としっかり目線を合わせて、時には少し離れた視点から学生を見て、学生の状況を正しく把握することが、適切な支援の始まりと考える。また、短期的な支援だけでなく、その学生が卒業後社会に出てからも、困難を乗り越えていけるような人間力を、長期的な視点から建学の精神の基づき支援（教育）していく必要がある。
室井　廣大、佐野　幹剛、渕　雅子、石橋　敏郎（執筆頁 99 頁～111 頁）

【学会発表】
1. 高齢入院患者に対する低強度トレーニングの効果 －サルコペニアの有無による影響－
平成 30 年 10 月　第 40 回九州理学療法士・作業療法士合同学会（沖縄）　共著
（概要）高齢入院患者に対する低強度トレーニングの安全性と効果を調べ、さらにサルコペニアの有無がリハの効果に与える影響を調べた。サルコペニアを有する高齢入院患者に対する低強度トレーニングは、安全で効果的であり、WBI・10m 歩行速度・TUG・FIM に有意な改善が得られた。サルコペニアを有する患者に対する低強度トレーニングは、安全で有効であった。しかし同時に、栄養状態の影響も考えられ、運動機能面や栄養面など包括的アプローチが必要である。
共同演者：財前　暁、河本展良、中井恵美、末松廣郎、倉本　愛実、松﨑　英章　寒竹　啓太、石橋敏郎、木村美子

2. 高齢入院患者に対する低強度運動の効果－フレイル状態への影響－
平成 31 年 2 月　第 28 回福岡県理学療法士学会　共著
（概要）リハビリテーションが処方された 65 歳以上の高齢入院患者高齢入院患者に対する低強度運動は、身体機能だけでなく ADL 能力の向上に対して有効であり、同時にフレイル状態の改善が認められた。低強度運動によるフレイル状態の変化に与える影響要因として、歩行速度と 6 分間歩行試験、FIM セルフケア項目の各変化量が抽出された。
共同演者：倉本　愛実、末松廣郎、財前　暁、河本展良、松﨑　英章、寒竹　啓太、石橋敏郎、木村美子

3. 高齢運動器疾患に対する電気刺激療法を併用した低強度筋力増強蘊奥の効果
令和元年 9 月　第 27 回日本物理療法学会学術大会（東京）　共著

| | | |
|---|---|---|
| | （概要）運動器疾患を有した高齢入院患者に対して、低強度筋力増強運動と電気刺激療法の併用が筋力改善に有効であるかを検討した結果、大腿四頭筋に対して実施した低周波刺激による電気刺激の併用による効果を確認できた。また、電気刺激療法による痛みや不快感などの訴えは認めなかった。<br>共同演者：寒竹　啓太、松﨑　英章、末松廣郎、河本展良、倉本　愛実、達城　政仁、木村美子、石橋敏郎 | |
| 主な社会活動 | ・障害者スポーツ講習会講義（初級）<br>令和５年１月<br>北九州市障害者スポーツセンター（北九州） | 障害者スポーツ指導者を目指す受講者に対して、スポーツ傷害に対する安全管理について具体的な症例を挙げて受講者に説明した。 |
| | ・福岡県理学療法士会　卒前卒後教育検討委員会<br>令和２年４月～現在に至る | 福岡県理学療法士会の理学療法士における卒前・卒後教育における課題を分析・検討して、その有効な対策を講じる委員会に所属して活動している。 |
| | ・行橋市・苅田町・みやこ町介護認定審査会委員<br>平成30年４月～現在に至る | 介護認定審査会の二次判定を行う |
| 所　属　学　会 | 公益社団法人日本理学療法士協会・学会<br>日本物理療法学会<br>理学療法科学学会<br>九州教育学会<br>コ・メディカル形態機能学会 | 平成 2 年 4 月～現在に至る<br>平成 6 年 4 月～現在に至る<br>平成 8 年 4 月～現在に至る<br>平成20年4月～現在に至る<br>平成22年4月～現在に至る |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

ヒロシゲ　ケイイチ
廣滋 恵一　HIROSHIGE Keiichi　理学療法学科長・教授

| | |
|---|---|
| 所　　属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担 当 科 目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・理学療法評価学Ⅰ<br>・理学療法評価学統合演習Ⅰ・Ⅱ<br>・スタートアップ教育Ⅰ・Ⅱ<br>・医療人のための教育学Ⅱ<br>・理学療法ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ<br>・予防理学療法<br>・地域理学療法学<br>・先端医療と理学療法<br>・理学療法研究法演習<br>・理学療法総合研究<br>・臨床実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ<br>・園芸療法の基礎<br>・園芸療法実習<br>〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕<br>・健康科学特別講義Ⅰ・Ⅱ<br>・健康科学研究法特論Ⅰ・Ⅱ<br>・健康運動機能特論Ⅰ・Ⅱ<br>・特別研究Ⅰ・Ⅱ |
| 専 門 分 野 | ■　骨関節系理学療法<br>■　予防理学療法学<br>■　理学療法評価学<br>※日本理学療法士協会認定　専門理学療法士（運動器理学療法、スポーツ理学療法） |
| 最 終 学 歴 | 山口大学・大学院博士課程　医学系研究科 医療環境統御医学領域 環境保健医学分野　修了<br>（2008 年 10 月～2012 年 9 月） |
| 学　　位 | 博士（医学；山口大学）／修士（保健医療学；国際医療福祉大学）／学士（法学；北九州大学） |
| 職　　歴 | 労働福祉事業団 九州労災病院　理学療法士　（1995 年 4 月～2004 年 3 月）<br>労働者健康福祉機構 九州労災病院　理学療法士　（2004 年 4 月～2010 年 3 月）<br>九州労災病院 勤労者予防医療センター　理学療法士　（2010 年 4 月～2013 年 3 月）<br>九州栄養福祉大学リハビリテーション学部 准教授　（2013 年 4 月～ 2021 年 3 月）<br>九州栄養福祉大学 小倉南区キャンパス学生部 学生指導課指導主事・教務部教務課指導主事<br>（2019 年 4 月～ 2021 年 3 月）<br>九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科 准教授　（2019 年 4 月～ 2021 年 3 月）<br>九州栄養福祉大学リハビリテーション学部 理学療法学科長　（2021 年 4 月～現在に至る）<br>九州栄養福祉大学リハビリテーション学部 教授　（2021 年 4 月～現在に至る）<br>九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科 教授　（2021 年 4 月～現在に至る） |
| 教育上の業績 | 【臨床実習指導】<br>・臨床実習指導者講習会（厚生労働省）修了（第 2018－1－045 号）　（2019 年 2 月） |
| | 【非常勤講師】<br>・九州栄養福祉大学リハビリテーション学部　非常勤講師　（2012 年 4 月～2013 年 3 月）<br>（理学療法評価学技術論、基礎内部障害系理学療法論、臨床内部障害系理学療法論担当）<br>・北九州小倉看護専門学校　非常勤講師（臨床看護概論担当）　（2022 年 3 月～現在に至る） |
| | 【研修会講師・学会座長等】<br>・労働衛生コンサルタント会 腰痛予防対策講習会講師　（2013 年～2014 年）<br>・第 97 回福岡県理学療法士会学術研修大会 特別講演 司会　（2014 年　6 月）<br>・福岡県理学療法士会 平成 26 年度新人研修会 講師　（2014 年　9 月） |

・平成 26 年度北九州市民カレッジ講師 (2014 年 12 月)
・中央労働災害防止協会 腰痛予防対策講習会講師 (2014 年～2015 年)
・第 24 回福岡県理学療法士学会 特別講演 司会 (2015 年 2 月)
・第 1 回日本予防理学療法学会学術集会 座長 (2015 年 2 月)
・第 98 回福岡県理学療法士会学術研修大会 特別講演 司会 (2015 年 6 月)
・第 50 回日本理学療法学術大会 座長 (2015 年 6 月)
・福岡県理学療法士会平成 28 年度産業理学療法研修会 講師 (2016 年 11 月)
・日本理学療法士協会 予防理学療法研修会（基礎編） 講師 (2017 年 2 月)
・北九州市立年長者研修大学校周望学舎シニアカレッジ 講師 (2018 年 10 月)
・第 5 回日本予防理学療法学会学術大会 大会長 (2018 年 10 月)
・第 5 回日本予防理学療法学会学術大会 公開講座・特別講演 座長 (2018 年 10 月)
・第 6 回日本運動器理学療法学会学術大会 一般演題 座長 (2018 年 12 月)
・第 28 回福岡県理学療法士会学会 学会長 (2019 年 2 月)
・第 28 回福岡県理学療法士会学会 特別講演 司会 (2019 年 2 月)
・韓国慶尚南道物理治療士会 2019 日韓学術交流教育講演 講師 (2019 年 4 月)
・臨床実習指導者福岡県講習会 講師（国際医療福祉大学) (2019 年 7 月)
・臨床実習指導者福岡県講習会 講師（九州栄養福祉大学) (2019 年 8 月)
・臨床実習指導者福岡県講習会 講師（九州医療スポーツ専門学校) (2019 年 10 月)
・九州理学療法士学術大会 2019（鹿児島）セミナー⑤ 講師 (2019 年 10 月)
・第 6 回日本予防理学療法学会学術大会 ポスターセッション 座長 (2019 年 10 月)
・福岡県理学療法士会 介護予防推進ﾘｰﾀﾞｰｽﾃｯﾌﾟｱｯﾌﾟ研修会 ﾊﾟﾈﾘｽﾄ (2022 年 2 月)
・大分県理学療法士協会 e-Learning コンテンツ作成・講師 (2022 年 2 月)
・日本予防理学療法学会 第 7 回サテライト集会 口述演題 座長 (2022 年 5 月)
・九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡 副大会長、座長 (2022 年 11 月)
・第 32 回福岡県理学療法士学会 特別講演 I 座長 (2023 年 5 月)
・第 58 回日本理学療法学術研修大会 シンポジウム司会 (2023 年 5 月)
・第 10 回日本予防理学療法学会学術大会 ポスターセッション 座長 (2023 年 10 月)

主な研究活動

【著書】

1. 腰痛の理学療法とケア．理学療法 magazine．Vol.2, No.2 （2015 年）（分担共著）
2. 予防理学療法学要論． 医歯薬出版株式会社（2017 年）（分担共著）
3. Non communicable disease．理学療法ジャーナル．第 51 巻 3 号（2017 年）（分担共著）
4. 理学療法管理学．「学生の基礎学力補充教育」．医歯薬出版株式会社（2018 年）（分担共著）
5. 基礎科学を融合した理学療法推論の実際．運動と医学の出版社（2022 年）（分担共著）
6. Crosslink 理学療法学テキスト 義肢装具学．MEDICAL VIEW 社（2023 年）（分担共著, 編集）

【学術論文】

1. Keiichi Hiroshige, MH Mahbub, Noriaki Harada.
「Effects of whole-body vibration on postural balance and proprioception in healthy young and elderly subjects: a randomized cross-over study.」
(Journal of Sports Medicine and Physical Fitness. 54(2):216-24, 2014)

2. 廣滋恵一，石橋敏郎，室井廣大，大丸幸
「リハビリテーション学部オープンキャンパス参加者へのアンケート調査と入学志望向上への一考察（第一報）.」（九州栄養福祉大学研究紀要 第 11 号 p.63-80, 2014）

3. 廣滋恵一，髙橋精一郎，神﨑良子，Hossain Mahbub
「全身振動刺激が自律神経系および呼吸機能に及ぼす影響について.」
（九州栄養福祉大学研究紀要 第 11 号 p.51-62, 2014）

4. 廣滋恵一，四元孝道，室井由起子
「表面筋電図を用いた咀嚼筋活動量評価と記憶力との関連性について.」
（九州栄養福祉大学研究紀要 第 12 号 p.11-18, 2015）

【学術論文・共同研究】

1. 井元　淳、豊永敏宏、出口純子、福田里香、廣滋恵一
「勤労者の上腕―足首脈波伝播速度に影響を与える要因の検討.」
（日本職業・災害医学会会誌　第 62 巻　第 2 号　p.104-110, 2014）

2. 吉田遊子，千代丸信一，石橋敏郎，廣滋恵一，中藤佳絵，神﨑良子，井元淳
「本学理学療法学科における客観的臨床能力試験（OSCE）の試行.」
（九州栄養福祉大学研究紀要　第 11 号 p.93-108, 2014）

3. 四元孝道，髙橋精一郎，廣滋恵一，長尾哲男，奥村克博，渡邉恭弘，萩原隆二
「座位バランス訓練装置の開発（第 2 報）～片麻痺患者のバランス反応～.」
（九州栄養福祉大学研究紀要　第 12 号 p.87-94, 2015）

4. 四元孝道，髙橋精一郎，廣滋恵一，長尾哲男，奥村克博，渡邉恭弘，島田泰裕
「座位バランス訓練装置の開発（第 3 報）～症例報告～.」
（九州栄養福祉大学研究紀要　第 13 号 p.259-264, 2016）

5. Atsushi Inomoto, Rika Fukuda, Junko Deguchi, Gohei Kato, Ryoko Kanzaki, Keiichi Hiroshige, Kouichi Nakamura, Keisuke Nakano, Toshihiro Toyonaga
「The association between the body composition and lifestyle affecting pulmonary function in Japanese workers.」(J. Phys. Ther. Sci. 28: 2883–2889, 2016)

6. 佐伯　覚（研究代表者）、松嶋康之（研究分担者）、廣滋恵一ほか（研究協力者）
「中高年労働者の体力増進のための予防的リハビリテーションの産業保健への応用に関する研究」（労災疾病臨床研究事業費補助金　総合研究報告書　2018）

7. Mahbub MH, Hase Ryosuke, Yamaguchi Natsu, Takahashi Hidekazu, Kawano Yoshinao, Hiroshige Keiichi, Tanabe Tsuyoshi, Harada Noriaki
「Concomitant changes and response patterns in finger vibrotactile perception and blood flow induced by acute exposure to hand-arm vibration」(The bulletin of the Yamaguchi Medical School 65(1-2), 11-20, 2018)

8. MH Mahbub, Keiichi Hiroshige, Natsu Yamaguchi, Ryosuke Hase, Noriaki Harada, Tsuyoshi Tanabe
「A systematic review of studies investigating the effects of controlled whole-body vibration intervention on peripheral circulation.」（Clinical Physiology and Functional Imaging. Vol. 39 (6), 363-377, 2019）

9. MH. Mahbub, Ryosuke Hase, Natsu Yamaguchi, Keiichi Hiroshige, Noriaki Harada, A. N. M. Nurul Haque Bhuiyan, Tsuyoshi Tanabe
「Acute Effects of Whole-Body Vibration on Peripheral Blood Flow, Vibrotactile Perception and Balance in Older Adults」(Int. J. Environ. Res. Public Health. 17 (3), 2020)

10. 吉田遊子、井元淳、中藤佳絵、神﨑良子、廣滋恵一、四元孝道、橋元隆
「地域在住高齢女性における尿失禁に影響を与える要因」
（九州栄養福祉大学研究紀要　第 19 号 p1-12, 2022）

11. Tsuyoshi Harada, Tetsuya Tsuji, Takumi Yanagisawa, Junya Ueno, Nanako Hijikata, Aiko Ishikawa, Keiichi Hiroshige, Daisuke Kotani, Takashi Kojima, Takeo Fujita
「Skeletal muscle mass recovery after oesophagectomy and neoadjuvant chemotherapy in oesophageal cancer: retrospective cohort study.」(BMJ Support Palliat Care. 2023, spcare-2023-004245. Online ahead of print.)

**【学会発表】**

1. MH Mahbub, Ryosuke Hase, Natsu Yamaguchi, Hidekazu Takahashi, Keiichi Hiroshige, Noriaki Harada and Tsuyoshi Tanabe
「A review of exposure to whole-body vibration and associated changes in peripheral circulation.」第 16 回日本予防医学会学術総会（2018 年 6 月）

2. MH Mahbub, Ryosuke Hase, Natsu Yamaguchi, Hidekazu Takahashi, Keiichi Hiroshige, Noriaki Harada and Tsuyoshi Tanabe
「Occupational versus therapeutic exposure to whole-body vibration: a review in light of associated changes in peripheral circulation.」

| | |
|---|---|
| | 第 62 回 中国四国合同産業衛生学会（2018 年 11 月） |
| | 3. MH Mahbub, Keiichi Hiroshige, Ryosuke Hase, Natsu Yamaguchi, Noriaki Harada, Tsuyoshi Tanabe<br>「Exposure to Acute Whole Body Vibration of Three Different Frequencies: Physiological and Physical Changes in the Elderly.」<br>Proceedings of the 54th UK Conference on Human Responses to Vibration, Edinburgh, 24-26 September 2019（2019 年 9 月） |
| | 4. 谷岩 温郎,、廣滋 恵一<br>「鏡視下腱板修復術後患者の入院中身体活動および肩関節術後短期成績の調査　糖尿病合併例との比較検討」<br>第 5 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（2021 年 11 月） |
| | 5. 横山しおり、丹生 竜太郎、鐵見 竜司、廣滋 恵一<br>「回復期脳卒中片麻痺患者の静的・動的バランス能力が排泄動作自立に及ぼす影響」<br>九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡（2022 年 11 月） |
| 主な社会活動 | ・公益社団法人福岡県理学療法士会 理事　（2013 年度～現在に至る）<br>・北九州マラソン 2014（医療・救護）ボランティア　（2014 年 2 月）<br>・公益社団法人日本理学療法士協会 代議員　（2014 年度～2019 年度）<br>・日本予防理学療法学会 運営幹事　（2014 年度～2020 年度）<br>・福岡県理学療法士会 学術誌編纂委員会 委員長　（2015 年度～2018 年度）<br>・福岡県理学療法士会 査読委員会 委員長　（2015 年度～2018 年度）<br>・福岡県理学療法士会 研究助成審査会　委員長　（2015 年度～2018 年度）<br>・福岡県理学療法士会 組織検討委員会 委員　（2015 年度～2018 年度）<br>・日本理学療法士協会　組織・規則等 WG 委員　（2016 年度～2017 年度）<br>・同上　臨床実習教育の手引作成執行委員会　委員　（2017 年度～2019 年度）<br>・日本理学療法士協会 臨床実習の手引作成委員会委員長　（2019 年度～2021 年度）<br>・公益社団法人 福岡県理学療法士会 副会長　（2019 年度～現在に至る）<br>・日本理学療法士協会 指定規則等検証部会　部会員　（2021 年度～2022 年度）<br>・公益社団法人福岡県理学療法士会 倫理委員会 委員長　（2021 年度～2023 年度）<br>・日本理学療法士協会 卒前卒後教育ｼｰﾑﾚｽ化検討部会 部会員　（2021 年度～現在に至る）<br>・日本予防理学療法学会　理事　（2021 年度～現在に至る）<br>・日本予防理学療法学会雑誌　編集委員長　（2021 年度～現在に至る）<br>・日本理学療法学会連合　機関誌調整委員会　（2021 年度～現在に至る）<br>・小倉北区すこやかライフ推進協議会　委員　（2021 年度～現在に至る）<br>・福岡県理学療法士連絡協議会　委員　（2022 年度～現在に至る）<br>・日本理学療法士協会 指定規則等検討部会　部会員　（2022 年度～現在に至る）<br>・北九州市高齢者支援と介護の質の向上推進会議構成員　（2023 年度～現在に至る）<br>・公益社団法人 日本理学療法士協会 代議員　（2024 年度～現在に至る）<br>・福岡県理学療法士会 副会長 兼 北九州ブロック長　（2024 年度～現在に至る） |
| 所 属 学 会 | 公益社団法人　日本理学療法士協会会員<br>一般社団法人　日本予防理学療法学会会員<br>一般社団法人　日本運動器理学療法学会会員<br>一般社団法人　日本理学療法教育学会会員<br>公益社団法人　福岡県理学療法士会会員<br>日本職業・災害医学会会員 |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

奥田 憲一（オクダ ケンイチ）　OKUDA Ken-ichi　教授

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・小児理学療法Ⅰ<br>・人間発達学<br>・地域理学療法学　・先端医療と理学療法<br>・理学療法総合演習　・理学療法卒業研究<br>・理学療法ゼミナールⅠ　・理学療法ゼミナールⅡ　・理学療法ゼミナールⅢ<br>・臨床実習Ⅰ　・臨床実習Ⅱ　・臨床実習Ⅲ<br>・臨床実習Ⅳ　・臨床実習Ⅴ<br>〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕<br>・健康科学特別講義Ⅰ　・健康科学特別講義Ⅱ<br>・健康科学研究法特論Ⅰ　・健康科学研究法特論Ⅱ<br>・小児リハビリテーション支援特論Ⅰ　・小児リハビリテーション支援特論Ⅱ<br>・特別研究Ⅰ　・特別研究Ⅱ |
| 専門分野 | ■　小児理学療法（特に重症心身障害）<br>■　人間発達学 |
| 最終学歴 | 久留米大学大学院 医学研究科　博士課程 個別最適医療系 高次脳疾患学専攻　単位修得退学 |
| 学位 | 博士（医学）久留米大学　甲第 1197 号 |
| 職歴 | 九州子ども発達研究センター　指導員　（1985 年 4 月～1987 年 3 月）<br>佐賀整肢学園　医療課　理学療法士　（1991 年 4 月～1995 年 3 月）<br>旭川荘療育センター児童院　療育課　理学療法士　（1995 年 4 月～2002 年 3 月）<br>旭川荘療育センター児童院　療育課　療育主任，理学療法士　（2002 年 4 月～2004 年 3 月）<br>柳川療育センター　診療技術科　主任，理学療法士　（2004 年 4 月～2008 年 5 月）<br>柳川療育センター　リハビリテーション室　室長代理，理学療法士　（2008 年 6 月～2010 年 5 月）<br>柳川療育センター　リハビリテーション室　室長，理学療法士　（2010 年 6 月～2012 年 3 月）<br>医療福祉センター聖ヨゼフ園　リハビリテーション部次長，理学療法士　（2012 年 4 月～2017 年 3 月）<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部理学療法学科 教授　（2017 年 4 月～現在に至る）<br>九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科 教授　（2019 年 4 月～現在に至る） |
| 教育上の業績 | **(1)教育内容の充実及び学生の習熟度向上に向けた取組等**<br>○パワーポイントを用いた講義および資料の配布<br>主に小児理学療法Ⅰ，人間発達学の講義において，パワーポイントを用いて講義内容の資料を事前に配布し，講義の要点を明確にした．講義終了時に講義内容の復習のため，「振り返りテスト」を実施した．<br>○学生同士で実践する実技演習<br>主に小児理学療法Ⅰ，理学療法ゼミナールⅡ・Ⅲにおいて，学生に 2～3 人のグループを構成させ，一人がモデルとなり，正常な成人の背臥位，腹臥位，座位，立位での支持面の分布と，頭部や上肢，下肢の位置関係を変化させることにより，支持面がどのように変化するかを実感させる．その後，障害を持つことによって背臥位，腹臥位，座位，立位での支持面がどのような状態に変化するかを感じさせ，その状態で運動を開始，遂行することの困難性を理解させ，単なる動作パターンの記述に終わらない動作分析の方法を理解させた．<br>○動画の使用<br>主に小児理学療法Ⅰ，人間発達学の講義において，新生児期から歩行獲得までの定型運動発達の過程を視覚的に理解するために，正常運動発達を「原始反射」，「粗大運動」，「巧緻運動」，「吸綴・摂食」の 4 つの領域に分類して編集した動画を教材に用いた．また脳性まひ，二分脊椎， |

| | |
|---|---|
| | 進行性筋ジストロフィー，ダウン症候群，主要小児整形外科疾患，重症心身障害などの各疾患については，臨床像の視覚的なイメージを持つことが重要であるため，乳幼児期，児童期，青年・成人期などの時期に分類し，それぞれの時期の臨床像をまとめた動画を使用した． |
| | **⑵作成した教科書・教材** |
| | ○定型発達英文副読本<br>ビデオ“A Neuro-Developmental Analysis of Normal Movement Patterns: Neonate-Twalve Months”（Children’s Hospital Medical Centre, London UK）の全ナレーションをディクテイトし和文に書き下ろしたものを副読本として作製している． |
| | ○感覚入力で挑む　感覚・運動機能回復のための理学療法アプローチ（文光堂）2016.<br>本人担当部分：PartⅢ 9 ミニレクチャー 末梢からの求心性入力２　245 - 248 頁<br>常任編集：斉藤秀之，加藤　浩　共著者：奥田憲一，他 35 名 |
| | ○小児理学療法学テキスト 改訂第３版（南江堂）2018.<br>本人担当部分：第 14 章　重症心身障害児（者）209 - 223 頁<br>監修：細田多穂　編集：田原弘幸，大城昌平，小塚直樹<br>共著者：奥田憲一，他 25 名 |
| | ○こだわり抜く関節可動域運動（文光堂）2021.<br>本人担当部分：PartⅤ 2 小児・神経障害に対する関節可動域運動<br>1）脳性麻痺　247 - 257 頁<br>常任編集：斉藤秀之，加藤　浩　共著者：奥田憲一，他 28 名 |
| | ○実践に基づく重症心身障害児者の理学療法ハンドブック（(株）ともあ）2021.<br>本人担当部分：2-05　非対称変形に対する理学療法　134 - 143 頁<br>編著：金子断行，花井丈夫，平井孝明，染谷淳司　共著者：奥田憲一，他 10 名 |
| | ○15 レクチャーシリーズ　理学療法テキスト　小児理学療法学（中山書店）2022.<br>本人担当部分：Lecture 8　重症心身障害　83 - 92 頁<br>総編集：石川　朗　責任編集：奥田憲一，松田雅弘，三浦利彦<br>共著者：奥田憲一，他 12 名 |
| 主な研究活動 | 【著書】 |
| | **1. 感覚入力で挑む　感覚・運動機能回復のための理学療法アプローチ（文光堂）2016.**<br>本人担当部分：　PartⅢ 9 ミニレクチャー 末梢からの求心性入力２　245 - 248 頁<br>常任編集：斉藤秀之，加藤　浩　共著者：奥田憲一，他 35 名 |
| | (概要)<br>虚弱高齢者・脳卒中・小脳失調・運動器疾患・スポーツ障害の予防・子供・慢性疼痛の場合，どのように感覚入力を適用しているかを解説し，体性感覚と運動感覚・能動的知覚・身体図式・脳の可塑性・異種感覚入力の統合・知覚機能に対する運動の実時間的影響・タイミングの感覚・運動イメージの脳内再生・ヒトの発達に伴った運動に関連する感覚において理学療法に必要な「感覚」の知識を小児・神経障害の立場から解説した． |
| | **2. 小児理学療法学テキスト 改訂第３版（南江堂）2018.**<br>本人担当部分：第 14 章　重症心身障害児（者）209 - 223 頁<br>監修：細田多穂　編集：田原弘幸，大城昌平，小塚直樹<br>共著者：奥田憲一，他 25 名 |
| | (概要)<br>理学療法士にかかわる小児疾患について，概要とその理学療法についてわかりやすく解説したテキストである．小児理学療法に欠かせない正常運動発達と姿勢反射などの基本知識から，脳性麻痺と二分脊椎症・進行性筋ジストロフィーなど運動機能発達障害を呈する代表的な疾患を収載している． |
| | **3. こだわり抜く関節可動域運動（文光堂）2021.**<br>本人担当部分：PartⅤ 2 小児・神経障害に対する関節可動域運動<br>1）脳性麻痺　247 - 257 頁<br>常任編集：斉藤秀之，加藤　浩　共著者：奥田憲一，他 28 名 |
| | (概要) |

PART Ⅰでは関節可動域運動をする前に押さえておくべき基礎知識を，PART Ⅱ～Ⅳでは上肢・下肢・体幹における運動器障害に対する関節可動域運動を，PART Ⅴでは脳卒中・脳性麻痺に対する関節可動域運動を，PART Ⅵでは高齢者の廃用症候群に対する関節可動域運動について解説している．

**4. 実践に基づく重症心身障害児者の理学療法ハンドブック（(株) ともあ）2021.**
本人担当部分：2-05　非対称変形に対する理学療法　134 - 143 頁
編著：金子断行，花井丈夫，平井孝明，染谷淳司　共著者：奥田憲一，他 10 名

(概要)
重症心身障害児（者）の歴史的背景をふまえた療育の理念や理学療法概念と変遷，理学療法技術の理論的背景や裏付けとともに，「発達保障」と「生活保障」の両面から実践的・具体的なアプローチの方法が詳細に説明されている．本書の特徴として初心者や経験の少ない理学療法士に配慮して図表や写真を豊富に挿入している．

**5. 15 レクチャーシリーズ　理学療法テキスト　小児理学療法学（中山書店）2022.**
本人担当部分：Lecture 8　重症心身障害　83 - 92 頁
総編集：石川　朗　責任編集：奥田憲一，松田雅弘，三浦利彦
共著者：奥田憲一，他 12 名

(概要)
小児期に発症する疾患と障害に対するリハビリテーションについて，原因，症状，評価，予後予測についての基礎的な知識を学習することができる．基礎的な知識をふまえて，医学的・社会的背景を考慮した適切な理学療法を理解し，国際生活機能分類（ICF）に基づいた介入を実践できるようになることを目指した教科書である．

【訳書】

**1. 脳性まひ児の早期治療，第 2 版（原著 第 3 版）（医学書院）2003.**
本人担当部分：10 脳性まひにおける研究　281 - 301 頁
監訳：今川　忠男　　共訳者：奥田憲一，他 12 名

(概要)
脳性まひ児の能力と障害について系統だった評価を行い，適切な早期治療プログラムを立案し実施していくことの重要性を解説した．国際的に高い評価を得た所の改訂版であり，医学的側面・障害モデル・Evidence-based Intervention・家族支援・効果判定・研究などが新しく追加された．

**2. 脳性まひ児の 24 時間姿勢ケア　-The Chailey Approach to Postural Management-（三輪書店）2006.**
本人担当部分：4　理論的基盤，4.8 骨の適応性　74-76 頁
4.9　姿勢能力と筋骨格系の関連性　77-84 頁
6　臨床への展開，6.8 症例検討　158-162 頁

(概要)
脳性まひ児が抱える問題には，移動や姿勢保持などの身体能力，学習などの知的能力，家族や友人を含めた社会適応性など様々な側面がある．本書では，特に重度な脳性まひ児が示す「姿勢や姿勢保持」などの身体的能力に焦点をあて，姿勢能力評価および発達生体力学的原則に基づいた治療方法，さらに姿勢ケア器具を具体的に紹介している．

【学術論文】

**1. 奥田憲一，白川泰彦，長原真也，松永美幸，中村早紀，筏ユカリ，長野清一郎，濵本孝弘，加藤　浩**
**：「体重免荷時の自動介助運動が重症心身障害者の股関節周囲筋の筋活動に及ぼす効果」**
発表雑誌：理学療法学、第 42 (2)号、188-189

(概要)
日本理学療法士協会，平成 25 年度研究助成報告書論文．重症心身障害者 2 例に対してユニバーサルフレームを用い体重の 2/3 を免荷し，立位での自動介助運動を 10 分間行った結果，単関節筋である中殿筋，大殿筋，長内転筋の筋活動が筋電図学的に示された．

2. 奥田憲一

:「体重免荷環境における全身運動が重症心身障害者の下肢筋活動と関節可動域に及ぼす影響.」

発表雑誌：久留米醫學會雑誌、第 78 (5・6)号、151-161

(概要)

重症心身障害者 20 例に対してユニバーサルフレームを用い体重の 3/4 を免荷し，立位での自動介助運動を 10 分間行った結果，股関節周囲の単関節筋の活動が認められ，ハムストリングの活動が減弱することを筋電図学的に示し，さらに股関節，膝関節における関節可動域の拡大が認められることを示した.

3. 吉田大記，髙嶋幸男，森田正治，奥田憲一，岩田欧介，岩田幸子

:「超早期産～正期産における脳発達障害の特異性ー脳病理からー.」

発表雑誌：理学療法科学、第 30 (5)号、737-740

(概要)

早期産乳幼児剖検例 62 例，正期産乳幼児剖検例 29 例に対し，在胎週数別の脳病変の特異性を抽出し，大脳白室の軟化巣や他の病変の好発部位が，出生時の在胎期間に応じて特異的であることを示した.

4. 岸本光夫，奥田憲一，山川眞千子（依頼原稿）

:「特別鼎談　重症心身障害ってなんだろう？」

発表雑誌：小児リハビリテーション.2019；4：11-19

(概要)

重症心身障害の中でも超重症児が増えており，それに伴い，子ども達と関わるセラピストも増えている．この重症心身障害という個別性の高い子ども達とどのように向き合っていけば良いのかというテーマに沿い，参考となる教科書もない頃から子ども達と向き合い，試行錯誤しながら小児リハビリテーションの礎を築いてきた 3 名のセラピストによる鼎談の記録.

5. 奥田憲一（依頼原稿）

:「重症心身障害児・者が示す非対称変形の定量評価」

発表雑誌：小児リハビリテーション.2019；5：49 - 58

(概要)

重症心身障害児・者が示す非対称変形は経年的に進行することを示し，進行を予防する手段の必要性を説き，そのために必要となる定量評価を提示した．特に非対称変形の中でも風に吹かれた股関節変形と，非常に早期から現れる胸郭の変形に対する Goldsmith らが考案した計測手技に対して図解を豊富に挿入しながら解説した.

6. 西島和秀，奥田憲一

:「一事例による快反応と瞬目を指標とした重症心身障害児における姿勢の快適性の検討」

発表雑誌：作業療法.2019；38：721-726

(概要)

重症心身障害児に対して姿勢ごとの快適性を快反応と瞬目率の変化から評価可能かを検討する研究である．方法はシングルケース実験法とビデオ撮影法を用い，ビデオ記録から快反応が見られた時間の平均と，外界刺激に対する応答的反応としての瞬目率を算出し，ベッド上背臥位と座位保持装置上座位を比較検討した研究である.

7. 早川智之，河上淳一，吉田遊子，奥田憲一，大峯三郎

:「理学療法学科の学内実習における学生満足度調査」

発表雑誌：九州栄養福祉大学研究紀要．2020；17：25-30

(概要)

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い，外出自粛や行動抑制が強いられ，厚生労働省からの通達では，実習施設の確保が困難である場合において学内実習を代替とすることが認められた．本研究は学内実習において，学生が実習で必要な能力をどの程度修得できたと感じ，また学内実習に対して，どの程度満足できたかを検討し，さらに，教員が求める実習修了水準に到達しているかを比較検討するものである.

【学会発表】

1. 奥田憲一，白川泰彦，長原真也
：「体重免荷時の自動介助運動が重症心身障害者の下肢筋活動に及ぼす影響ー症例検討ー.」
〈主　　催〉第 40 回日本重症心身障害学会学術集会
〈開 催 場 所〉京都府
〈開催年月日〉2014 年 9 月
(概要)
重症心身障害者 1 例に対してユニバーサルフレームを用い体重の 2/3 を免荷し，立位での下肢の屈曲，伸展の自動介助運動を 10 分間行った結果，単関節筋である中殿筋，大殿筋，長内転筋の筋活動が筋電図学的に示され，結果的に股関節，膝関節の関節可動域の拡大が認められたことを報告した.

2. 奥田憲一，白川泰彦，長原真也，松永美幸，中村早紀，西村優衣，加藤　浩
：「体重免荷時の自動介助運動が重症心身障害者の下肢筋活動と関節可動域に及ぼす影響.」
〈主　　催〉第 50 回日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉東京都
〈開催年月日〉2015 年 5 月
(概要)
重症心身障害者 20 例に対してユニバーサルフレームを用い体重の 3/4 を免荷し，立位での自動介助運動を 10 分間行った結果，股関節周囲の単関節筋である中殿筋，大殿筋，長内転筋の活動が認められ，ハムストリングの過活動が減弱することを筋電図学的に示し，さらに股関節，膝関節における関節可動域が拡大することを報告した.

3. 西島和秀，奥田憲一
：「24 時間ビデオ撮影を用いた知的に高い重症心身障害者の客観的生活評価」
〈主　　催〉第 45 回日本重症心身障害学会学術集会
〈開 催 場 所〉岡山県
〈開催年月日〉2019 年 9 月
(概要)
重症心身障害児施設では入所対象者を狭義の重症心身障害に限定しなかった経緯があり，知的に高い重症心身障害者も入所措置されている．中には援助があれば一人暮らしが可能な方であっても施設生活を余儀なくされ，活動制限と参加制限に強いストレスを抱えている方がいる．本研究は，この問題の解決に向けたチームアプローチの取り組みのために 24 時間ビデオ撮影法を取り入れたものである.

4. 三浦悠雅，西島和秀，奥田憲一
：「聴覚刺激の提示する順番と音量の差による反応を評価した一例」
〈主　　催〉第 46 回日本重症心身障害学会学術集会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2021 年 12 月
(概要)
本研究は音楽活動場面で，音を聞いて両手を叩いて喜びを表出する場合や，耳の穴に指を入れて嫌がる場合もある症例に対して，適切な提示する音の順番と音量を検討することで，より楽しめる音楽活動場面が提供できるのではないかと考え，タンバリンの鈴の数の違いによる音量変化や提示する順番の差により検討したものである.

5. 窪田りこ，西島和秀，奥田憲一
：「味覚の有無の評価が日中活動への参加拡大に繋がった重症心身障害児の一事例」
〈主　　催〉第 46 回日本重症心身障害学会学術集会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2021 年 12 月
(概要)
本研究は人や感覚刺激に対する応答が乏しく，日中活動が乏しかった症例に対して，過去に経口摂取の経験があることから，味覚がどの程度残存しているかをシングルケースデザイン（AB 法）とビデオ評価法を用いて評価し，その結果味覚の残存が推察されたものである．さらに，

| | |
|---|---|
| | この結果から病棟スタッフの行動が変容し，本症例の日中活動が改善した症例報告である． |
| | 6. 山口りか，西島和秀，奥田憲一<br>:「体重免荷環境における立位練習が病棟やリハスタッフとの触れ合いを生み<br>家族支援に繋がった一事例」<br>〈主　　催〉第 48 回日本重症心身障害学会学術集会<br>〈開 催 場 所〉千葉県<br>〈開催年月日〉2023 年 10 月 |
| | (概要) |
| | 本研究は独自で立位を保持できない重症心身障害者に対して，ユニバーサルフレームを用い |
| | 立位練習を行い，COVID-19 の感染対策により面会が 3 年以上できていないご家族に対して， |
| | リハスタッフと病棟スタッフが連携し，賞賛しながら立位練習を行う場面を動画に収めご家族 |
| | に提供し，ご家族も非常に喜ばれた取り組みの症例報告である． |

| | |
|---|---|
| 主な社会活動 | ・理学療法士講習会（基本編・理論）　(2013 年 7 月)<br>「重症心身障害児・者の療育～基本的概念と理学療法の<br>展開」：講師<br>・重症心身障害理学療法研究会セミナー　(2013 年 9 月)<br>「電動移動機器を用いて子どもたちの動きを引き出す」<br>：司会<br>・認定理学療法士（発達障害）必須研修会（福岡）　(2013 年 9 月)<br>「重症心身障害児と脳性麻痺」：講師<br>・こどもと家族とその未来のための九州連合（長崎）　(2013 年 10 月)<br>：講師<br>・特定非営利活動法人 障がい者より良い暮らし　(2013 年 11 月)<br>ネット研修会<br>「青年期以降の身体に障害を持つ人達の支援現場で<br>必要な視点とは」：講師<br>・こどもと家族とその未来のための九州連合：講師　(2014 年 2 月)<br>・重症心身障害理学療法研究会　(2014 年 6 月)<br>「文献抄読を通して考える重症児・者の非対称変形」<br>：講師<br>・理学療法講習会（基本編）　(2014 年 7 月)<br>「重症心身障害児・者の療育～基本的概念と理学療法の<br>展開」：講師<br>・こどもと家族とその未来のための九州連合（鹿児島）　(2014 年 8 月)<br>：講師<br>・日本重症心身障害学会学術集会 シンポジウム 1　(2014 年 9 月)<br>：重症心身障害児（者）へのこれからのリハビリ<br>テーション-理学療法の立場から-　：シンポジスト<br>・東京都理学療法士協会小児福祉部セミナー　(2014 年 10 月)<br>「脳性麻痺を持つ子ども達への理学療法の展望<br>-過去・現在　そして未来へ」：講師<br>・こどもと家族とその未来のための九州連合：講師　(2015 年 1 月)<br>・理学療法講習会（基本編）　(2015 年 7 月)<br>「重症心身障害児・者の療育～基本的概念と理学療法の<br>展開」：講師<br>・宮崎県理学療法士会神経研究部会研修会「小児症例の事　(2015 年 8 月)<br>例検討」：講師<br>・重症心身障害看護師研修会 公開講座　(2015 年 8 月)<br>「重症心身障害児者の理学療法 -正常発達からみた<br>重症児者の呼吸とこれからの理学療法-」：講師 |

・小児理学療法研修会 (2015 年 9 月)
「重症心身障害児・者の評価と理学療法への展開
～呼吸理学療法を中心に～」：アシスタント
・重症心身障害理学療法研究会セミナー (2015 年 11 月)
「オープンディスカッション」：コーディネーター,
「特別セッション」：話題提供, 「第三分科会 動く」
：話題提供
・日本神経理学療法学会学術集会 (2015 年 11 月)
「シングルケーススタディーシンポジウム」
：シンポジスト
・第 51 回 日本理学療法学術大会「口述演題（神経）08」 (2016 年 5 月)
：座長
・宮崎県理学療法士会神経研究部会研修会「小児症例の (2016 年 7 月)
事例検討」：講師
・小児理学療法研修会「重症心身障害児・者に対する評価 (2016 年 10 月)
と実践」：講師
・第 3 回 日本小児理学療法学会学術集会 (2016 年 11 月)
「特別講演：Cole Galloway 氏の業績から「動く」
ことへの取組みを考える」：講師
・平成 28 年度 専門領域小児系研修会 (2016 年 12 月)
「姿勢ケアのための評価～形態測定
・Chailey 姿勢能力発達レベルを中心に～」：講師
・小児リハビリテーション研修会　スキルアップ講習会 (2016 年 12 月)
「重症心身障がい児・者の療育～最新の知見と臨床への
応用～」：講師
・平成 29 年度 福岡県教育センター キャリアアップ (2017 年 8 月)
講座 ：講師
・日本重症心身障害福祉協会認定重症心身看護師研修会 (2017 年 8 月)
（公開講座）：講師
・平成 29 年度第 1 回宮崎県理学療法士会神経研究部会 (2017 年 9 月)
研修会：講師
・平成 30 年度福岡県教育センター キャリアアップ講座 (2018 年 8 月)
：講師
・九州小児リハビリテーション研修会 (2018 年 9 月)
（旧こどもと家族とその未来のための九州連合）：講師
・熊本小児療育研修会：講師 (2018 年 9 月)
・第 5 回 日本小児理学療法学会学術大会 (2018 年 12 月)
シンポジウム　司会
・九州小児リハビリテーション研修会：講師 (2019 年 3 月)
・平成 31 年度京都府教育委員会 (2019 年 7 月)
「切れ目ない支援体制整備」
地域開放講座「第 16 回　姿勢保持学習会」：講師
・九州小児リハビリテーション研修会 14：講師 (2019 年 8 月)
・第 102 回　福岡県理学療法士会学術研修大会 (2019 年 8 月)
「小児理学療法の今」：講師
・平成 31 年度　福岡県教育センター (2019 年 8 月)
キャリアアップ講座
肢体不自由のある子供の理解と指導：講師
・日本重症心身障害福祉協会認定　重症心身障害 (2019 年 8 月)
看護師研修会
「呼吸リハ・姿勢管理」（公開講座）：講師
・第 45 回　日本重症心身障害学会学術集会 (2019 年 9 月)
リハビリテーション関連①：座長
・第 6 回 日本小児理学療法学会学術大会　学術大会長 (2019 年 11 月)

| | | |
|---|---|---|
| | ・令和３年度　福岡県教育センター キャリアアップ講座<br>**肢体不自由のある子供の理解と指導**：講師（講義録画） | (2021 年 7 月) |
| | ・第 8 回　日本小児理学療法学会学術大会<br>**口述演題 3**：座長（リモート） | (2021 年 11 月) |
| | ・公益社団法人　大阪府理学療法士会<br>第 10 回 発達系リハビリテーションシンポジウム<br>**「6F-Words について」**：基調講演講師（リモート） | (2021 年 12 月) |
| | ・第 46 回　日本重症心身障害学会学術集会<br>**口演 1**：座長（リモート） | (2021 年 12 月) |
| | ・日本重症心身障害福祉協会認定　重症心身障害<br>看護師研修会：講師 | (2022 年 9 月) |
| | ・第 9 回　日本小児理学療法学会学術大会<br>教育セミナー5：座長 | (2022 年 12 月) |
| | ・令和 4 年度　小児理学療法研修会<br>**「障害を持つこども達の Fun について考える」**：講師 | (2023 年 2 月) |
| | ・九州スペシャルキッズサポート講習会<br>**「重症心身障害児の活動支援について」**：講師 | (2023 年 6 月) |
| | ・重症心身障害看護師 九州地区研究会 2023 年度研修会<br>**「重症心身障害児の姿勢ケアについて」**：講師 | (2023 年 11 月) |
| | ・九州小児リハビリテーション研修会 15：講師 | (2023 年 11 月) |
| | ・日本重症心身障害福祉協会認定　重症心身障害<br>看護師研修会<br>**公開講座「重症心身障害児者の姿勢ケア」**：講師 | (2024 年 3 月) |
| 所　属　学　会 | 日本理学療法士協会 | (1991 年 5 月～現在に至る) |
| | 日本小児神経学会 | (2018 年 4 月～現在に至る) |
| | 日本重症心身障害学会 | (2004 年 4 月～現在に至る) |
| | 日本赤ちゃん学会 | (2013 年 4 月～現在に至る) |
| | 日本子ども学会 | (2020 年 4 月～現在に至る) |
| | 重症心身障害理学療法研究会 | (2009 年 4 月～現在に至る) |
| | 理学療法科学学会 | (2014 年 4 月～現在に至る) |
| | 日本ボバース研究会 | (1995 年 8 月～現在に至る) |
| 受　賞　歴 | 第 43 回　日本理学療法学術大会　優秀賞 | (平成 21(2009)年 5 月) |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

太田（オオタ） 一樹（カズキ）　OTA Kazuki　教授

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部 理学療法学科〕<br>・生理学Ⅰ<br>・生理学Ⅱ<br>・神経内科学<br>・解剖生理学総合実習<br>〔リハビリテーション学部 作業療法学科〕<br>・生理学Ⅰ<br>・生理学Ⅱ<br>・神経内科学<br>・解剖生理学総合実習 |
| 専門分野 | ■生理学<br>■内科学<br>■神経内科学 |
| 最終学歴 | 九州大学・大学院　医学系研究科生理系専攻　博士課程単位取得満期退学 |
| 学位 | 博士（医学） |
| 職歴 | 聖マリア病院 研修医　内科系研修　(1990年6月～1992年3月)<br>医療法人鎌田病院 内科　(1996年4月～1997年3月)<br>医療法人鶴友会医院 内科　(1997年4月～1998年4月)<br>九州大学大学院医学研究院病態機能内科学　入局　(1998年5月～2010年3月)<br>・医療法人誠愛リハビリテーション病院 内科　(1998年6月～1999年3月)<br>・福岡東病院(現：国立病院機構福岡東医療センター)内科　(1999年4月～2000年3月)<br>福岡東病院附属リハビリテーション学院講師 併任　(1999年4月～2000年3月)<br>福岡東病院附属看護学校講師 併任　(1999年4月～2000年3月)<br>・医療法人白十字病院 内科　(2000年4月～2001年4月)<br>・日本赤十字社今津赤十字病院 内科　(2001年5月～2003年3月)<br>・医療法人誠愛リハビリテーション病院 内科　(2003年4月～2006年3月)<br>・Philipps-Universität Marburg 医学部免疫生理学教室（ドイツ連邦共和国ヘッセン州）研究員　(2006年7月～2009年3月)<br>・医療法人吉塚林病院 内科　(2009年4月～2010年3月)<br>鎌倉女子大学家政学部管理栄養学科 教授　(2010年4月～2018年3月)<br>鎌倉女子大学 保健センター長 併任　(2010年4月～2018年3月)<br>東京家政大学家政学部栄養学科 教授　(2018年4月～2024年3月)<br>東京家政大学大学院博士課程人間生活学専攻教授 併任　(2018年4月～2024年3月)<br>東京家政大学大学院修士課程健康栄養学専攻教授 併任　(2018年4月～2024年3月)<br>東京家政大学 保健センター所長 併任　(2020年4月～2023年3月)<br>九州大学医学部医学科・生命科学科 生理学 非常勤講師　(2018年9月～2021年3月)<br>九州大学医学部医学科・生命科学科 生理学 非常勤講師　(2022年9月～2022年10月)<br>九州大学医学部医学科・生命科学科 生理学 非常勤講師　(2023年7月～2024年3月)<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 教授　(2024年4月～現在に至る) |
| 教育上の業績 | 授業の流れに沿った資料の作成：授業で使用する教材として、授業の流れに沿った資料・問題集を作成し、配布している。高校で生物学を選択していない学生も安心して生理学を履修できるように、できるだけわかりやすい教材作成を心がけている。内容は「授業アンケート」などにより学生の意見を速やかに取り入れて更新し改善している。<br>2020年度オンライン授業における資料作成：新型コロナウイルス感染症のため、主にYouTubeを用いたオンデマンド型によるオンライン形式を中心に、PowerPoint による資料、課題とその解説を組み合わせた授業を行った。同授業について、学修・教育開発センターによるアンケートの結果、高評価であった授業のひとつに選ばれ、FD （Faculty Development）の一環として授 |

| | |
|---|---|
| | 業方法が全教職員に公開された。 |
| 主な研究活動 | 【著書】 |
| | 1. 脳梗塞　平成 11 年 10 月 メディカルレビュー社<br>（監修:藤島正敏, 編集:井林雪郎,長尾哲彦, 執筆者：佐渡島省三,北園孝成, 太田一樹 他 61 名） |
| | （概要）<br>脳循環の生理的状態と脳虚血時の脳循環代謝の変化、脳血流閾値、並びに脳梗塞急性期から慢性期までの脳循環代謝の経時的変化の項目を執筆。[p39-p46] |
| | 2. よりよい介護のための 89 のヒント　平成 14 年 8 月　メディカルレビュー社<br>（監修:岡山昌弘, 編集:長尾哲彦, 執筆者：石松美千代,久保博嗣, 太田一樹 他 46 名） |
| | （概要）<br>急病で内服薬が服用できない場合についての項目を執筆。　[p137-p138] |
| | 3.　最新 臨床栄養学　平成 25 年 1 月光生館<br>（編集:井上修二, 上原誉志夫,岡純,田中弥生, 執筆者：市原幸文,兒山左弓, 太田一樹 他 28 名） |
| | （概要）<br>神経疾患、クリティカルケアの項目を執筆。[p223-p234, p317-p328] |
| | 4. 最新 臨床栄養学 第 2 版　平成 27 年 3 月　光生館<br>（編集:井上修二, 上原誉志夫,岡純,田中弥生, 執筆者：市原幸文,兒山左弓, 太田一樹 他 29 名） |
| | （概要）<br>神経疾患、クリティカルケアの項目を執筆。[p235-p246, p333-p343] |
| | 5. 最新 臨床栄養学 第 3 版　平成 30 年 2 月　光生館<br>（編集:井上修二,上原誉志夫,岡純,田中弥生, 執筆者：市原幸文,内田淳一, 太田一樹 他 33 名） |
| | （概要）<br>神経疾患、クリティカルケアの項目を執筆。[p245-p246, p343-p354] |
| | 6. 栄養科学イラストレイテッド［演習版］解剖生理学ノート 第 3 版　令和 2 年 2 月 羊土社<br>（編集:志村二三夫, 岡純, 山田和彦, 執筆者：志村二三夫, 齋藤淑子, 太田一樹 他 15 名） |
| | （概要）<br>消化器系の項目を執筆。[p34-p53] |
| | 7. 栄養科学イラストレイティド 解剖生理学　第 3 版 令和 2 年 3 月　羊土社<br>（編集:志村二三夫, 岡純, 山田和彦, 執筆者：志村二三夫,齋藤淑子, 太田一樹 他 15 名） |
| | （概要）<br>消化器系の項目を執筆。[p49-p72] |
| | 8. 最新 臨床栄養学 第 4 版 令和 3 年 7 月 光生館<br>（編集:上原誉志夫,明渡陽子,田中弥生, 岡本智子, 執筆者：市原幸文, 太田一樹 他 36 名） |
| | （概要）<br>神経疾患、クリティカルケアの項目を執筆。[p245-p256, p343-p354] |
| 【学術論文】 | |
| | 1. VO2 and VCO2 following tourniquet deflation. 平成 4 年 1 月 Anaesthesia 47 巻 1(p65-68)<br>(Hoka S, Yoshitake J, Arakawa S, Ota K,Yamaoka A,Goto T) |
| | （概要）<br>一側下肢の整形外科的手術において、出血量を減らす目的で一般に圧気止血帯が使用される。止血帯開放前後で呼吸・循環の指標を観察したところ、開放後２分から８分の間、分時酸素取り込み量・二酸化炭素排泄量ともに増加した。特に二酸化炭素排泄量は開放によりおよそ３倍に達し、また有意な血圧低下、心拍数増加も観察されたことから、術後圧気止血帯を解放する際には、呼吸循環系の管理が重要であることを示した。 |

**2. 多発性根神経炎様症状を初発症状とし，多彩な臨床症状を呈したクリプトコッカス髄膜脳炎の一剖検例　平成４年６月　臨床と研究 69 巻６　(p1851-1855)**

（太田一樹，岡田靖，北園孝成，小笠原哲三,宇都宮英綱,伊藤裕司，佐渡島省三，藤島正敏）

（概要）

クリプトコッカス感染症では脊髄神経根を含めたびまん性の浸潤をきたす例は非常に稀である。下肢末梢から進展する筋力低下、腱反射消失および異常知覚などの多発性根神経炎様症状を初発症状として、視神経炎、難聴などの多彩な症状を呈し、病理学的所見で神経根にびまん性のクリプトコッカス浸潤を認めた髄膜脳炎の報告を行った。

**3. 再発を繰り返す動脈硬化性血栓性脳梗塞の一例-脳血流改善を目的とした昇圧療法-　平成 4 年 11 月　臨床と研究 69 巻 11 号 (p3536-3540)**

（太田一樹，岡田靖，朔義亮，桂木誠，宇都宮英綱，佐渡島省三，藤島正敏）

（概要）

脳には、血圧変動に対して脳血流を一定に保つという脳循環自動調節能が備わっている。脳梗塞急性期にはこの機序が障害され、血圧低下により脳血流量が低下し、脳虚血域の拡大や症状の悪化を来すことがある。アテローム血栓性脳梗塞再発を繰り返し、血圧下降を来した症例に対しドブタミンの持続少量投与による昇圧療法を選択することにより、血圧下降による脳血流量減少が予防でき、神経症状の改善が認められた。

**4.** Responses of the rat ventromedial hypothalamic neuron activity to tumor necrosis factor. 平成７年３月 Body Temperature and Metabolism,IPEC(International Press Editing Centre Incorporation), Tokyo (p34-36)

(Ota K, Katafuchi T, Motomura K, Baba S, Hori T)

（概要）

炎症性サイトカインでも腫瘍壊死因子(TNF)-α、-βの視床下部満腹中枢（腹内側核）に対する作用をラット脳スライス標本で観察したところ、TNF-αでは 40%の神経細胞が抑制性応答を、7%が興奮性応答を示した。一方 TNF-βでは 24.5%が興奮性応答を示したが、4.5%しか抑制性応答を示さなかったことから、TNF-α、-βは互いに異なる機序で視床下部満腹中枢に作用し、摂食抑制に働く可能性がある。

**5.** Prostanoids-dependent responses of AV3V neurons to blood-borne IL-1, a possible implication in the blood cytokines brain signal transduction. 平成７年３月 Body Temperature and Metabolism,IPEC(International Press Editing Centre Incorporation), Tokyo (p37-40)

(Katafuchi T, Ota K, Takaki A, Hori T)

（概要）

視床下部第三脳室前腹側領域(AV3V)は、血中 IL-1 の作用部位として注目されている。corticotropin-releasing hormone 含有神経細胞の起始核である室傍核や発熱に関与する視索前野と AV3V 神経細胞との間に双方向性に神経連絡が存在することを電気生理学的に証明した。このことは、IL-1 による糖質コルチコイドの放出や発熱の一部は AV3V を介している可能性がある。

**6. AV3V neurons that send axons to hypothalamic nuclei respond to the systemic injection of IL-1b.　平成９年８月 American Journal of Physiology　272 巻２号 Pt 2: R532-540**

(Ota K, Katafuchi T,Takaki A,Hori T)

（概要）

中枢神経系でも血液・脳関門のない第３脳室前腹側領域(AV3V)の機能について、電気生理学的手法並びに組織解剖学的手法により検討した。AV3V は、感染やがんなどで増加する炎症性サイトカインなどの末梢の情報を受け取り、プロスタグランディン系に情報変換した後、神経系を介して摂食や体温調節などに関与している視床下部へ情報を送っている可能性を示した。

**7. Differential effects of tumor necrosis factor-alpha and -beta on rat ventromedial hypothalamic neurons in vitro. 平成９年 12 月 American Journal of Physiology　272 巻６号 Pt 2:R1966-1971**

(Katafuchi T, Motomura K, Baba S, Ota K, Hori T)

（概要）

ラット脳スライス標本を用いて、満腹中枢である視床下部腹内側核の腫瘍壊死因子(TNF)に対する神経細胞の応答を観察した。TNF-αでは活動抑制を、TNF-βでは興奮性応答を示すものが多く、TNF-αの方がより少量で神経活動を変化させた。さらに TNF-αによる活動抑制はサリチル酸投与で減弱したことから TNF は腹内側核に影響を及ぼすこと、αとβで作用が異なること、プロスタグランジン系の関与が考えられた。

**8. 古典的ラクナ症候群を呈する急性期虚血性脳血管障害の分析-拡散強調画像による検討　平成14年3月　神経内科 56巻3号 (p263-269)**

（寺井敏, 玉城欣也, 太田一樹）

（概要）

古典的ラクナ症候群を呈した急性期脳梗塞症例に MRI 拡散強調画像(DWI)を撮影したところ、全例で病変が描出され、一部の症例では新鮮な病変が複数の領域で認められた。経時的な DWI 撮影により、一部の症例で発症後数日にわたって高信号域が拡大し、不安定な微小循環動態が持続している可能性が疑われた。DWI は神経所見の責任病巣や合併する新鮮梗塞巣の早期診断、発症後の変化を観察するのに有用と考えられた。

**9. 橋深部小梗塞の発症機序の検討-MRI 拡散強調画像を用いた解析-　平成14年6月　脳卒中 24巻2号 (p216-222)**

（太田一樹, 玉城欣也, 新井鐘一, 荒川修治, 藤島正敏）

（概要）

脳梗塞における発症機序の検討は治療・再発予防に重要である。拡散強調画像を用いて、急性橋深部小梗塞症例を橋底部腹側縁に接するものと接しないものに分け、さらに単発性か多発性に細分類して検討した。結果、橋底部腹側縁に接するものは主幹動脈狭窄、あるいは分枝粥腫型梗塞(branch atheromatous disease)による血栓性機序が多く、接しないものは高血圧性小血管病変による血栓性機序と塞栓性機序が疑われた。

**10. Role of substantia innominata in cerebral blood flow autoregulation. 平成19年1月 Brain Research 1135巻1号 (p146-153)**

(Ota K, Kitazono T, Ooboshi H, Kamouchi M, Katafuchi T, Aou S, Yamashita Y, Ibayashi S, Iida M)

（概要）

脳には血圧変動に対して脳血流を一定に保つ脳血流自動調節能が存在する。麻酔下・調節呼吸下ラットを用いて、脱血による自動調節能下限域を前頭葉皮質で測定した。アセチルコリン神経系起始核を含む無名帯の一側破壊では調節能が保たれていたが、両側破壊では有意に自動調節能が障害された。無名帯の破壊は組織学的に確認を行った。脳血流自動調節能に脳血管や平滑筋のみならず神経核が両側性に関与している可能性がある。

**11. Interleukin-1beta and insulin elicit different neuroendocrine response to hypoglycemia. 平成21年9月 Annals of New York Academy of Sciences 1153巻 (p82-88)**

(Ota K, Wildmann J, Ota T, Besedovsky HO, Del Rey A)

（概要）

インスリンやIL-1βの全身投与による低血糖の中枢性機序についてマウスを用いて検討したところ、インスリン投与時と比較して、IL-1β投与による低血糖では摂食亢進活動を認めず、視床下部ノルアドレナリン系活動の低下とセロトニン系活動の亢進が観察された。今回の結果から、IL-1βはインスリンと異なり、中枢神経系でも視床下部を介してグルコース恒常性を変化させている可能性がある。

**12. 在宅療養中のがん緩和治療期患者における血清アルブミン、トランスサイレチン濃度の検討　平成26年11月　日本病態栄養学会誌 17巻4号 (p493-500)**

（太田一樹,小澤竹俊,寺田竜美,村澤直子,今井洋史,安藤哲也,望月弘彦）

（概要）

栄養状態を表す指標のひとつとして、血清アルブミン(ALB)やトランスサイレチン(TTR)濃度などが用いられている。在宅療養中のがん緩和治療期患者において血清 ALB、TTR 濃度に影響を及ぼす因子を検討したところ、予後日数が短くなるほどALB、TTR とも低下する傾向が認められた。また TTR について、血清 C-反応性蛋白濃度が高度上昇を示さない場合においても、炎症の影響を考慮する必要があると考えられた。

**13. 内分泌攪乱化学物質ノニルフェノールと結合する新たなタンパク質の同定　平成27年4月 日本栄養・食糧学会誌 68巻2号 (p63-68)**

（伊藤太二,山﨑俊介,太田一樹,大村正史,親泊政一）

（概要）

ノニルフェノール(NP)は、エストロゲン受容体を介して性腺に作用することが知られている。今回、エストロゲン受容体以外の経路について、NP 存在下でアンドロゲン受容体に結合するタンパク質をヒト正常前立腺 cDNA ライブラリーから検索し、NP Receptor1(NPR1)を単離した。NPRA は NP と高い特異性で結合したことから、NP の性腺に及ぼす機能について NPR1 を介した機序も存在する可能性がある

| | |
|---|---|
| | **14. 女子大学生おける食事摂取状況と不定愁訴の関連　令和 2 年 6 月　東京家政大学研究紀要 第 60 巻 2 号　(p13-20)**<br>（関目綾子, 澤田めぐみ, 太田一樹, 田中寛, 和田涼子, 峯木眞知子）<br>（概要）<br>東京家政大学ブランディング事業に沿った研究である。女子大学生 158 名を対象に、質問票による食事状況および不定愁訴の調査を行った。食事状況と不定愁訴の関連について、疲れの症状がある群ではエネルギー摂取量が多く、特に菓子類由来のエネルギー摂取量が多かった。一方、やせすぎを自覚している群では複数の栄養素摂取量が少なかったなど、食事摂取状況と不定愁訴の一部に関連が認められた。 |
| | **15. 在宅終末期がん患者へ行うディグニティセラピーが家族員へ及ぼす影響　令和 3 年 1 月 がん看護（隔月刊）南江堂, 26 巻 1 号　(p79-84)**<br>（洲濱良子, 久保田明子, 吉川恵, 奥谷浩子, 一ノ瀬恭子, 太田一樹, 小澤竹俊）<br>（概要）<br>ディグニティセラピー(DT)は、終末期患者に対する精神療法的アプローチのひとつである。DT の家族に対する効果については不明の点も少なくないことから、DT を受けた患者の家族(95 家族）を対象に、家族フォローアップシートを用いた郵送による調査を行ったところ、DT は家族にとっても有用との回答が多くみられた。その効果は、看取りの後 6 か月以上経過後も持続しているなど、DT は家族に対する緩和ケアの一助になる可能性がある。 |
| | **16. 栄養学科成人女子大学生における動脈硬化のリスクファクターの現状と対策 -若年成人女性における血清脂質検査の必要性と運動および減塩指導の重要性-　令和 3 年 3 月　東京家政大学研究紀要 第 61 集 2 号 (p9-18)**<br>（澤田めぐみ, 冨田知里, 田中寛, 尾形真規子, 和田涼子, 太田一樹, 関目綾子, 峯木眞知子）<br>（概要）<br>大学生における動脈硬化の危険因子の現況と食習慣との関連を検討した。104 名の研究参加者中 12%に高 LDL コレステロール（LDL-C）血症が、13%に境界型高 LDL-C 血症が認められた。食事摂取量との関連について、高 LDL-C 血症の 90%でコレステロール摂取推奨量を超えていたなど、食生活の改善が必要な学生を少なからず認めた。動脈硬化予防のためにも学生の時から正しい食生活を身につける必要がある。 |
| | **17. 朝食摂取状況の違いが栄養素等摂取量・生化学データ・自覚症状に与える影響　令和 3 年 3 月　東京家政大学研究紀要　第 61 集 2 号　(p47-53)**<br>（峯木眞知子, 等々力陽子, 関目綾子, 冨田知里,太田一樹, 尾形真規子, 澤田めぐみ, 田中寛, 和田涼子）<br>（概要）<br>栄養学科の大学生を対象に、朝食摂取回数と食生活・栄養素等摂取状況、生化学データ、自覚症状との関連について分析した。朝食を欠食している群では睡眠関連の有訴者数が多く、栄養素・食品群別摂取量は少ない結果であった。血液生化学所見との間には有意な関係を認めなかったが、大学生の時期における食生活の乱れは将来の生活習慣病等に影響することから、この時期に朝食摂取の習慣を身につける必要がある。 |
| | **18. Blood levels of alfa-melanocyte stimulating hormone in refractory cancer cachexia　令和 3 年 5 月　Journal of Japanese Society of Clinical Nutrition 42 巻 2 号　(p191-202)**<br>（Kazuki Ota, Taeko Ota, Taketoshi Ozawa）<br>（概要）<br>代謝や炎症、食欲などに関与することが知られているα-メラノサイト刺激ホルモン(α-MSH)について、不応性悪液質(RCC)患者における動態を観察した。RCC 群では、在宅療養中の非がん患者に比べ、血清α-MSH 濃度は有意に高値であった。血清α-MSH 濃度に関与する因子について、炎症や栄養状態などとの関連を検討したところ、α-MSH は交感神経系を介してエネルギーバランスを調節している可能性が示された。 |
| | **19. 外来クローン病患者における生体インピーダンス法を用いた体組成の評価 令和 4 年 2 月 日本臨床栄養代謝学会「学会誌 JSPEN」4 巻 1 号　(p35-43)**<br>（斎藤恵子, 太田一樹, 長堀正和, 藤井俊光, 竹中健人, 大塚和朗, 井津井康浩, 篠原夏美, 松下由佳子, 岡本隆一）<br>（概要）<br>クローン病（CD)患者と対照群で、身体計測や生体インピーダンス法による体成分分析の結果を検討した。CD 群男性では、体成分分析でも位相角と筋肉の指標との間に正の相関を、細胞外水分比との間に負の相関を認めた。女性では、位相角と筋肉の指標との間に正の相関を認めた。位相角や細胞外水分比は、血液生化 |

学所見等の栄養指標とも関連を示したことから、CD 群の筋肉量低下の機序に、栄養状態が関与している可能性がある。

**20. The association of circulating endocannabinoids with cancer cachexia: A cross-sectional study 令和５年６月 Clinical Nutrition ESPEN 55 巻 (p20-29)**
(Ota K, Ota T, Nitta SI, Ueda T, Yamashita T, Ozawa T)

（概要）
がん悪液質におけるアラキドノイルエタノールアミド(AEA)と 2-アラキドノイルグリセロール(2-AG)の役割について検討した。AEA や 2-AG の作用や代謝は抗炎症薬の影響を受けることから、抗炎症薬の有無についても検討した。結果、AEA は食欲と、2-AG は中性脂肪と有意な関係を示したことから、がん悪液質では、抗炎症薬投与に関わらず AEA は食欲に、2-AG は脂質代謝に関与している可能性がある。

**【総説】**

**1.脳循環改善薬は有効か 平成 11 年７月 今月の治療（総合医学社）７巻７号 (p1115-1118)**
(太田一樹, 井林雪郎)

（概要）
慢性期脳血管障害患者に使用される脳循環改善薬について、脳循環改善薬の作用機序から臨床研究のメタアナリシスの結果までを概説した。また、脳循環改善薬の使用にあたっての注意事項や、投与後の薬効評価のポイントについても述べた。

**2. Evidence for the involvement of AV3V in the circulating IL-1 -to-brain communication 平成 12 年２月 Journal of Thermal Biology （Elsevier 社）25 巻 1-2 号 (p29-33)**
(Hori T, Katafuchi T, Ota K, Matsuda T, Oka T, Oka K)

（概要）
炎症誘発サイトカインは一般に血液脳関門を通過しないと言われている。このためサイトカインの情報が中枢神経系に伝達される機序として求心性迷走神経を介した経路、輸送体やセカンドメッセンジャーの利用、脳室周囲器官を介した経路などが考えられている。この総説では生理学などを専門とする研究者を対象に、これら経路の最新の知見を中心に免疫系から脳への情報伝達機構について概説した。

**3. 脳卒中の血圧管理 平成 16 年４月 BRAIN RESCUE （メディカルレビュー社） ４巻 (p13-15)**
(太田一樹,井林雪郎)

（概要）.
脳卒中急性期・慢性期の血圧管理に関する国際共同研究が積極的に行われている。その結果の中には以前は常識と考えられてきた治療戦略と異なる結果を示すものも少なくない。この総説では脳卒中を専門とする医師を対象に、米国・ヨーロッパ・日本の虚血性脳血管障害急性期治療のガイドラインを対比して紹介するとともに、最近行われた大規模臨床試験の結果を中心に脳卒中の血圧管理について概説した。

**4. 空腹・満腹のメカニズム -中枢性摂食調節機構について- 平成 24 年３月 鎌倉女子大学学術研究所報 12 巻 (p1-12)**
(太田一樹)

（概要）
空腹や満腹がおこる機序について、中枢性調節機構を中心に概説した。この領域は、近年、飛躍的に研究が進められている。この総説では、研究の歴史、古典的な視床下部腹内側核と外側野による二重調節説について述べるとともに、弓状核や室傍核などの視床下部諸核と各種情報伝達物質との関わり、中枢神経系と末梢諸臓器との相互連関、神経ネットワークによる摂食行動の出現機序などの最新の知見について述べた。

【学会発表】

**1. 多発性根神経炎を呈したクリプトコッカス髄膜脳炎の一剖検例**
〈主　　催〉第 114 回日本神経学会九州地方会
〈開 催 場 所〉鹿児島
〈開催年月日〉平成３年６月

（概要）(太田一樹, 岡田靖, 北園孝成, 佐渡島省三, 藤島正敏)
脊髄神経根を含めたびまん性の浸潤をきたし、多発性根神経炎様症状を初発症状としたクリプトコッカス感染症を経験した。クリプトコッカス感染による中枢神経病変は、通常、髄膜炎で発症し、次いで脳実質内に慢性肉下種性病変をきたすことが多い。脊髄神経根にびまん性の浸潤を生じることはまれであり、症例報告を行った。

**2. 再発を繰り返すアテローム血栓性脳梗塞に対する昇圧療法の試み**
〈主　　催〉第116回日本神経学会九州地方会
〈開 催 場 所〉鹿児島
〈開催年月日〉平成3年11月

（概要）(太田一樹, 北園孝成, 入江克実, 朔義亮, 岡田靖, 小笠原哲三, 宇都宮英綱, 鈴木智子, 桂木誠)
繰り返し脳梗塞の再発を来し、脳血管撮影で左中大脳動脈閉塞および後大脳動脈狭窄を認めた症例について、脳血流低下を予防するため少量ドブタミン持続投与により昇圧療法を行ったところ神経症状の改善が認められた。その治療経過について経時的脳血流SPECT所見と共に症例報告を行った。

**3. .第三脳室前腹側領域（AV3V）ニューロンの視床下部内情報経路と血中サイトカインに対する応答**
〈主　　催〉第70回日本生理学会大会
〈開 催 場 所〉山梨
〈開催年月日〉平成5年4月

（概要）(太田一樹, 高木厚司, 片渕俊彦, 堀哲郎)
麻酔下ラットにおいて、脳底部より第三脳室前腹側領域(AV3V)ニューロンの活動を記録し、視床下部視索前野(POA)及び室傍核(PVN)刺激に対する応答を調べたところ、①AV3Vニューロンは POA や PVN から興奮及び抑制性入力を受けていること、②終板器官(OVLT)を含む腹側部 AV3V には主に POA へ、正中核(MnPO)を中心とする背側部 AV3V へ、それぞれ軸索を送るニューロンが存在することがわかった。

**4. 第三脳室前腹側領域（AV3V）ニューロンの血中 IL-1β に対する応答とプロスタグランジンの関与**
〈主　　催〉第44回西日本生理学会
〈開 催 場 所〉宮崎
〈開催年月日〉平成5年10月

（概要）(太田一樹, 高木厚司, 片渕俊彦, 堀哲郎)
麻酔下ラットにおいて、多連微小電極による電気泳動法を用いて第三脳室前腹側領域(AV3V)ニューロン近傍に各種薬剤を投与したところ、血中サイトカインによる AV3V ニューロンの応答は 2M サリチル酸投与で減弱したことから、AV3V での情報変換機構へのアラキドン酸カスケード関与の可能性が考えられた。

**5. 血中サイトカイン-脳情報伝達機構における第三脳室前腹側領域（AV3V）ニューロンの役割**
〈主　　催〉第17回日本神経科学大会
〈開 催 場 所〉名古屋
〈開催年月日〉平成5年12月

（概要）(太田一樹, 高木厚司, 片渕俊彦, 堀哲郎)
麻酔下ラットにおいて第三脳室前腹側領域(AV3V)ニューロンと視床下部視索前野(POA)及び室傍核(PVN)との神経連絡を電気生理学に確認し、血中インターロイキン 1β(IL-1β)に対する応答を観察したところ、AV3V から POA や PVN に神経を送るニューロンの全例が IL-1β に応答したことから、血中サイトカインの少なくとも一部は、AV3V を介して視床下部に情報を送っている可能性がある。

**6. 血中サイトカイン・脳情報伝達機構における第三脳室前腹側領域（AV3V）ニューロンの役割とプロスタグランジン E2 の関与**
〈主　　催〉第71回日本生理学会大会
〈開 催 場 所〉香川
〈開催年月日〉平成6年3月

（概要）(太田一樹, 高木厚司, 片渕俊彦, 堀哲郎)
麻酔下ラットにおいて、多連微小電極による電気泳動法を用いて第三脳室前腹側領域(AV3V)ニューロン近傍に各種薬剤を投与したところ、AV3V ニューロンはプロスタグランジン E2(PGE2)局所投与に応答したことから、AV3V での情報変換機構への PGE2 関与の可能性が考えられた。

**7. Responses of the rat ventromedial hypothalamic neuron activity to tumor necrosis factor-α and -β: in vitro studies.**
〈主　　催〉The second Joint meeting of the Physiological Societies of Japan and U.K. and Eire

〈開 催 場 所〉名古屋
〈開催年月日〉平成 7 年 4 月

（概要）(Ota K, Katafuchi T, Motomura K, Baba S, Hori T)
視床下部腹内側核ニューロンの腫瘍壊死因子(TNF)-α,-βに対する応答をラット脳スライス標本を用いて観察したところ、TNF-α投与で 40%のニューロンが抑制性応答を、7%が興奮性応答を示した。一方 TNF-β投与では 24.5%が興奮性応答を示したが、4.5%しか抑制性応答を示さなかったことから、TNF は腹内側核に影響を及ぼすこと、その作用はαとβで異なる可能性がある。

**8. 脳幹梗塞の臨床的特徴：拡散強調画像を用いた検討**
〈主　　催〉第 154 回日本神経学会九州地方会
〈開 催 場 所〉熊本
〈開催年月日〉平成 13 年 6 月

（概要）(太田一樹, 玉城欣也, 寺井敏, 藤島正敏)
1999 年 1 月から 2 年間に白十字病院に入院し、MRI 拡散強調画像を撮影した 168 例の脳梗塞急性期患者について内頸動脈系・椎骨脳底動脈系・両血管系の 3 群に分けて検討を行った。結果、発症様式・神経症候には 3 群で明確な差はなかったものの椎骨脳底動脈系脳梗塞では糖尿病の合併が有意に多かった。さらに脳幹梗塞の発症機序について危険因子と病変部位や大きさとの関連についても報告した。

**9. Substantia innominata regulates CBF autoregulation.**
〈主　　催〉6th Meeting of the International Society for NeuroImmunomodulation.
〈開 催 場 所〉アテネ,ギリシャ共和国
〈開催年月日〉平成 17 年 9 月

（概要）(Ota K, Kitazono T, Ooboshi H, Kamouchi M, Kuroda J, Omae T, Kusuda K, Yamashita Y, Ibayashi S,Iida M)
ラットにおいて、脱血による脳血流の変化を観察したところ、一側の無名帯破壊では対照群と有意な差がなかったが、両側性の破壊では、脳血流低下率は対照群と比較して有意に大きかった。この結果から、無名帯は脱血による全身血圧低下に対して、両側性に脳血流維持に働いている可能性が示された。

**10. 脳循環自動調節能における無名帯（Substantia Innominata）**
〈主　　催〉第 17 回日本脳循環代謝学会総会
〈開 催 場 所〉名古屋
〈開催年月日〉平成 17 年 11 月

（概要）(太田一樹, 北園孝成, 大星博明, 鴨打正浩, 山下貴史, 井林雪郎, 飯田三雄)
無名帯は、覚醒・記憶・学習などに関与する領域である。以前から一側無名帯の刺激は大脳皮質脳血流を増加させるものの、一側破壊では血圧低下による脳循環自動調節能には影響を及ぼさないことが知られていた。今回ラット無名帯を両側性に破壊したところ、脱血による脳血流低下率は有意に大きかったことから、無名帯は血圧低下に反応して両側性に脳血管を拡張させ、脳血流維持に働いている可能性を報告した。

**11. IL-1β and insulin elicit different neuro-endocrine responses to hypoglycemia.**
〈主　　催〉7th Meeting of the International Society for NeuroImmunomodulation.
〈開 催 場 所〉リオ・デ・ジャネイロ,ブラジル連邦共和国
〈開催年月日〉平成 20 年 4 月

（概要）(Ota K, Wildmann J, Ota T, Besedovsky HO, Del Rey A)
IL-1 やインスリンは末梢のみならず中枢神経系に作用して、摂食抑制・血糖低下を示す。マウスへの IL-1 全身投与で、摂食抑制・低血糖が 8 時間以上持続した。長時間作用型インスリンで IL-1 と同等の低血糖をおこすと摂食はむしろ亢進した。結果、インスリンの摂食抑制は低血糖による摂食亢進よりも弱いこと、IL-1 は低血糖・摂食抑制共に持続することから IL-1 は中枢の血糖設定値を変えている可能性がある。

**12. 視覚性運動失調を主症状とした脳静脈洞血栓症による脳出血の 1 例**
〈主　　催〉第 288 回日本内科学会九州地方会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉平成 22 年 1 月

（概要）(太田一樹, 太田多恵子, 田川皓一, 西丸雄也)
上矢状静脈洞血栓症による左頭頂葉脳出血をきたした症例について、発症 4 か月後に右側の周辺視野における視覚性運動失調(ataxie optique)の症状が残存した。病巣は、左頭頂間溝の比較的後部に限局して認められた。視覚性運動失調を主症状とする脳出血は比較的まれであることから、症例報告を行った。

| | |
|---|---|
| | **13. 在宅療養中の終末期がん患者における血清アルブミン・プレアルブミン濃度の検討**<br>〈主　　催〉第 5 回日本静脈経腸栄養学会首都圏支部学術集会<br>〈開 催 場 所〉神奈川<br>〈開催年月日〉平成 25 年 5 月<br>（概要）（太田一樹, 小澤竹俊）<br>プレアルブミン（トランスサイレチン）の血中半減期は短く、栄養状態の変動を鋭敏に表すことが知られているが、終末期がん患者における動態については必ずしも明らかではない。このため、在宅療養中の終末期がん患者について検討を行ったところ、アルブミンとプレアルブミンは同様の減少を示すこと、プレアルブミンは C-反応性蛋白とも関連する可能性が認められた。 |
| | **14. がん終末期における甲状腺ホルモンの検討**<br>〈主　　催〉第 17 回日本病態栄養学会年次学術集会<br>〈開 催 場 所〉大阪<br>〈開催年月日〉平成 26 年 1 月<br>（概要）（太田一樹, 小澤竹俊）<br>がん緩和治療期患者の血清トリヨードサイロニン(T3)、サイロキシン(T4)濃度を検討したところ、多くの症例で低 T3 状態を認めた。遊離 T3 と総 T3、遊離 T4 と総 T4 との間には有意な相関を認めたが、T3 と T4 との間には相関を認めなかった。 |
| | **15. 在宅医療における地域栄養サポートチームの関わり**<br>〈主　　催〉第 20 回日本緩和医療学会学術大会<br>〈開 催 場 所〉神奈川<br>〈開催年月日〉平成 27 年 6 月<br>（概要）（太田一樹, 井上俊, 佐桑由紀, 村澤直子,尾崎秀佳,鈴木詩織,小澤竹俊）<br>在宅緩和ケアにおいて栄養サポートチーム(NST)が必要だが、在宅医療の現場では、ひとつの施設でチームを構成することは必ずしも容易ではない。このため、クリニックと薬局の２施設が協力しての NST 活動について、①多職種連携による在宅栄養管理、②勉強会開催による栄養管理の推進、③在宅医療・介護の専門職が直面している栄養管理についての疑問やニーズの把握と対応を中心に、活動内容の実際を紹介した。 |
| | **16. がん緩和治療期における血清中脂肪酸分画の検討**<br>〈主　　催〉第 19 回日本病態栄養学会年次学術集会<br>〈開 催 場 所〉神奈川<br>〈開催年月日〉平成 28 年 1 月<br>（概要）（太田一樹, 小澤竹俊）<br>がん緩和治療期における血清中脂肪酸濃度について検討を行ったところ、がん緩和治療期患者では、非がん患者と比較して脂肪酸の濃度の一部に変化が認められた。ただし、必須脂肪酸欠乏の指標については両群で差を認めなかった。 |
| | **17. Serum Alpha - melanocyte - stimulating hormone levels during the period of cancer cachexia.**<br>〈主　　催〉Second Asian Conference for Frailty and Sarcopenia<br>〈開 催 場 所〉愛知<br>〈開催年月日〉平成 28 年 11 月<br>（概要）（Ota K, Ozawa T）<br>がん悪液質におけるサルコペニアの病態については不明の点が少なくない。このためがん悪液質患者における血清α-メラノサイト刺激ホルモン(α-MSH)濃度を測定したところ、がん悪液質群では健康な対照群に比べ有意に血中濃度が高値であった。α-MSH は摂食抑制作用やエネルギー消費量増加作用を有することから、がん悪液質においてサルコペニアを来す機序の一部にα-MSH が関与している可能性が疑われた。 |
| | **18. がん緩和治療期における成長ホルモン・IGF-1 系**<br>〈主　　催〉第 20 回日本病態栄養学会年次学術集会<br>〈開 催 場 所〉京都<br>〈開催年月日〉平成 29 年 1 月<br>（概要）（太田一樹, 小澤竹俊） |

| | |
|---|---|
| | がん緩和治療期の病態を明らかにすることは栄養療法を行うためにも重要であることから、がん緩和治療期患者の成長ホルモン(GH)・インスリン様成長因子-1(IGF-1)を検討したところ、慢性疾患患者に比べて、血清 GH 濃度は高値で、IGF-1 濃度は低値であり、がん緩和治療期に認められるサルコペニアの機序の一部に同系が関与している可能性がある。 |
| | **19. クリニックと薬局が連携しての栄養サポートチーム（NST）活動の報告**<br>〈主　　催〉第 22 回日本地域薬局薬学会年会<br>〈開 催 場 所〉兵庫<br>〈開催年月日〉平成 30 年 6 月<br>（概要）（井上俊, 太田一樹, 篠原夏美, 松下由佳子, 藤村詩織, 村澤直子, 小澤竹俊）<br>在宅療養支援診療所の医師、看護師と薬局の管理栄養士、薬剤師とが連携して栄養サポートチーム（NST）活動を行っている。その活動の中でも、定期的な症例検討や回診、訪問栄養食事指導などについて報告した。 |
| | **20. 継続した訪問栄養食事指導により、家族の栄養状態が改善できた一例**<br>〈主　　催〉第 22 回日本病態栄養学会年次学術集会<br>〈開 催 場 所〉神奈川<br>〈開催年月日〉平成 31 年 1 月<br>（概要）（松下由佳子, 太田一樹, 篠原夏美, 藤村詩織, 井上俊, 小澤竹俊）<br>管理栄養士による継続的な訪問栄養食事指導を行っていたところ、はじめは栄養について関心のなかった家族に対しても、徐々に介入できるようになった。さらに患者、家族ともに介護支援専門員、訪問介護員などの連携を希望されるようになり、患者本人だけでなく家族の栄養状態も改善することができた。その臨床経過と身体所見や検査所見、食事摂取状況の推移を報告した。 |
| | **21. 在宅療養支援診療所における栄養に関する継続した勉強会の試み**<br>〈主　　催〉第 23 回日本病態栄養学会年次学術集会<br>〈開 催 場 所〉京都<br>〈開催年月日〉令和 2 年 1 月<br>（概要）（篠原夏美, 太田一樹, 松下由佳子, 藤村詩織, 髙尾慶太, 村澤直子, 小澤竹俊）<br>在宅栄養サポートチーム（NST）活動の一環として在宅療養支援診療所に勤務する医療・介護スタッフに対して、栄養に関する勉強会を毎月 1 回、計 64 回継続して行った。主な内容は「栄養障害の診断や治療」「疾病予防のための栄養管理」「嚥下調整食の調理方法の紹介とその試食会」などで、毎回 20 名以上のスタッフが参加していた。アンケート結果からも、定期的な勉強会は有用と思われた。 |
| | **22. Effect of synbiotics during the perioperative period in patients with Crohn's disease: a pilot study**<br>〈主　　催〉The 42nd European Society for Clinical Nutrition and Metabolism (ESPEN)<br>〈開 催 場 所〉オンライン開催<br>〈開催年月日〉令和 2 年 9 月<br>（概要）（Saito K, Ota K, Takazoe M, Mineki M）<br>クローン病患者の周術期において、手術侵襲による腸機能の傷害を軽減する目的で、Bifidobacterium longum（ビフィズス菌）とグアーガムを混合したシンバイオティクスの有用性を評価したところ、シンバイオティクス服用により、術後の腹部症状や排便頻度に改善傾向がみられた。また、腸粘膜機能を反映するといわれている血中ジアミンオキシダーゼ活性の増加傾向も認められた。 |
| | **23. クローン病患者における体成分分析装置を用いた栄養状態の評価**<br>〈主　　催〉第 36 回 日本栄養代謝学会臨床学術集会<br>〈開 催 場 所〉兵庫<br>〈開催年月日〉令和 3 年 7 月<br>（概要）（斎藤恵子, 太田一樹, 藤井俊光, 竹中健人, 大塚和朗, 井津井康浩, 篠原夏美, 松下由佳子, 峯木眞知子, 長堀正和, 岡本隆一）<br>クローン病（CD)でも生物学的製剤等の治療を受けている患者の栄養状態について、年齢の近い健常者を対照群として検討を行った。BMI や握力などの通常の身体計測は CD 群と対照群で明らかな差を認めなかった。一方、体成分分析を行ったところ、体脂肪量は両群で差はなかったが、筋肉量や骨格筋量指数、位相角などは CD 群で有意に低値であった。体成分分析により、通常の身体計測では評価することが難しい栄養状態の変化が観察される。 |

| | |
|---|---|
| | **24. Assessment of body composition in patients with Crohn's disease using bioelectrical impedance analysis**<br>〈主　　催〉The 43nd European Society for Clinical Nutrition and Metabolism (ESPEN)<br>〈開 催 場 所〉オンライン開催<br>〈開催年月日〉令和３年９月<br>（概要）(K.Saito, K.Ota, M.Nagahori, T.Fujii, K.Takenaka, K.Ohtsuka, Y.Ithui, N.Shinohara, Y.Matsusita, M.Mineki, R.Okamoto)<br>クローン病（CD)患者について、その身体計測並びに生体インピーダンス法による体成分分析を行った。通常の身体計測では体重や BMI、握力などを含め、健常者と間に明らかな差を認めなかったが、BIA 法では、CD 群で筋肉量や骨格筋量指数、位相角などが有意に低値であり、CD 群では筋肉量低下などの栄養状態の変化が内在している可能性がある。 |
| | **25. エンド・オブ・ライフケアに関わる専門職を対象としたコミュニケーション研修前後の会話変化と患者評価に関する研究**<br>〈主　　催〉第 13 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会<br>〈開 催 場 所〉広島<br>〈開催年月日〉令和３年 10 月<br>（概要）(千葉宏毅, 守屋利佳, 尾形倫明, たら澤邦男, 森谷就慶, 太田一樹)<br>エンド・オブ・ライフケア(ELC)に関わる専門職の研修効果を評価するため、研修の受講者(医療介護従事者)と受け持ちのがん末期患者を対象に、会話データ解析とアンケートを実施した。研修により習得した会話により、身体的なつらさや、より生活やスピリチュアルなつらさに対して、患者は自分の気持ちを分かってくれたと感じていた。その他の手法については研修効果の評価が難しく、さらに多角的な検討が必要である。 |
| | **26. がん悪液質における内因性カンナビノイドの役割**<br>〈主　　催〉第 24・25 回日本病態栄養学会年次学術集会<br>〈開 催 場 所〉オンライン開催<br>〈開催年月日〉令和４年１月<br>（概要）(太田一樹,小澤竹俊)<br>がん悪液質患者を対象群、慢性疾患患者を対照群として、血清アラキドノイルエタノールアミド(AEA)、2-アラキドノイルグリセロール(2-AG)濃度を測定したところ、対象群で AEA、2-AG 濃度は有意に高値であった。AEA は食事摂食量と、2-AG は血清中性脂肪濃度と有意な関係を示したことから、がん悪液質の状態において循環血中 AEA は摂食に、2-AG は脂質代謝に関与している可能性がある。 |
| | **27.** 在宅 NST において管理栄養士に求められる知識・技術の検討<br>〈主　　催〉第 24・25 回日本病態栄養学会年次学術集会<br>〈開 催 場 所〉オンライン開催<br>〈開催年月日〉令和４年１月<br>（概要）(篠原夏美, 太田一樹, 松下由佳子, 藤村詩織, 村澤直子, 小澤竹俊)<br>在宅 NST において管理栄養士が訪問栄養食事指導を行った患者について検討したところ、脳卒中、整形外科学的疾患、神経変性疾患などの疾患が多かった。脳卒中や整形外科学的疾患では生活習慣病や嚥下障害に対する指導が多く、神経変性疾患では嚥下障害に対する指導が多かった。管理栄養士は、これらの栄養療法に関する知識や技術が必須である。 |
| | **28.** Role of circulating endocannabinoids in patients with cancer cachexia<br>〈主　　催〉第 99 回日本生理学会大会<br>〈開 催 場 所〉宮城<br>〈開催年月日〉令和４年３月<br>（概要）(K. Ota, T. Ota, S. Nitta, T. Ueda, T. Yamashita, T. Ozawa)<br>がん悪液質患者における血清アラキドノイルエタノールアミド(AEA)、2-アラキドノイルグリセロール(2-AG)濃度と、臨床所見との関連をみた。重回帰分析の結果、AEA は食事量、C-反応性蛋白（CRP）等と、2-AG は中性脂肪、CRP との間に有意な関連を認めた。 |
| | **29.** クローン病外来患者におけるビタミン D 及び亜鉛欠乏症<br>〈主　　催〉第 13 回 日本炎症性腸疾患学会学術集会<br>〈開 催 場 所〉大阪 |

| | |
|---|---|
| | 〈開催年月日〉令和４年 11 月<br>（概要）（斎藤恵子，長堀正和，太田一樹，藤井俊光，竹中健人，大塚和朗，井津井康浩，岡本隆一）<br>外来通院中のクローン病（CD)患者の栄養状態を検討した。BMI や血清アルブミン濃度などは保たれていたが、血清亜鉛濃度は半数以上で、血清 25（OH）ビタミン D 濃度は全例で、基準値に達していなかった。生物学的製剤治療の発展などにより、BMI などの身体所見は健常者レベルに保たれている患者が増加しているが、亜鉛やビタミン D などは欠乏している患者が多く、スクリーニング検査や補充治療の検討が必要である。 |
| 主な社会活動 | ・第 280 回福岡循環器懇話会講師　（平成 12 年 11 月）<br>「脳梗塞超早期診断に有用な Diffusion MRI」<br>・第８回福岡脳卒中ケア研究会講師　（平成 18 年１月）<br>「脳塞栓早期再発例における慢性期リハビリテーションの実際」<br>・在宅で確実に使える薬剤師（連携のできる薬剤師）を育てる研修会講師　「栄養管理」　（平成 24 年 10 月）<br>・平成 29 年度世界糖尿病デイ in 大船　（平成 29 年 11 月）<br>「糖質制限食ってどんな食事？」<br>・野田市・寝たきり予防講演会講師：元気で長生きの秘訣、教えます～知っておきたい「サルコ」「フレイル」～　（平成 31 年３月）<br>・野田市食生活改善推進員全体研修会講師　（令和２年１月）<br>「食と健康を考える」<br>・全国栄養士養成施設協会 栄養士実力認定試験 試験委員（人体の構造と機能及び疾病の成り立ちの分野）　（令和４年４月～令和５年３月）<br>・日本医師会認定産業医　（平成 27 年 10 月～現在に至る）<br>・日本病態栄養学会病態栄養専門医研修関連施設（めぐみ在宅クリニック：神奈川県横浜市）代表指導医　（平成 28 年 10 月～現在に至る） |
| 所 属 学 会 | 日本生理学会　（平成４年４月～現在に至る）<br>・日本生理学会評議員　（令和４年４月～現在に至る）<br>日本内科学会　（平成７年５月～現在に至る）<br>・日本内科学会認定内科医　（平成 16 年９月～現在に至る）<br>・日本内科学会総合内科専門医　（平成 29 年 12 月～現在に至る）<br>日本脳卒中学会　（平成 10 年 12 月～現在に至る）<br>・日本脳卒中学会脳卒中専門医　（平成 17 年４月～現在に至る）<br>International Society for Neuroimmunomodulation　（平成 19 年９月～現在に至る）<br>日本病態栄養学会　（平成 22 年９月～現在に至る）<br>・日本病態栄養学会病態栄養専門医　（平成 27 年４月～現在に至る）<br>・日本病態栄養学会 NST コーディネーター　（平成 27 年４月～現在に至る）<br>・日本病態栄養学会病態栄養研修指導医　（平成 28 年４月～現在に至る）<br>日本臨床栄養代謝学会　（平成 23 年５月～現在に至る）<br>日本緩和医療学会　（平成 24 年４月～現在に至る）<br>日本臨床栄養学会　（平成 25 年 10 月～現在に至る）<br>The European Society for Clinical Nutrition and Metabolism　（平成 27 年２月～令和６年３月） |
| 受　賞　歴 | なし |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

井元（イノモト） 淳（アツシ）　INOMOTO Atsushi　准教授

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・内部疾患理学療法Ⅰ<br>・理学療法評価学統合演習Ⅰ<br>・理学療法研究法演習<br>・理学療法総合研究<br>・理学療法総合演習Ⅰ・Ⅱ<br>・地域理学療法学<br>・医療人のための教育学Ⅱ<br>・先端医療と理学療法<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ<br>・臨床実習Ⅰ、臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ、臨床実習Ⅴ |
| 専門分野 | ■　内部障害系理学療法学<br>■　産業衛生学<br>■　3学会合同呼吸療法認定士<br>■　呼吸理学療法専門理学療法士<br>■　心血管理学療法専門理学療法士<br>■　糖尿病理学療法専門理学療法士<br>■　初級呼吸ケア指導士 |
| 最終学歴 | 広島大学医学部　保健学科理学療法学専攻　卒業（2000年4月～2004年3月）<br>長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　保健学専攻　卒業（2010年4月～2012年3月）<br>産業医科大学大学院医学研究科　産業衛生学専攻　卒業（2016年4月～2019年3月） |
| 学位 | 博士（産業衛生学）／修士（理学療法学）／学士（保健学） |
| 職歴 | 医療法人財団池友会 福岡和白病院 リハビリテーション科　（2004年4月～2010年4月）<br>学校法人福岡保健学院 福岡和白リハビリテーション学院 専任教員　（2010年5月～2013年3月）<br>○義肢装具学Ⅰ、義肢装具学Ⅱ、医学英語、運動学Ⅱ、理学療法技術演習　担当<br>社会医療法人財団池友会 福岡和白病院 リハビリテーション科 非常勤　（2011年1月～2011年5月）<br>独立行政法人労働者健康福祉機構 九州労災病院 勤労者予防医療センター　（2013年4月～2014年3月）<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 助教　（2014年4月～2017年3月）<br>○基礎内部障害系理学療法、内部障害系運動療法、内部障害系理学療法Ⅰ、疾患別理学療法評価学演習、地域ケア方法、理学療法基礎演習、理学療法専門演習、理学療法研究法演習、卒業論文　担当<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 講師　（2017年4月～2020年3月）<br>○内部障害系理学療法Ⅰ、疾患別理学療法評価学演習、臨床理学療法手技演習、地域理学療法学演習、理学療法基礎演習、理学療法専門演習、理学療法総合演習、理学療法研究法演習Ⅰ、理学療法研究法演習Ⅱ、理学療法卒業研究、トレーニング科学　担当<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 准教授　（2020年4月～現在に至る）<br>○内部障害系理学療法Ⅰ、疾患別理学療法評価学演習、 |

| | |
|---|---|
| | 臨床理学療法手技演習、地域理学療法学演習、医療人のための教育学Ⅱ、理学療法基礎演習、理学療法専門演習、理学療法総合演習、理学療法研究法演習Ⅰ、理学療法研究法演習Ⅱ、理学療法卒業研究、トレーニング科学、内部疾患理学療法Ⅰ（令和３年～）、理学療法評価学統合演習Ⅰ（令和３年～）、地域理学療法学（令和４年～）、先端医療と理学療法（令和４年～）、理学療法総合研究、理学療法総合演習Ⅰ・Ⅱ、臨床実習Ⅴ（令和５年～）　担当 |
| 教育上の業績 | ○小倉南看護専門学校における非常勤講師（2018 年～現在に至る） |
| | ○担当教科では授業毎に副教材として教科書の内容やその他資料を学生が見やすいよう図や絵を多く入れパワーポイント資料にまとめた。学生への配布用には穴埋め式のものを配布し、講義中や復習時に学生が重要箇所を把握しやすいよう配慮した。 |
| 主な研究活動 | 【学術論文】 |
| | 1. 井元淳，豊永敏宏，出口純子，福田里香，廣滋恵一<br>:「勤労者の上腕―足首脈波伝播速度に影響を与える要因の検討.」<br>日本職業・災害医学会会誌 62(2)：104-110，2014 |
| | （概要）動脈硬化の予防的指導に有用な知見を得ることを目的とした。男性群では総合的な個別指導が重要で、女性群では職場環境を考慮した指導の必要性が示された。 |
| | 2. 井元淳，豊永敏宏，出口純子，福田里香<br>:「男性勤労者の内臓脂肪面積に関連する要因の検討-内臓脂肪測定装置 DUALSCAN での検討-.」<br>日本職業・災害医学会会誌 62(3)：197-201，2014 |
| | （概要）内臓脂肪面積（VFA）に影響を与える要因と VFA 測定の有用性の検討を目的とした。VFA 減少には体幹の筋力増強運動の指導の必要性が示された。 |
| | 3. 井元淳，福田里香，出口純子，豊永敏宏<br>:「勤労者の身体活動・食行動の変化と内臓脂肪面積との関係.」<br>日本職業・災害医学会会誌 62(4)：197-201，2014 |
| | （概要）身体活動量や食行動など行動変容を促し、その変化が内臓脂肪面積に影響を及ぼすか検討した。単身世帯を中心に飲酒を含む食習慣など栄養指導の必要性が示された。 |
| | 4. 福田里香，早渕仁美，出口純子，井元淳，廣滋恵一，豊永敏宏<br>:「勤労男性における上腕―足首脈波伝播速度と食習慣との関連性.」<br>日本職業・災害医学会会誌 62(5)：336-342，2014 |
| | （概要）上腕-足首脈波伝播速度（baPWV）と食習慣との関連の検討を目的とした。baPWV 高値群は副食が多く、主食が少ない食習慣にあり、バランス良く摂取する個別指導が必要である。 |
| | 5. 井元淳，豊永敏宏，出口純子，福田里香<br>:「男性勤労者におけるサルコペニア予備群と身体特性，ライフスタイルとの関係.」<br>日本職業・災害医学会会誌 62(6)：376-381，2014 |
| | （概要）勤労者におけるサルコペニア予備群の特徴について検討した。サルコペニア予備群ではメタボリックシンドロームや動脈硬化の危険性は低いことが示唆された。 |
| | 6. 吉田遊子，千代丸信一，石橋敏郎，廣滋恵一，中藤佳絵，神﨑良子，井元淳<br>:「本学理学療法学科における客観的臨床能力試験（OSCE）の試行.」<br>九州栄養福祉大学研究紀要 11：93-108，2014 |
| | （概要）本学科版 OSCE 評価シートの結果や学生からのアンケートの結果から、その妥当性を検討した。学生にとって有意義な試験であり、今後の課題内容も認識できたと考えられた。 |
| | 7. 井元淳，神﨑良子，松田隆治，深町晃次，薦田尚子，室井廣大，大丸幸<br>:「リハビリテーション学部学生における防犯意識と危険ドラッグに対する意識.」<br>九州栄養福祉大学研究紀要 12：27-38，2015 |
| | （概要）防犯・危険ドラッグ講習会前後における犯罪リスクの認知を調査することを目的とした。講習会後、意識の変化や危険ドラッグの危険性の認識が十分あることが示された。 |

8. 井元淳，石橋敏郎，中藤佳絵，髙橋精一郎，橋元隆
：「理学療法士国家試験の点数に影響を及ぼす要因－業者模擬試験を用いての検討－.」
九州栄養福祉大学研究紀要 12：39-44，2015

（概要）業者模試の領域別の点数やその推移から国家試験の結果に影響を及ぼしていた要因の検討を行った。運動学と心理学、脳血管障害の 3 領域に重点を置いた国試対策が重要であった。

9. 中村浩一，兒玉隆之，平野幸伸，鈴木重行，井元淳，梅野和也，岡本伸弘
：「腓腹筋に対するセルフストレッチング効果の超音波学的解析.」
理学療法科学 31(2)：261-264, 2016

（概要）腓腹筋へのセルフストレッチングが血行動態に及ぼす影響を明らかにした。腓腹筋への Active Individual Muscle Stretching は筋血流量を一時的に増加させる可能性が示された。

10. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏
：「勤労男性における内臓脂肪肥満群の生活習慣の特徴.」
日本職業・災害医学会会誌 64(5)：271-278，2016

（概要）内臓脂肪肥満群の生活習慣の特徴をとらえることを目的とした。食事の行動変容意識を維持・向上しつつ、生活習慣の改善を強化した目標の設定の必要性が示された。

11. Atsushi Inomoto, Rika Fukuda, Junko Deguchi, Gohei Kato, Ryoko Kanzaki, Keiichi Hiroshige, Keisuke Nakano, Toshihiro Toyonaga
：「The association between the body composition and lifestyle affecting pulmonary function in Japanese workers.」
Journal of Physical Therapy Science 28(10): 2883-2889, 2016

（概要）身体組成や生活習慣と呼吸機能との関連を分析することを目的とした。FEV1 では内臓脂肪面積と除脂肪量が抽出され、FVC では内臓脂肪面積のみ抽出された。

12. 中藤佳絵，井元淳，木村美子
：「物理療法科目における現状と課題」
九州栄養福祉大学研究紀要 13：171-180，2016

（概要）臨床実習における物理療法の活用状況と国家試験問題の現状を明らかにすることを目的とした。学内教育と臨床実習の連携が重要であり、学修目標を分けて行う必要性が示された。

13. 井元淳，石橋敏郎，中藤佳絵，梅野和也，大峯三郎
：「理学療法士国家試験の点数に影響を及ぼす要因の変化.」
九州栄養福祉大学研究紀要 13：215-221，2016

（概要）第 50・51 回国家試験それぞれでの総合点数に影響を及ぼした国家試験の領域を検討した。第 51 回は思考力や想像力など、より臨床的な読解力が求められたことが推察された。

14. 梅野和也，太田研吾，井元淳，中村浩一
：「自己調整学習方略および学習目標が定期試験の結果に与える影響
－理学療法学科学生を対象とした研究－.」
理学療法科学 32(1)：69-72，2017

（概要）自己調整学習方略、学習目標および目標志向性が定期試験の結果に及ぼす影響を検討した。自己調整学習方略や学習目標の違いが定期試験の結果に影響を与える可能性が示された。

15. Atsushi Inomoto, Rika Fukuda, Junko Deguchi, Toshihiro Toyonaga
：「Relation between respiratory function and arterial stiffness assessed by brachial-ankle pulse wave velocity in healthy workers.」
Journal of Physical Therapy Science 29(9): 1664-1669, 2017

（概要）COPD を発症していない勤労者を対象とし、動脈硬化と呼吸機能との関連を明らかにした。気流障害までいかない呼吸機能の低下が動脈硬化の上昇と関連がある可能性が示された。

16. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏
：「勤労男性における内臓脂肪肥満群の内臓脂肪改善についての指導法の検証,」
日本職業・災害医学会会誌 65(6)：343-349，2017

（概要）「早食い」と「運動量が少ない」の改善が、内臓脂肪面積（VFA）減少に結びつくか検証した。早食いの改善でエネルギー摂取量の増大を防ぎ、VFA 減少に繋がった。

17. 井元淳，石橋敏郎，中藤佳絵，梅野和也，大峯三郎
:「解剖・生理・運動学の 3 領域が理学療法士国家試験に与える影響.」
九州栄養福祉大学研究紀要 14：119-124，2017

（概要）解剖・生理・運動学の 3 領域の正解率や推移が国家試験の結果に影響を及ぼしたか分析した。特に 3 領域に重点を置いた知識の底上げを図ることが重要であることが示された。

18. 梅野和也，井元淳
:「ニューロフィードバックを併用したメンタルプラクティスの試み
ー簡易脳波計を使用してー.」
九州栄養福祉大学研究紀要 14：125-130，2017

（概要）メンタルプラクティス（MP）時にニューロフィードバック（NFB）を併用し、その効果を検証した。NFB を併用した MP 介入でパフォーマンスを改善させる可能性が示された。

19. 梅野和也，中村浩一，井元淳，白澤浩太郎，石田猛流，加来謙治，土井康太
:「運動イメージ想起能力とメンタルプラクティスの効果との関係
ー属性の異なる運動イメージ評価法を用いた研究ー.」
理学療法科学 33(2)：313-317，2018

（概要）メンタルプラクティス(MP) 前後でのパフォーマンスの変化との関係を検討した。メンタルクロノメトリーでの運動イメージ能力が MP の効果と関わりがある可能性が示された。

20. 吉田大輔，井元淳，梅野和也，廣滋恵一
:「客観的臨床能力試験後に実施したビデオ・フィードバックの効果.」
九州栄養福祉大学研究紀要 15：37-42，2018

（概要）客観的臨床能力試験（OSCE）後のビデオ・フィードバック（VF）の効果を検討した。従来のフィードバックと比較し、VF は有益な学習方法であることが示唆された。

21. 梅野和也，中村浩一，井元淳，宮田浩紀
:「簡易脳波計を使用したニューロフィードバックトレーニングの効果の検討
ーメンタルプラクティスへの応用ー.」
理学療法科学 33(6)：901-904，2018

（概要）ニューロフィードバック（NF）をメンタルプラクティス（MP）に併用した際の効果を明らかにした。若年者での MP に NF を付与することによる効果の向上は確認できなかった。

22. 神﨑良子，井元淳，木村多寿子，嶋田誠治，佐藤祥代，艫居祐輔，曽我芳光，安藤献児，樋口博之
:「末梢動脈疾患患者に対する血管内治療後の在宅運動療法の効果.」
心臓リハビリテーション 24(3・4)：226-231，2018

（概要）末梢動脈疾患（PAD）患者に対する血管内治療（EVT）後の在宅運動療法の効果を明らかにした。EVT 後、歩行にレジスタンストレーニングの付加は有用であることが示された。

23. Atsushi Inomoto, Hiroshi Yamato, Ryoma Michishita, Ying Jiang, Shingo Nishiyama, Rika Fukuda, Junko Deguchi
:「Frequency of exposure to secondhand smoke outside the home is associated with a lower FEV1/FVC in male workers regardless of smoking status.」
Journal of UOEH 41(1): 15-24, 2019

（概要）体組成や生活習慣の影響を考慮して 1 秒率に影響を与える要因を検討した。COPD 発症の予防策としてすべての勤労者は受動喫煙を避けることを心がける必要がある。

24. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏，岩本幸英
:「保健指導を受けた単身世帯の勤労男性における生活習慣と身体組成の経年的な変化について.」
日本栄養士会雑誌 62(7)：25-32，2019

（概要）単身世帯の勤労男性での生活習慣と身体特性の経年的な保健指導の変化の特徴を捉えることを目的とした。単身世帯者が自ら生活習慣の改善ができる支援が求められる。

25. 廣滋恵一，四元孝道，井元淳，早川智之
:「本学リハビリテーション学部学生の社会人基礎力調査について
～卒業時の社会人基礎力自己評価と GPA・臨床実習成績との関連～.」
九州栄養福祉大学研究紀要 16：7-16，2019

（概要）卒業時学生の社会人基礎力に対する自己評価と学内成績・臨床実習成績との関連を検討した。「主体性」、「実行力」、「計画力」を育成することが学内成績の向上に重要である。

26. 井元淳，中藤佳絵，梅野和也，烏山昌起，早川智之，石橋敏郎，大峯三郎
:「理学療法士模擬試験成績を活用した学修指導の効果の評価.」
九州栄養福祉大学研究紀要 16：37-42，2019

（概要）国家試験受験学生の中で成績が伸び悩んだ者での模試の成績推移の特徴を検証し、次年度の受験学生の中で成績が伸び悩んだ学生に対して学修指導を行った効果を明らかにした。

27. 河上淳一，烏山昌起，井元淳，石橋敏郎，四元孝道，佐野幹剛，室井廣大，髙橋精一郎
:「整形外科学に対する学修支援の取り組み.」
九州栄養福祉大学研究紀要 16：43-50，2019

（概要）整形外科学を学ぶ前に必要な基礎知識を提供し、それによる整形外科学の再試験・再履修者の数について検討した。学生に必要な内容を把握することが必要であることが分かった。

28. 四元孝道，渕雅子，井元淳，廣滋恵一
:「地域高齢者の認知機能検査と身体機能検査との関連性における予備的研究.」
九州栄養福祉大学研究紀要 16：83-90，2019

（概要）地域在住高齢者における MoCA-J と身体機能の関連を検討することを目的とした。立ち上がり動作の総合的な能力や水分調節能も認知機能と関連があることが示唆された。

29. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏，岩本幸英
:「単身世帯の勤労男性における食習慣改善についての実践の効果.」
栄養学雑誌 77(6)：167-175，2019

（概要）「野菜摂取量増加」と「食事量を腹八分目にする」に重点をおいたプログラムが行動変化に繋がるかを検証した。行動目標実行度聴取や簡単な調理の実演により行動変容が促された。

30. 井元淳，出口純子，福田里香，四元孝道，豊永敏宏
:「男性勤労者における家庭外での受動喫煙の暴露が呼吸機能の変化に与える影響.」
日本職業・災害医学会会誌 68(1)：39-45，2020

（概要）勤労世代での 1 年間の受動喫煙（SHS）環境の変化が呼吸機能に与える影響について検討した。新たに SHS へばく露すると呼吸機能の変化に悪影響を及ぼす可能性が示された。

31. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏，岩本幸英
:「男性勤労世代において頸部周囲長(頸囲)が腹囲に替わる肥満指標になり得るか.」
日本職業・災害医学会会誌 68(4)：227-232，2020

（概要）男性勤労世代を対象に頸囲が腹囲に替わる肥満指標になり得るかを検討した。頸囲は腹囲と同様に肥満指標になり得ることが示唆された。

32. Atsushi Inomoto, Junko Deguchi, Rika Fukuda, Ryoma Michishita, Ying Jiang, Shingo Nishiyama, Hiroshi Yamato
:「Cohabiting with Smokers Is an Independent Factor for Worsening Arterial Stiffness Even in Smoking Workers.」
Journal of UOEH 42(3): 251-259, 2020

（概要）受動喫煙の状況を考慮した上で喫煙習慣が動脈硬化に与える影響を検討した。動脈硬化の悪化の予防のため喫煙者自身が禁煙するだけでなく、同居者も禁煙させる必要性が示された。

33. 相野正樹，春口幸太郎，相野真由美，福良剛志，中埜康治郎，橋村瞬，井元淳，横瀬哲朗
:「筋に対する圧迫刺激量の違いが筋硬度と筋出力に及ぼす影響.」
理学療法科学 35(6)：831-835，2020

（概要）圧迫刺激量の大腿直筋の筋硬度、最大等尺性膝伸展筋力への影響を検討した。大腿直筋に対する刺激は 20mmHg が疼痛を伴わず、筋柔軟性および筋出力向上に寄与すると考えた。

34. Atsushi Inomoto, Junko Deguchi, Rika Fukuda, Takamichi Yotsumoto, Toshihiro Toyonaga
:「Age-specific determinants of brachial-ankle pulse wave velocity among male Japanese workers.」
The Tohoku Journal of Experimental Medicine 253(2): 135-141, 2021

（概要）Arterial stiffness の評価の 1 つである baPWV の年齢別決定要因を検討した。baPWV の増加を抑制するために加齢に伴う戦略を確立する必要がある。

35. Satoshi Matsuo, Masaki Okamoto, Tomoyuki Ikeuchi, Yoshiaki Zaizen, Atsushi Inomoto, Remi Haraguchi, Shunichiro Mori, Retsu Sasaki, Takashi Nouno, Tomohiro Tanaka, Tomoaki Hoshino, Toru Tsuda
:「Early Intervention of Pulmonary Rehabilitation for Fibrotic Interstitial Lung Disease Is a Favorable Factor for Short-Term Improvement in Health-Related Quality of Life.」
Journal of clinical medicine 10(14): 3153, 2021

（概要）線維性間質性肺疾患(FILD)における呼吸リハビリテーション（PR）開始後の HRQOL 短期改善の予測因子を分析した。FILD の PR は早期に開始する必要がある。

36. Atsushi Inomoto, Junko Deguchi, Rika Fukuda, Takamichi Yotsumoto, Toshihiro Toyonaga
:「Differences in determinants affecting longitudinal change of brachial-ankle pulse wave velocity due to differences in baseline among Japanese male workers.」
Journal of Physical Therapy Science 33(9): 676-682, 2021

（概要）2014 年度時点での baPWV 値で高値・低値群に分け、4 年間の baPWV の経時的変化に関連する要因を抽出した。baPWV ベースラインによって縦断的変化に与える要因は相違した。

37. 井元淳，出口純子，福田里香，四元孝道，豊永敏宏
:「日本人勤労者における骨格筋特性別での上腕-足首脈波伝播速度の相違.」
日本職業・災害医学会会誌 70(4)：146-151，2022

（概要）勤労世代での各骨格筋特性の違いによる baPWV の相違を明らかにした。勤労世代において骨格筋特性の違いによって動脈硬化の変化に関与している可能性は低いことが示された。

38. 吉田遊子，井元淳，中藤佳絵，神﨑良子，廣滋恵一，四元孝道，橋元隆
:「地域在住高齢女性における尿失禁に影響を与える要因.」
九州栄養福祉大学研究紀要 19：1-11，2022

（概要）地域在住高齢女性を対象に尿失禁と骨格筋量、運動機能との関連を分析した。骨格筋量よりも、骨盤底筋群を含むインナーユニットの協調性が重要であることが示唆された。

39. 川上慧，宗哲哉，山下直樹，大場健一郎，井元淳，髙橋精一郎
:「肺がん切除患者における術前栄養状態が術後の Performance Status の変化に与える影響—Controlling Nutritional Status を用いての検討—.」
肺癌 63(1)：8-14，2023

（概要）肺がん切除患者における術前栄養状態が術後に与える影響を明らかにした。術前栄養状態の評価は PS 回復の予測において重要であることが示唆された。

40. Atsushi Inomoto, Junko Deguchi, Rika Fukuda, Takamichi Yotsumoto, Toshihiro Toyonaga
:「Gender-specific factors associated with the Japanese version of the trail making test among Japanese workers.」
Journal of physical therapy science 35(7): 547-552, 2023

（概要）勤労者における TMT-B の遂行時間に影響を与える要因を明らかにした。性別によって関連要因が異なることが示唆された。

41. 松尾聡、池内智之、新貝和也、矢野志帆理、森大地、森駿一朗、井元淳、河野哲也、津田徹
:「慢性閉塞性肺疾患患者の急性増悪による再入院に関連する因子.」
日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 in press

（概要）1 年以内の再増悪と関連する要因を明らかにした。退院後も呼吸リハを継続することで、再増悪リスクの低下に期待ができることが示唆された。

42. 矢野志帆理、新貝和也、池内智之、松尾聡、森駿一朗、森大地、六反田雄一、井元淳、河野

| | |
|---|---|
| | 哲也、津田徹<br>：「介護保険下における通所呼吸リハビリテーションの費用面の検討.」<br>日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 in press |
| | （概要）COPD 患者における介護保険下での通所呼吸リハビリテーションが費用面に及ぼす影響を検討した。通所呼吸リハにより入院を予防し、医療費削減に寄与できる可能性が示唆された。 |
| 【学会発表】 | |
| | 1. 春口幸太郎，井元淳，中村浩一，甲斐尚仁，林和生，大谷内輝夫<br>：「変形性股関節症に対するホームエクササイズの短期効果.」<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会<br>〈開 催 場 所〉横浜<br>〈開催年月日〉2014 年 5 月 30 日～6 月 1 日 |
| | （概要）変形性股関節症（股 OA）に対するホームエクササイズ（HE）の有効性の検証を目的とした。股 OA と診断された 108 例の 95 関節を対象とし、各種評価を行い比較検討した。 |
| | 2. 谷岡亮平，穴井翼，藤本卓，広渡静夫，井元淳<br>：「当院の気管支喘息・COPD 有病者の現状～家庭用ネブライザー・服薬管理を行った一例～.」<br>〈主　　催〉日本訪問リハビリテーション協会<br>〈開 催 場 所〉大阪<br>〈開催年月日〉2015 年 5 月 30 日～31 日 |
| | （概要）気管支喘息・COPD の既往を持ち、肺癌での右肺上葉を切除し 2 年経過した訪問利用者を対象に家庭用ネブライザーを導入した前後で各種評価の変化を評価した。 |
| | 3. 福島広，井元淳，河手武<br>：「動作指導により呼吸苦改善し自宅退院した呼吸不全患者への作業療法.」<br>〈主　　催〉日本呼吸ケア・リハビリテーション学会<br>〈開 催 場 所〉浦安<br>〈開催年月日〉2015 年 10 月 15 日～16 日 |
| | （概要）動作方法、呼吸法、動作と呼吸の同調指導を中心とした作業療法により ADL の改善が見られた COPD 症例を経験した。呼吸苦の強い症例に対して作業療法の重要性が示された。 |
| | 4. 中野圭介，井元淳，小山卓<br>：「深部静脈血栓症により歩行時痛を呈した一症例.」<br>〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会<br>〈開 催 場 所〉別府<br>〈開催年月日〉2015 年 11 月 14 日～15 日 |
| | （概要）深部静脈血栓症に伴い、肺動脈血栓塞栓症を呈した症例について、運動療法により下肢の疼痛に著明な改善が見られた症例を報告した。 |
| | 5. 福田里香，出口純子，加藤剛平，井元淳，豊永敏宏<br>：「勤労男性における内臓脂肪肥満群の生活習慣の特徴.」<br>〈主　　催〉日本職業・災害医学会<br>〈開 催 場 所〉東京都<br>〈開催年月日〉2015 年 11 月 22 日～23 日 |
| | （概要）内臓脂肪蓄積の要因となる生活習慣の特徴を捉えることを目的とした。食事改善の意識を維持・向上しつつ、内臓脂肪面積減少につながる具体的な行動支援が必要である。 |
| | 6. 相野正樹，春口幸太郎，白樫敦，井元淳<br>：「神経髄節を考慮した SSP 療法の即時効果～身体機能に着目して～.」<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会<br>〈開 催 場 所〉札幌<br>〈開催年月日〉2016 年 5 月 27 日～29 日 |
| | （概要）神経髄節を考慮した Silver Spike Point（SSP）療法の即時効果を検証した。SSP 療法施行後、下肢筋力や歩行速度といった身体機能向上に効果があることが示唆された。 |
| | 7. 春口幸太郎，井元淳，林和生，大谷内輝夫<br>：「変形性股関節症に対するホームエクササイズの継続率に対する一考察～ゆうきプログラムに着目して～.」 |

〈主　　催〉日本理学療法士協会
〈開 催 場 所〉札幌
〈開催年月日〉2016 年 5 月 27 日～29 日

（概要）ゆうきプログラムを取り入れた HomeExercise（HE）の継続率の違いによる症状の変化を検証した。HE の継続率が高い方が機能障害の改善や QOL の向上を図れることが示唆された。

**8. 谷岡亮平，穴井翼，春口幸太郎，井元淳**
**：「退院早期より訪問リハビリを開始し、呼吸機能が向上した一例.」**
〈主　　催〉日本訪問リハビリテーション協会
〈開 催 場 所〉東京
〈開催年月日〉2016 年 6 月 17 日～18 日

（概要）余暇活動の再開を目的に早期に訪問リハビリ（訪リハ）を導入した症例を報告した。本人・家族のアドヒアランス向上ができ、ボランティア活動再開という目標を設定できた。

**9. 山本紘子，辻千里，小河一彦，井元淳，羅本尚樹**
**：「追跡調査からみる回復期病棟退院後の FIM の変化と転倒の傾向について.」**
〈主　　催〉日本リハビリテーション病院・施設協会など
〈開 催 場 所〉つくば市
〈開催年月日〉2016 年 10 月 27 日～29 日

（概要）退院後の機能的自立度評価（FIM）の変化や転倒の傾向について検討した。いずれの群においても 3 割前後の転倒数があった。

**10. 谷岡亮平，井元淳**
**：「活動・参加が可能となった症例を通して～今後の課題について～.」**
〈主　　催〉日本リハビリテーション病院・施設協会など
〈開 催 場 所〉つくば市
〈開催年月日〉2016 年 10 月 27 日～29 日

（概要）80 歳代男性の COPD（HOT 利用）患者、既往歴に多発性神経炎あり。COPD グレードⅢ期。限られた時間内での介入は困難であり、訪問以外の時間も活用する必要があった。

**11. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏**
**：「勤労男性における内臓脂肪肥満群の内臓脂肪改善についての指導法の検証.」**
〈主　　催〉日本職業・災害医学会
〈開 催 場 所〉仙台
〈開催年月日〉2016 年 10 月 22 日～23 日

（概要）「早食い」と「1 日運動量が少ない」の 2 項目の改善が内臓脂肪面積減少に結びつくか検証した。歩数などを常時確認可能としたことが身体活動の動機づけになったと思われる。

**12. 川上慧，河手武，井元淳**
**：「呼吸・動作指導により呼吸苦改善した肺癌術後 COPD 患者への理学療法.」**
〈主　　催〉日本呼吸ケア・リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉仙台
〈開催年月日〉2017 年 11 月 17 日～18 日

（概要）動作指導・呼吸法・動作と呼吸同調指導を中心に理学療法を実施し、呼吸苦の改善・ADL の向上を認めた肺癌術後 COPD 症例を経験した。

**13. 村上武史，財前愛美，矢野雄大，花田菜摘，石倉龍太，井元淳，姜英，道下竜馬，大和浩，佐伯覚**
**：「看護師における多面的運動介入における腰痛減少効果の検討.」**
〈主　　催〉日本職業・災害医学会
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2017 年 11 月 25 日～26 日

（概要）腰痛の有無にかかわらず看護師に対して理学療法士の管理下で行う多面的な介入が腰痛減少に効果があるか検討した。体幹機能や柔軟性、QOL に効果があることが示された。

**14. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏，岩本幸英**
**：「単身世帯の勤労男性における身体特性と生活習慣の特徴.」**
〈主　　催〉日本職業・災害医学会

〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2017 年 11 月 25 日～26 日

（概要）単身世帯の勤労男性を対象に、生活習慣や身体特性、職場環境の要因に経年的な特徴があるか検討した。身体特性では単身・単身以外の両群間、および経年的に有意差はなかった。

**15. 天米穂、松本大夢、荻原勇太、井元淳**
**：「健常人におけるバルサルバ効果が瞬間最大筋力に及ぼす影響ー筋力との関連性とリスク管理ー.」**
〈主　　催〉日本予防理学療法学会
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2018 年 10 月 20 日～21 日

（概要）バルサルバ効果の有無がバイタルサイン（バイタル）と等尺性膝関節伸展筋力に影響を与えるかを検証した。健常者ではリスクになり得ないことが示唆された。

**16. 井元淳，大和浩，道下竜馬，姜英，西山信吾，福田里香，出口純子**
**：「勤労者における喫煙状況による身体組成や生活習慣の相違と呼吸機能に影響を与える要因.」**
〈主　　催〉日本予防理学療法学会
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2018 年 10 月 20 日～21 日

（概要）喫煙量の違いによる身体特性や生活習慣の相違、また身体特性や生活習慣の呼吸機能への影響を検討した。すべての勤労者に受動喫煙を避ける生活を指導する必要性が示された。

**17. 吉田惇一，江口聖也，黒木航大，井元淳**
**：「地域在住高齢者を対象としたフレイルと栄養状態の関係の検討.」**
〈主　　催〉日本予防理学療法学会
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2018 年 10 月 20 日～21 日

（概要）地域高齢者を対象とし、フレイルと栄養状態の関連を明らかにした。フレイルには栄養よりも加齢に伴う身体機能や筋力低下などサルコペニアの要素が関連すると考えられた。

**18. 福田里香，出口純子，井元淳，豊永敏宏，岩本幸英**
**：「単身世帯の勤労男性における食習慣改善についての実践の効果.」**
〈主　　催〉日本職業・災害医学会
〈開 催 場 所〉和歌山
〈開催年月日〉2018 年 10 月 20 日～21 日

（概要）男性単身世帯者を対象に「野菜摂取量増加」と「夕食を腹八分目」に重点を置いた指導法を実践し、効果を検証した。手軽で簡単な調理を実演することで行動変容が促された。

**19. 出口純子，福田里香，井元淳，豊永敏宏，岩本幸英**
**：「プレ更年期（35～44 歳）および更年期の勤労女性における動脈硬化に関する身体組成と生活習慣の特徴.」**
〈主　　催〉日本職業・災害医学会
〈開 催 場 所〉和歌山
〈開催年月日〉2018 年 10 月 20 日～21 日

（概要）更年期女性での動脈硬化に関連する要因を明らかにした。動脈硬化度に関連する要因がプレ更年期・更年期で異なるため、区分に応じた支援の必要性が示された。

**20. Yotsumoto T, Hiroshige K, Inomoto A, Fuchi M, Takahashi S**
**：「Toward the development of a sitting position training system.」**
〈主　　催〉The Society of Insturument and Control Engineers
〈開 催 場 所〉バンコク
〈開催年月日〉2019 年 8 月 23 日～25 日

（概要）より効果的な座位バランス訓練システムを構築し、この装置が生体の姿勢制御メカニズムにどのように影響するかを調べた。姿勢保持反応を誘発する作用があることが示された。

**21. 四元孝道，渕雅子，井元淳，廣滋恵一，出口純子，福田里香**
**：「地域高齢者の認知機能検査と身体機能検査との関連性における予備的研究.」**
〈主　　催〉日本作業療法士協会

〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2019 年 9 月 6 日～8 日

（概要）地域高齢者における MoCA-J と身体機能検査との関連性について後方視的研究を行った。認知機能は加齢で低下し、栄養バランス面にも関連があることが示唆された。

**22. 四元孝道，井元淳，渕雅子**
**：「勤労者の年代別における注意検査と身体機能検査.」**
〈主　　催〉日本高次脳機能障害学会
〈開 催 場 所〉仙台
〈開催年月日〉2019 年 11 月 28 日～29 日

（概要）勤労者に対して Trail Making Test-B、かな拾いテスト B などを測定し、その関連性を検討した。中年期からの注意機能低下予防のための介入が期待された。

**23. 松尾聡，岡元昌樹，池内智之，森駿一朗，川口淳，井元淳，津田徹**
**：「特発性間質性肺炎に対する包括的呼吸リハビリテーション早期介入は治療効果良好因子である.」**
〈主　　催〉日本呼吸器学会
〈開 催 場 所〉web 開催
〈開催年月日〉2020 年 9 月 20 日～22 日

（概要）特発性間質性肺炎（IIP）に対する適切な呼吸理学療法開始時期や効果予測因子を明らかにした。IIP 診断後できるだけ早期に PR を開始することで治療効果が高まる可能性がある。

**24. 森駿一朗，岡元昌樹，池内智之，松尾聡，井元淳，津田徹**
**：「IPF と COPD における呼吸リハビリテーションの効果―傾向スコアマッチングを用いた検討―.」**
〈主　　催〉日本呼吸ケア・リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉京都市
〈開催年月日〉2021 年 3 月 19 日～20 日

（概要）IPF と COPD における呼吸リハの効果を比較した。IPF は COPD よりも呼吸リハの効果が小さい傾向を認めた。また IPF の中で呼吸リハの反応性の異なる傾向があった。

**25. 松尾聡，岡元昌樹，原口怜未，財前圭晃，井元淳，池内智之，森駿一朗，佐々木烈，河野哲也，津田徹**
**：「FILD 患者に対する呼吸リハビリテーションの早期導入の意義.」**
〈主　　催〉日本呼吸器学会九州支部、日本結核・非結核性抗酸菌症学会九州支部など
〈開 催 場 所〉熊本
〈開催年月日〉2021 年 10 月 22 日～23 日

（概要）線維化を伴う間質性肺炎（F-ILD）患者に対する呼吸リハビリテーションの導入時期の影響について検討した。呼吸リハ導入までの期間が短い程、SGRQ は改善することが示された。

**26. 川上慧，宗哲哉，山下直樹，大場健一郎，井元淳，髙橋精一郎**
**：「肺がん切除患者における術前栄養状態が術後の Performance Status の変化に与える影響.」**
〈主　　催〉日本肺癌学会
〈開 催 場 所〉横浜
〈開催年月日〉2021 年 11 月 26 日～28 日

（概要）肺がん切除患者において術前栄養状態が術後に与える影響を明らかにした。術前の栄養状態を評価することは術後合併症や PS 回復の予測において重要であることが示唆された。

**27. 川上慧，大場健一郎，井元淳，髙橋精一郎**
**：「高齢肺がん切除患者における術前栄養状態と術後合併症との関連.」**
〈主　　催〉日本がん・リンパ浮腫理学療法研究会
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2022 年 10 月 29 日～30 日

（概要）高齢者肺がん切除患者において身体、呼吸機能が術後合併症に与える影響を明らかにすることを目的とした。術前の栄養状態を評価することの重要性が示唆された。

| | |
|---|---|
| | **28. 川上慧，宗哲哉，山下直樹，高山真緒，大場健一郎，井元淳，髙橋精一郎**<br>**：「肺がん切除患者における術前栄養状態の重症度別での特徴.」**<br>〈主　　催〉日本呼吸ケア・リハビリテーション学会<br>〈開 催 場 所〉千葉<br>〈開催年月日〉2022 年 11 月 11 日～12 日 |
| | （概要）肺がん切除患者における CONUT score による重症度別臨床的特徴を報告した。術前栄養状態を評価することは術後合併症や PS 回復の予測において重要であることが示唆された。 |
| | **29. 井元淳，神﨑良子，廣滋恵一，四元孝道，吉田遊子，中藤佳絵，烏山昌起，早川智之，橋元隆**<br>**：「地域在住高齢者における呼吸筋力に影響を与える要因.」**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会九州ブロック会<br>〈開 催 場 所〉北九州<br>〈開催年月日〉2022 年 11 月 26 日～27 日 |
| | （概要）地域在住高齢者における呼吸筋力に影響を与える要因を検討した。高齢女性において低強度身体活動量が呼吸筋力と関連する可能性があることが推測された。 |
| | **30. 西田楓雅，今村純平，橋本隆太，井元淳**<br>**：「大学生におけるタバコに関する知識・認識の調査.」**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会九州ブロック会<br>〈開 催 場 所〉北九州<br>〈開催年月日〉2022 年 11 月 26 日～27 日 |
| | （概要）大学生の新型タバコへの認識を明らかにすることを目的とした。喫煙・非喫煙者のいずれも半数以上が新型タバコの健康被害のリスクを低く認識していた。 |
| | **31. 早川智之，井元淳，神﨑良子，廣滋恵一，四元孝道，吉田遊子，中藤佳絵，烏山昌起，橋元隆**<br>**：「地域在住高齢者における栄養状態と食品群別摂取状況との関連.」**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会九州ブロック会<br>〈開 催 場 所〉北九州<br>〈開催年月日〉2022 年 11 月 26 日～27 日 |
| | （概要）地域高齢者での栄養状態と食品群別摂取状況との関連を検討した。高齢者では食品群別の摂取状況の違いにより栄養状態の特異的な特徴と関連することが示唆された。 |
| 主な社会活動 | ・福岡県理学療法士会福岡 1 地区運営委員　（2008 年 4 月～2011 年 3 月）<br>・福岡県理学療法士会福岡 1 地区研修会講師　（2013 年 10 月）<br>・福岡県理学療法士会北九州支部研修会講師　（2015 年 2 月）<br>・福岡県理学療法士学会ポスター発表座長　（2015 年 2 月）<br>・「理学療法福岡」査読委員　（2015 年 6 月～現在に至る）<br>・九州栄養福祉大学市民公開講座講師　（2015 年 11 月）<br>・九州理学療法士・作業療法士合同学会ポスター発表座長　（2015 年 11 月）<br>・第 22 回呼吸療法セミナー講師　（201612 月）<br>・福岡県理学療法士学会口述発表座長　（2019 年 2 月）<br>・全国リハビリテーション学校協会学術委員会委員　（2019 年 7 月～現在に至る）<br>・第 2 回臨床実習指導者福岡県講習会講師　（2019 年 8 月）<br>・第 4 回臨床実習指導者福岡県講習会講師　（201910 月）<br>・日本呼吸理学療法学会選挙管理委員会副委員長　（2021 年 7 月～現在に至る）<br>・日本予防理学療法学会雑誌編集委員会委員　（20217 月～現在に至る）<br>・日本予防理学療法学会評議員　（20217 月～現在に至る）<br>・福岡県理学療法士会第 3 回筑後支部研修会講師　（2021 年 9 月）<br>・2021 年度第 1 回臨床実習指導者福岡県講習会講師　（2021 年 11 月）<br>・2021 年度第 6 回臨床実習指導者福岡県講習会講師　（2021 年 12 月）<br>・2022 年度臨床実習指導者福岡県講習会（第 1 回九州栄養福祉大学）講師・世話人　（2022 年 6 月）<br>・2022 年度臨床実習指導者福岡県講習会（第 2 回九州栄　（20226 月） |

| | | |
|---|---|---|
| | 養福祉大学）講師 | |
| | ・日本産業保健理学療法雑誌編集委員会委員 | （2022 年 6 月～現在に至る） |
| | ・日本産業理学療法研究会評議員 | （2022 年 7 月～現在に至る） |
| | ・2022 年度臨床実習指導者福岡県講習会（第 3 回九州栄養福祉大学）講師 | （2022 年 7 月） |
| | ・2022 年度臨床実習指導者福岡県講習会（小倉リハビリテーション学院）世話人 | （2022 年 8 月） |
| | ・2022 年度臨床実習指導者福岡県講習会（九州医療スポーツ専門学校）講師 | （2022 年 10 月） |
| 所　属　学　会 | 日本理学療法士協会協会員 | （2004 年～現在に至る） |
| | 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会 | （2010 年～現在に至る） |
| | 日本 PNF 学会 | （2007 年～2016 年） |
| | 日本職業・災害医学会 | （2013 年～現在に至る） |
| | 産業理学療法研究会 | （2013 年～2021 年） |
| | 理学療法科学学会 | （2016 年～現在に至る） |
| | 日本産業衛生学会 | （2017 年～2023 年） |
| | 日本リハビリテーション栄養学会 | （2017 年～現在に至る） |
| | 日本集中治療医学会 | （2019 年～現在に至る） |
| | 日本産業理学療法研究会 | （2021 年～現在に至る） |
| | 日本予防理学療法学会 | （2021 年～現在に至る） |
| | 日本呼吸理学療法学会 | （2021 年～現在に至る） |
| 受　賞　歴 | 第 1 回日本職業・災害医学会 奨励賞（筆頭） | （2014 年 11 月） |
| | 第 3 回日本職業・災害医学会 奨励賞（共同） | （2016 年 11 月） |
| | 第 7 回日本職業・災害医学会 奨励賞（共同） | （2021 年 11 月） |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

中藤（ナカトウ） 佳絵（カエ）　NAKATOU Kae　准教授

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ<br>・スタートアップ教育Ⅰ、スタートアップ教育Ⅱ<br>・動作分析演習Ⅰ<br>・日常生活活動演習<br>・物理療法Ⅰ<br>・物理療法Ⅱ<br>・理学療法総合演習<br>・理学療法卒業研究<br>・性差医療と理学療法<br>・先端医療と理学療法<br>・臨床実習Ⅰ、臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ |
| 専門分野 | 日常生活活動・物理療法 |
| 最終学歴 | 九州リハビリテーション大学校　理学療法学科　1993 年度卒業<br>放送大学大学院　文化科学研究科文化科学専攻　生活健康科学プログラム　2016 年度卒業 |
| 学位 | 修士（学術） |
| 職歴 | 宗像水光会総合病院リハビリテーション部　（1994 年 4 月～1998 年 4 月）<br>独立行政法人国立病院機構東佐賀病院リハビリテーション科　（1999 年 6 月～2003 年 3 月）<br>独立行政法人国立病院機構福岡東医療センター附属リハビリテーション学院 理学療法学科　（2003 年 4 月～2005 年 3 月）<br>専門学校九州リハビリテーション大学校理学療法学科　（2006 年 4 月～2011 年 3 月）<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 講師　（2011 年 4 月～2021 年 3 月）<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 准教授　（2021 年 4 月～現在に至る） |
| 教育上の業績 | ○理学療法士養成校の学生に対する臨床実習指導　（1997 年～2003 年）<br>○福岡東医療センター附属ビリテーション学院における専任教員　（2003 年～2005 年）<br>○『日常生活活動（ADL)』（第 2 版）執筆　（2007 年 4 月，神陵文庫）（再掲）<br>○『義肢装具学』（第 2 版）執筆（2015 年 3 月，神陵文庫）（再掲）<br>○移乗移動動作・床上動作時の画像資料および使用した衣服作成（2009 年 3 月）<br>○『臨床実習Ⅰ～Ⅳ』映像資料作成　（2020 年 4 月）<br>○『理学療法評価学統合演習』映像資料作成（2022 年 4 月）<br>○「妊娠・出産の経験が排尿機能に及ぼす影響」（2017 年 7 月）<br>○「要支援高齢者向け介護予防教室における複合的プログラムの効果」（2018 年 10 月） |
| 主な研究活動 | 【学術論文】<br>1. 「北九州市における尿失禁予防教室　第 1 報　－教室開催の背景とその概要－」<br>九州栄養福祉大学研究紀要 第 8 号，2011 年 12 月<br>（概要）　副題を「教室開催の背景とその概要」とし、平成 19 年より進めてきた女性のための尿失禁予防教室について開催までの経緯とその概要について報告した。本教室は、北九州市行政・泌尿器科医会の協力のもと、40 歳以上の女性を対象に 8 回（3 か月）を 1 教室として、年に 2～3 教室開催するものである。専門の知識取得や実施期間の養成、プログラムの立案・試行を行い、問題解決に向けてのプロセスが報告されている。 |

著者：中藤佳絵、吉田遊子、神﨑良子

**2. 「北九州市における尿失禁予防教室 第2 報 －教室開催の背景とその概要－」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第8号，2011年12 月

（概要）平成 22 年度女性のための尿失禁予防教室の分析結果を報告した。参加者は教室開始時と終了時で尿もれによる生活の損失度の改善、日中の排尿回数の減少が認められ、尿もれに効果があるとされる骨盤底筋体操や生活習慣に関する講義により構成される本教室には一定の効果があると結論付けた。しかし参加者の減少が課題として残り、北九州市民への広報の不足や開催場所の再考が示唆された。

著者：神﨑良子・吉田遊子・中藤佳絵

**3. 「骨盤底筋の筋機能評価の試行」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第10号，2013年12 月

（概要）日本排尿機能学会による調査では、本邦では40歳以上の女性の尿失禁保有率は43.9%であり、腹圧性尿失禁が多くを占める。この原因として①骨盤底の脆弱さ、②膀胱頸部の組織の脆弱さが考えられている。軽度から中等度の同失禁者に対しては骨盤底筋体操等の指導がなされているが、骨盤底筋の筋機能を客観的に評価した報告は見当たらない。本稿では腹圧性尿失禁の評価等で用いられている、筋電図バイオフィードバック機器を用いて、健常女性の骨盤底筋の筋機能評価を行ない報告した。

著者：吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子、橋元　隆

**4. 「臨床実習評価項目と実習成績との関連」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第10号，2013年12 月

（概要）　前身校の3～7期生計333名を対象に長期実習Ⅰ期とⅡ期（各10週間）の施設ごとの成績を分析した。異なる実習施設における総合成績の相関は低く、実習指導者との対人関係が寄与していることが窺えた。また、合否の判定は実習に臨む学生の態度や指導者への報告・連絡・相談が重要であることが示唆され、基礎知識や臨床応用的発想などが幅広く重要であることが窺えた。

著者：堤文生、石橋敏郎、神﨑良子、中藤佳絵、吉田遊子、坂本親宣、大峯三郎、橋元隆、大島弘三

**5. 「蓄尿障害が生活の質に与える影響について～ICIQ-SF を用いて～」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第11号，2014年12 月

（概要）副題を「ICIQ-SF を用いて」とし、尿失禁を有する40歳以上の女性135名を対象とした。評価にはQOL指標として国際尿失禁会議尿失禁質問票短縮版（ICIQ－SF）と排尿日誌から得られる項目を用いた。結果、尿失禁の種類による年齢やICIQ-SF に差は見られなかった。医療の介入前から生活の質が低下することが示唆され、尿失禁に対する知識や体操を修得することが生活の質を向上しうることが推測された。

著者：中藤佳絵、吉田遊子、神﨑良子、橋元隆

**6. 「本学理学療法学科における客観的臨床能力試験（OSCE）の試行」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第11号，2014年12 月

（概要）理学療法士養成の教育課程では、幅広い知識の理解とともに基本的臨床技能の習得を目的としている。本学科のカリキュラムにおいては3年前期から段階的に実習を組み込み、その総単位数は 19 単位である。既存の学内教育では、学生の認知領域レベルは確認できても、情意領域レベルに関しては、確認する場面が少なく、臨床実習中にあらためて指導者から指摘されることがある。そこで、近年、理学療法教育現場でも導入されている客観的臨床能力試験の本学科版を開発・実施し、報告した。

著者：吉田遊子、千代丸信一、石橋敏郎、廣滋恵一、中藤佳絵、神﨑良子、井元　淳

**7. 「理学療法士国家試験の点数に影響を及ぼす要因」**
九州栄養福祉大学研究紀要12，2015年12月

（概要）平成26年度第50回国家試験の結果を踏まえ、業者模試の領域別の点数やその推移から国家試験の結果に影響を及ぼす因子を検討した。その結果、運動学・脳神経障害・心理学の重要性が示唆された。

著者：井元　淳、石橋敏郎、中藤佳絵、髙橋誠一郎、橋元　隆

**8. 「女性尿失禁患者に対する理学療法士らによる下部尿路リハビリテーションの介入効果**

～QOL 評価～」
日本女性骨盤底医学会誌、vol13　No.1　2016 年

（概要）尿失禁予防教室での下部尿路リハビリテーション（行動療法）の介入が、参加者の生活の質を向上させるか。また、その生活の質はどのような下部尿路症状と相関関係にあるかを検証した。結果、日常生活活動における排尿回数や失禁回数と相関が得られた。
著者：中藤佳絵、神﨑　良子、吉田　遊子、橋元　隆、佐野　志郎、久保かおり、西井　久枝、藤本　直浩、松本　哲朗

**9.「理学療法士による女性腹圧性尿失禁患者に対する筋電図検査を利用した個別骨盤底筋指導の初期経験」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第 13 号，2016 年 12 月

（概要）女性腹圧性尿失禁患者に対して筋電図バイオフィードバックトレーニング機器を用いた骨盤底筋の筋電図検査および骨盤底筋体操指導を実施した。筋電図検査より、骨盤底筋障害は骨盤底筋の筋力低下タイプと筋緊張亢進タイプに分類され、骨盤底筋体操指導において指導方法が異なることが示唆された。
著者：吉田遊子、中藤佳絵、橋元　隆、西井久枝、藤本　直浩

**10.「物理療法科目における現状と課題」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第 13 号，2016 年 12 月

（概要）理学療法における物理療法の役割とその効果について、学内における卒前教育において取り扱うべき内容を検討した。臨床実習との連携を図り、学生に明確な物理療法の効果と使用経験を積ませることが、卒後の臨床において物理療法を活用していくことにつながる結果となった。また、国家試験では、生理学や解剖学を中心とした生体への影響の理解や運動力学や物理学の見識が多く含まれ、これらに対しても学生の十分な理解を促す科目運営が求められる結果となった。
著者：中藤佳絵、井元　淳、　　木村美子

**11.「理学療法士国家試験の点数に影響を及ぼす要因の変化」**
九州栄養福祉大学研究紀要 13 号，2016 年 12 月

（概要）第 50 回理学療法士国家試験と第 51 回を比較検討した。その結果、より幅広い領域との関連性が示され、試験結果に影響を与えていることが分かった。また、専門分野での図表の増加や思考力を問う問題なども多く、系統的な学内教育やリメディアル教育の充実、知識を定着させて応用できるように学生支援を行っていく必要が示唆された。
著者：井元淳、石橋敏郎、中藤佳絵、梅野和也、大峯三郎

**12「生活期の脳卒中後在宅生活者の心身機能および環境因子が日常生活活動に与える影響」**
九州栄養福祉大学研究紀要 第 14 号，2017 年 12 月

（概要）脳卒中後に障害を有して在宅生活を行う生活期の対象者における心身機能と生活環境因子が日常生活活動に与える影響について、TUG、HDS、生活空間評価シートおよび生活や介護状態を問うアンケートを用いて身体活動量との関連を検証した。結果として身体機能および認知機能と身体活動量と相関があり、行動範囲の狭小化が明確になった。生活環境因子では歩道が明確であることや欲求を伴った心理的側面への働きかけを含めて個々にあったアプローチが必要と考える。
著者：中藤佳絵、伊藤圭一、岩本直輝、志田啓太郎

**13.「解剖・生理・運動学の 3 領域が理学療法士国家試験に与える影響」**
九州栄養福祉大学研究紀要 14 号，2017 年 12 月

（概要）解剖学・生理学・運動学の 3 領域の警戒率やその成績推移から国家試験の結果に影響を及ぼす要因の検討を行った。国家試験直近の 3 領域の正解率は、第 52 回国家試験結果に影響を与えていることが示唆された。入学当初からの学生の知識の定着と 4 年時の国家試験対策の初期におけるこの 3 領域への重点指導の必要性が推察された。
著者：井元淳、石橋敏郎、中藤佳絵、梅野和也、大峯三郎

**14.「妊娠・出産の経験が排尿機能に及ぼす影響」**
放送大学大学院　文化科学研究科文化科学専攻　修士論文　2017 年 1 月

（概要）　妊娠や出産による腹部や骨盤底への負荷が、蓄尿および排尿機能に及ぼす影響、さらに介入効果について検証した。

妊娠回数と出産回数および出産方法、下部尿路の機能評価およびQOLを聴取し、介入は、12週間で8回実施した。妊娠および出産が、腹部や骨盤底に与える影響は尿失禁だけではなく下部尿路機能にも影響しており、経腟分娩経験者は、下部尿路リハビリテーションの介入によって排尿回数や排尿量に改善傾向を示しやすいことが示唆された。
著者：中藤佳絵

**15. 「深達温熱刺激が生体の自律神経に与える影響」**
九州栄養福祉大学研究紀要15号，2018年12月

（概要）　脳血管障害に伴う上肢の機能障害が日常生活活動に大きな影響を与える。この研究では複合性局所疼痛症候群（CRPS）に着目して、温熱療法としての超音波療法が与える影響を検証した。手部に対する深達温熱療法を選択し、水中法での施行が交感神経及び副交感神経にどのような変化をもたらすかを確認した。自律神経に有意な変化は認められなかったが、介入方法や介入時間についての示唆が得られた。
中藤佳絵、木村美子、高橋精一郎

**16. 「要支援高齢者向け介護予防教室における複合的プログラムの効果**
**～介護予防・日常生活支援総合事業として～」**
九州栄養福祉大学研究紀要16号，2019年12月

（概要）　要支援高齢者向け介護予防教室プログラムでの介入によって、総合的体力や口腔機能、食事に関する行動に対する項目の変化がみられた。通所による複合的プログラムの事業実施による成果と考えられる。日常生活支援総合事業においては、口腔や栄養に関するプログラムを運動器プログラムと同時に提供することで、要支援からの悪化に対する予防の一助となることが示唆された。健康寿命を延伸する複合的かつ継続的な教室開催の意義は大きいと考える。
中藤佳絵、高橋精一郎、橋元隆、宮永敬一

**17. 「理学療法士模擬試験成績を活用した学習指導効果の評価」**
九州栄養福祉大学研究紀要16号，2019年12月

（概要）　2017 年度に国家試験を受験した学生の模試の成績推移をもとに、2018 年度に模試の成績が伸び悩んだ学生に対して行った学習指導の効果を検討した。成績推移を参考に早期に伸び悩む可能性を察知し、積極的な学修指導を行う必要性が示唆された。
井元淳、中藤佳絵、梅野和也、烏山昌起、早川智之、石橋敏郎、大峯三郎

**18 「尿漏れ予防体験会参加者の講座内容理解度と尿漏れ予防対策継続実施状況の検討」**
九州栄養福祉大学研究紀要 16号，2019年12 月

（概要）2017年度の「尿漏れ予防体験会」参加者187名を対象に、講座内容の理解度と、体験会3ヵ月後の尿漏れ予防対策継続実施状況についてアンケート調査を実施。講座内容理解度では「骨盤底筋の遅筋と速筋の収縮」の理解者の割合が少なく、尿漏れ予防対策継続実施者は約7割であった。未実施理由として「習ったが、一人で出来ない」等あり、定期的な体験会開催などの支援の必要性が確認された。
吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子

**19. 「地域在住高齢女性における尿失禁に影響を与える要因」**
九州栄養福祉大学研究紀要第19号，2022年12月

（概要）尿失禁の予防・改善プログラムへの寄与を目的に、地域在住高齢女性を対象に、尿失禁と骨格筋量、運動機能との関連を分析した。尿失禁群において、BMIが優位に大きく、SMIは大きく、2 ステップ値が小さい傾向を認めた。このことから、尿失禁に与える要因としては、骨格筋量よりも骨盤底筋群と連結のある股関節周囲筋を活用した運動機能や骨盤底筋群を含むインナーユニットの協調性が重要であることが示唆された。
吉田遊子、井元　淳、中藤佳絵、神﨑良子、廣滋恵一、四元孝道、橋元　隆

【学会発表】

**1. 「問題解決型学習終了後にOSCEを用いた臨床実習開始前の学生評価について」**
〈主　　催〉第40回 日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉大阪国際会議場（グランキューブ大阪）
〈開催年月日〉2005年5月26～28日

（概要）　学生の問題解決能力をより高め、思考力および判断力を養うことを目的に、小グループ学習を中心とした自己主導型学習を導入した。教育評価には従来の口答試験と筆記試験に加

え、患者への配慮や診療技能の使用などを見ることを目的にOSCEを用い、教科を担当した教員と担当していない教員とで採点した。結果、学生評価は教員間で一致する傾向にあったが、教科を担当した教員の方が学生が技術を安全に行えるかどうかの能力を全般的に厳しく判定する傾向を示した。。

田中正則、二宮省悟、亀井隆弘、山元竜二、中藤佳絵、竹下明伸、木村徳久

**2. 「女性高齢者尿失禁予防教室への理学療法士としての取り組み」**

〈主　　催〉第21回 日本老年泌尿器科学会
〈開 催 場 所〉北九州国際会議場
〈開催年月日〉2008年5月24～25日

（概要）尿失禁は日常生活活動の低下を招く一因であり、理学療法士による尿失禁予防運動教室に以下の内容で取り組んだ。①尿失禁予防運動専門指導員の育成②教室プログラムの作成③尿失禁予防教室の実施④「北九州市尿失禁予防教室実施マニュアル」の作成⑤尿失禁予防教室の展開結果：理学療法士が教室運営や今後教室を行うスタッフへの教育に関わり、一定の成果を得ることができた。考察：尿失禁予防教室実施マニュアルの見直しや、行政・教育機関・実施施設などの各機関とのネットワークの構築が課題として挙げられる。

日本老年泌尿器科学会誌　Vol.21　2008

中藤佳絵、吉田遊子、神﨑良子、橋元 隆、田舎中真由美、天野賢治、西井久枝

**3. 「北九州市における尿失禁予防教室＜第１報＞～教室開催の背景とその概要」**

〈主　　催〉第44回 日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉東京国際フォーラム
〈開催年月日〉2009年5月28～30日

（概要）北九州市において介護予防事業の一環として行われた女性高齢者尿失禁予防教室に教育機関として、骨盤底筋の筋力と機能へのアプローチ、および生活習慣など尿失禁に対する基礎知識の教育に取り組んだ。平成19年度にこの事業を委託された2つの実施機関で、実務に関わったスタッフ22名に対してアンケートを配布し、20名から回答を得た。内容は、実務者の内訳や実務者研修前に排泄障害についての理解度、マニュアルの内容、フォローアップの必要性、さらに、本来の業務における変化についてとし、今後の課題を模索した。

理学療法学　Vol.36　Supplement　No.2

中藤佳絵、吉田遊子、神﨑良子、橋元 隆、天野賢治、田舎中真由美、西井久枝

**4. 「北九州市における尿失禁予防教室＜第２報＞～骨盤底筋体操と生活指導を中心に」**

〈主　　催〉第44回 日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉東京国際フォーラム
〈開催年月日〉2009年5月28～30日

（概要）尿失禁は日常生活活動の低下を招く一因であり、平成19年度に北九州市より委託を受け、市内3地区で理学療法士等が3ヵ月間全8回の尿失禁予防教室を開催した。これに参加した女性高齢者51名を対象に教室の効果を検証した。正常群で最終評価時の排尿回数、1回排尿量等で有意差を認め、正常群と腹圧性尿失禁群のＱＯＬ向上が図れたことより骨盤底筋体操および生活指導の効果が得られたといえる。

理学療法学　Vol.36　Supplement　No.2

吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子、橋元 隆、天野賢治、田舎中真由美、西井久枝

**5. 「北九州市における尿失禁予防教室＜第３報＞～教室の効果と今後の課題」**

〈主催〉第7回東アジアヘルスプロモーション会議
〈開催場所〉北九州国際会議場
〈開催年月日〉2009年9月26～27日

（概要）2007年以降に実施された尿失禁予防教室に参加した女性高齢者を対象とし教室の効果を検証した。方法：初期評価(以下、初期)および最終評価(以下、最終)を尿失禁の種類で比較検討した。さらに初期および最終の変化も比較検討した。評価項目は年齢、体重、BMI、ウエスト周径、排尿回数、尿漏れ回数、排尿量、飲水量とした。医療機関受診への足がかりとして、また尿失禁に対する正しい知識の習得については一定の効果がえられたが、切迫性尿失禁や重度の腹圧性尿失禁に対する教室の効果には課題を残した。

中藤佳絵、吉田遊子、神﨑良子、橋元 隆、田舎中真由美、天野賢治、西井久枝

| | |
|---|---|
| | 6. 「北九州市における高齢者尿失禁予防事業への関わり～理学療法士の立場から～」<br>〈主　　催〉第28 回 日本老年泌尿器科学会<br>〈開 催 場 所〉アクトシティ浜松コングレスセンター<br>〈開催年月日〉2015 年 5 月 8～9 日<br>（概要）北九州市で平成 19 年度より介護予防事業の一環として行っている高齢者尿失禁予防事業における尿失禁予防教室に参加した 263 名について、その効果を検討した。結果、本教室は尿もれおよびＱＯＬ改善に有効であり、多職種連携による事業を今後とも継続していく。（第 28 回日本老年泌尿器科学会，平成 27 年 5 月）学会長賞受賞<br>吉田遊子、神﨑良子、中藤佳絵、橋元 隆、久保かおり、佐野志郎、西井久枝、松本哲朗 |
| | 7. 「北九州市における「女性のための尿失禁予防教室」参加者の高齢者実態調査について」<br>〈主　　催〉第28 回 日本老年泌尿器科学会<br>〈開催場所〉アクトシティ浜松コングレスセンター<br>〈開催年月日〉2015 年 5 月 8～9 日<br>（概要）平成 19 年度より行っている尿失禁予防教室修了後の参加者の尿もれ症状、体操の継続、ＱＯＬについて追跡アンケート調査を行った。225 名中 116 名（回収率 51.1%）から回答があり、概ね効果が維持されていた。<br>神﨑良子、吉田遊子、中藤佳絵、橋元 隆、久保かおり、佐野志郎、西井久枝、松本哲朗 |
| | 8. 「北九州市における理学療法士による「尿もれ予防体験会」の課題<br>－体験会実施後報告書より－」<br>〈主　　催〉第30 回 日本老年泌尿器科学会<br>〈開 催 場 所〉ソラシティカンファレンスセンター（東京）<br>〈開催年月日〉2017 年 6 月 9～10 日<br>（概要）2015 年度から尿漏れ予防の啓発事業として年間 15 団体を上限として理学療法士が「尿漏れ予防体験会」を行っている。尿漏れ予防体操の認知度は低い（32%）が、体操を継続して取り組みたいという意見が多く（66.7%）、本事業に理学療法士が関わる意義が確認された。<br>吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子、橋元 隆、久保かおり、西井久枝、藤本直浩、松本哲朗<br>吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子、橋元 隆、久保かおり、西井久枝、藤本直浩、松本哲朗 |
| | 9.「妊娠・出産の経験が排尿機能に及ぼす影響」<br>〈主　　催〉第19 回 日本女性骨盤底医学会<br>〈開 催 場 所〉ザ・グランユアーズフクイ（福井）<br>〈開催年月日〉2017 年 7 月 29～30 日<br>（概要）妊娠や出産による腹部や骨盤底への負荷が、蓄尿および排尿機能に及ぼす影響、さらに介入効果について検証した。<br>妊娠回数と出産回数および出産方法、下部尿路の機能評価および QOL を聴取し、介入は、12 週間で 8 回実施した。妊娠および出産が、腹部や骨盤底に与える影響は尿失禁だけではなく下部尿路機能にも影響しており、経腟分娩経験者は、下部尿路リハビリテーションの介入によって排尿回数や排尿量に改善傾向を示しやすいことが示唆された。<br>中藤佳絵、吉田遊子、神﨑良子、橋元 隆、久保かおり、西井久枝、藤本直浩、松本哲朗 |
| | 10.「要支援高齢者向け介護予防教室における複合的プログラムの効果」<br>〈主　　催〉第5回 日本予防理学療法学会<br>〈開 催 場 所〉北九州国際会議場<br>〈開催年月日〉2018 年 10 月 20～21 日<br>（概要）要支援高齢者向け介護予防教室プログラムでの介入によって、総合的体力や口腔機能、食事に関する行動に対する項目の変化がみられた。通所による複合的プログラムの事業実施による成果と考えられる。日常生活支援総合事業においては、口腔や栄養に関するプログラムを運動器プログラムと同時に提供することで、要支援からの悪化に対する予防の一助となることが示唆された。健康寿命を延伸する複合的かつ継続的な教室開催の意義は大きいと考える。<br>中藤佳絵、、髙橋精一郎、橋元 隆、宮永敬一 |
| 主な社会活動 | ・北九州市立年長者研修大学校講義（体力測定）　（2005 年～2018 年）<br>・北九州市による女性のための尿失禁予防事業　（2007 年 4 月～2016 年 3 月）<br>キューピット教室事業運営 |

| | |
|---|---|
| | ・北九州市による女性高齢者尿失禁予防事業　（2007・2008・2013 年）<br>実務者講習<br>・北九州市による女性のための尿失禁予防事業　（2008 年）<br>キューピット教室実施<br>・北九州市委託事業　尿もれ予防講座　講師　（2012 年～現在に至る）<br>年間 1~2 講演<br>・北九州市委託事業　尿もれ予防体験会　講師　（2015 年～現在に至る）<br>年間 5 講演<br>・地域在住高齢者に対する多面的健康づくり教室　（2021 年～現在に至る）<br>運営および講師 |
| 所　属　学　会 | 日本理学療法士協会　（1994 年 4 月～現在に至る）<br>日本老年泌尿器学会　（2008 年 4 月～2018 年 3 月）<br>日本女性骨盤底医学会　（2015 年 4 月～現在に至る）<br>NPO-CREC ネット排泄ケアを考える会　（2020 年 4 月～現在に至る） |
| 受　賞　歴 | なし |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

吉田 遊子（ヨシダ ユウコ）　YOSHIDA Yuko　准教授

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ<br>・スタートアップ教育Ⅰ・Ⅱ<br>・医療人のための教育学Ⅱ<br>・理学療法評価学Ⅱ、理学療法評価学Ⅲ、理学療法評価学統合演習Ⅱ<br>・生活環境論、性差医療と理学療法、先端医療と理学療法<br>・理学療法総合演習<br>・理学療法卒業研究<br>・地域理学療法学<br>・臨床実習Ⅰ、臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ、臨床実習Ⅴ |
| 専門分野 | ■　理学療法評価学<br>■　生活環境理学療法学<br>■　ウィメンズヘルス理学療法<br>■　地域理学療法学 |
| 最終学歴 | 放送大学大学院　文化科学研究科文化科学専攻生活健康科学プログラム（平成30年3月卒業） |
| 学位 | 修士（学術） |
| 職歴 | 医療法人社団宗像水光会総合病院リハビリテーション部 理学療法士<br>（平成7(1995)年4月～平成17(2005)年3月）<br>専門学校　九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 助手<br>（平成17(2005)年4月～平成23(2011)年3月）<br>専門学校　九州リハビリテーション大学校 理学療法学科 講師<br>（平成23(2011)年4月～平成24(2012)年3月）<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部 理学療法学科 講師<br>（平成24(2012)年4月～令和3(2021)年3月）<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部 理学療法学科 准教授<br>（令和3(2021)年4月～現在に至る）<br>○理学療法評価学Ⅱ・Ⅲ、理学療法評価学統合演習Ⅱ・生活環境論、他　担当 |
| 教育上の業績 | 【作成した教材】<br>○臨床実習前における客観的臨床能力試験評価用紙(平成26(2014)年7月～令和4(2022)年4月)<br>○臨床実習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ用ポートフォリオのルーブリック（令和元(2019)年4月～現在)<br>○臨床実習における体験報告会ルーブリック（令和2(2020)年2月～現在)<br>○学内実習用、模擬症例の動画作成（令和3(2021)年3月～10月）<br>○理学療法評価学統合演習Ⅱにおける模擬症例の動画作成（令和4(2022)年4月～6月）<br>○臨床実習前における客観的臨床能力試験評価用紙改訂版（令和4(2022)年8月～現在) |
| 主な研究活動 | 【著書】(いずれも分担執筆)<br>1.『義肢装具学』(第2版)　(平成27(2015)年3月, 神陵文庫)<br>（概要）義肢装具の支給時に該当する「介護保険制度」、「障害者総合支援法」について概説し、各制度における補装具給付手続きの流れと利用者負担、問題点等について解説している。理学療法学テキストⅥ義肢装具学　1. 義肢装具総論　4.『義肢装具の支給体系』p27 - 37、編者：大峯三郎、橋元　隆、著者：石橋敏郎、井口茂、大峯三郎、大藪弘子、神沢信行、橋元　隆、廣滋恵一、吉田遊子、他<br>2.『標準理学療法学　専門分野　日常生活活動学・生活環境学』(第5版)<br>(平成29(2017)年9月, 医学書院)<br>（概要）生活環境支援に必要な社会保障制度、高齢者保健福祉施策、障害者保健福祉制度等についての概要、歴史的変遷などについて解説している。生活環境学Ⅰ総論 3『生活環境と法的諸制度』p246－274、編者：鶴見隆正、隆島研吾、著者：隆島健吾、若山佐一、辻下守弘、橋元　隆、吉田遊子 |

3.『リハスタッフのための排泄リハビリテーション実践アプローチ』

（平成30(2018)年2月,メジカルビュー社）

（概要）北九州市における高齢者尿失禁予防事業における理学療法士の関わりと、「女性のための尿失禁予防教室」の立ち上げから教室開催・教室の成果、啓発事業等、10年以上にわたって行われている多職種連携による地域活動について述べている。5章15『地域における排泄リハビリテーション』p376‐383、編集：鈴木重行、井上倫恵、著者：鈴木重行、井上倫恵、吉田遊子、吉川羊子、重田美和・他

【研究論文・翻訳】

1.　「骨盤底筋の筋機能評価の試行」

（九州栄養福祉大学研究紀要　第10号，平成25(2013)年12月22日）

（概要）本邦では40歳以上の女性の尿失禁保有率は43.9%であり、腹圧性尿失禁が多くを占める。この原因として①骨盤底の脆弱さ、②膀胱頸部の組織の脆弱さが考えられている。軽度から中等度の同失禁者に対しては骨盤底筋体操等の指導がなされているが、骨盤底筋の筋機能を客観的に評価した報告は見当たらない。本稿では腹圧性尿失禁の評価等で用いられている、筋電図バイオフィードバック機器を用いて、健常女性の骨盤底筋の筋機能評価を行ない報告した。吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子、橋元 隆

2.　「臨床実習評価項目と実習成績との関連」

（九州栄養福祉大学研究紀要　第10号，平成25(2013)年12月22日）

（概要）前身校の3～7期生計333名を対象に長期実習Ⅰ期とⅡ期（各10週間）の施設ごとの成績を分析した。異なる実習施設における総合成績の相関は低く、実習指導者との対人関係が寄与していることが窺えた。また、合否の判定は実習に臨む学生の態度や指導者への報告・連絡・相談が重要であることが示唆され、基礎知識や臨床応用的発想などが幅広く重要であることが窺えた。堤文生、石橋敏郎、神﨑良子、中藤佳絵、吉田遊子、坂本親宣、大峯三郎、橋元 隆、大島弘三

3.「本学理学療法学科における客観的臨床能力試験（OSCE）の試行」

（九州栄養福祉大学研究紀要　第11号，平成26(2014)年12月）

（概要）理学療法士養成の教育課程では、幅広い知識の理解とともに基本的臨床技能の習得を目的としている。本学科のカリキュラムにおいては3年前期から段階的に実習を組み込み、その総単位数は19単位である。既存の学内教育では、学生の認知領域レベルは確認できても、情意領域レベルに関しては、確認する場面が少なく、臨床実習中にあらためて指導者から指摘されることがある。そこで、近年、理学療法教育現場でも導入されている客観的臨床能力試験の本学科版を開発・実施し、報告した。吉田遊子、千代丸信一、石橋敏郎、廣滋恵一、中藤佳絵、神﨑良子、井元 淳

4.「蓄尿障害が生活の質に与える影響について」

（九州栄養福祉大学研究紀要　第11号，平成26(2014)年12月）

（概要）副題を「ICIQ-SFを用いて」とし、尿失禁を有する40歳以上の女性135名を対象とした。評価にはQOL指標として国際尿失禁会議尿失禁質問票短縮版（ICIQ－SF）と排尿日誌から得られる項目を用いた。結果、尿失禁の種類による年齢やICIQ-SFに差は見られなかった。医療の介入前から生活の質が低下することが示唆され、尿失禁に対する知識や体操を修得することが生活の質を向上しうることが推測された。中藤佳絵、吉田遊子、神﨑良子、橋元 隆：

5.「理学療法士による女性腹圧性尿失禁患者に対する筋電図検査を利用した個別骨盤底筋指導の初期経験」

（九州栄養福祉大学研究紀要　第13号，平成28(2016)年12月22日）

（概要）女性腹圧性尿失禁患者に対して筋電図バイオフィードバックトレーニング機器を用いた骨盤底筋の筋電図検査および骨盤底筋体操指導を実施した。筋電図検査より、骨盤底筋障害は骨盤底筋の筋力低下タイプと筋緊張亢進タイプに分類され、骨盤底筋体操指導において指導方法が異なることが示唆された。吉田遊子、中藤佳絵、橋元 隆、西井久枝、藤本直浩：

6.「エビデンスに基づく骨盤底の理学療法　科学と臨床をつなぐ　原著第2版」　翻訳

（平成29(2017)年10月,医歯薬出版）

（概要）第７章２「女性の過活動膀胱に対する電気刺激治療」の部分を担当。p225－237、監訳修：野村昌良、鈴木重行、訳者：鈴木重行、三輪好生、森山真吾、井上倫恵、吉田遊子・他

**7.「女子大学生の健康知識とヘルスリテラシーが生活習慣に及ぼす影響」**

（放送大学大学院　文化科学研究科文化科学専攻生活健康科学プログラム修士論文、平成30年３月）

（概要）女子大学生の生活習慣改善の基礎資料とするために、健康知識と入手、理解、評価、活用という４つの側面から構成されるヘルスリテラシーが、生活習慣に及ぼす影響について検討した。分析対象は、医療系大学に所属する女子150名で、女子大学生の生活習慣を改善するためには、生活習慣の種類によって、異なるレベルのヘルスリテラシーを促進させる教育支援が有効であることが示唆された。著者：吉田遊子、戸ヶ里泰典、 横山由香里

**8.「健康長寿を目指した高齢者排尿管理における多職種連携」**

（西日本泌尿器科第80巻第５号　平成30(2018)年５月）

（概要）北九州市では介護予防の一環として尿もれ予防事業を行っている。産学官、多職種による取り組みは「北九州方式」と呼ばれ注目されている。本稿では草創期から多職種連携への発展、本事業の効果検証を経て、講座や体験会など新たな取り組みが成熟する過程を報告した。西井久枝、吉田正貴、吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子、橋元 隆、上田真由美、山下博志、松本哲朗、藤本直浩

**9.「大殿筋および股関節外旋筋群への静的ストレッチングはしゃがみこみ動作に影響を及ぼすか」**

（理学療法科学　第33巻６号　平成30(2018)年６月）

（概要）健常大学生26名を対象に、大殿筋のストレッチをする群と股関節外旋筋群のストレッチングをする群に分け（各13名）、セルフストレッチングを１週間実施してもらった。後者ではしゃがみこみ動作時の股関節屈曲角度が有意に増加し、しゃがみこみ動作が可能になった割合が多かった（p=0.018）。股関節外旋筋群ストレッチングは大殿筋ストレッチングに比べてしゃがみこみ動作の獲得に効果が期待できることが示された。田城翼、浦辺幸夫、内山康明、山下大地、吉田遊子

**10.「尿漏れ予防体験会」参加者の講座内容理解度と尿漏れ予防対策継続実施状況の検討～介護予防事業における理学療法士の関わりから～**

（九州栄養福祉大学研究紀要　第16号，令和元(2019)年12月22日）

（概要）平成29年度の「尿漏れ予防体験会」参加者187名を対象に、講座内容の理解度と、体験会３ヵ月後の尿漏れ予防対策継続実施状況についてアンケート調査を実施。講座内容理解度では「骨盤底筋の遅筋と速筋の収縮」の理解者の割合が少なく、尿漏れ予防対策継続実施者は約７割であった。未実施理由として「習ったが、一人で出来ない」等あり、定期的な体験会開催などの支援の必要性が確認された。吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子

**11.「理学療法学科の学内実習における学生満足度調査」**

（九州栄養福祉大学研究紀要　第17号　令和２(2020)年12月）

（概要）令和２年度の新型コロナウィルス感染拡大に伴い、学外での臨床実習を実施することが困難となり、学内実習に移行した。学内実習の内容は、臨床実習指導者の協力を得ながら、２週間ごと４疾患に対する臨床推論と実技演習等を実施した。学生アンケートからは「様々な分野の知識が再確認できた」「もう少し実技をしたかった」等の意見があり、今後の課題が確認された。早川智之、河上淳一、吉田遊子、奥田憲一、大峯三郎

**12.「International Consultation on Incontinence 6th edition (2017)」日本語訳**

（ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法部門ホームページ　令和３(2021)年９月））

国際禁制学会から発行されている「Incontinence 6th Edition (2017) Chapter 12: Adult Conservative Management」の日本語版。尿失禁などの下部尿路症状に対する理学療法を含めた保存療法について記載されている代表的なガイドラインで、「腹圧性尿失禁等に対する電気刺激療法」の部分を担当。P126－154、日本語監修：日本排尿機能学会、井上倫恵、大内ふみか、須永康代、田舎中真由美、平元奈津子、横井悠加、翻訳者：吉田遊子・他

**13.「記念館での「北九州市立年長者研修大学校」研修会実績報告～参加者および学生アンケートからみた研修会の意義～」**

（日本リハビリテーション発祥地記念館 九州リハビリテーション大学校記念館　記念館誌第４号（令和４年度版），令和５(2023)年３月）

（概要）2016年～2022年までに北九州市立年長者研修大学校から理学療法学科に依頼があり、日本リハビリテーション発祥地記念館で開催した研修会（学生による体力測定を含む）の実績、および

| | |
|---|---|
| | 2022 年開催の参加者・学生アンケートの結果について報告した。7 年間で 19 回の研修会を開催し、参加者総数は 635 名であった。参加者は「学生との交流」に大変満足していた。学生は「測定時の説明」「リスク管理」が不十分、「今回の経験を今後の実習で活かせそう」と回答しており、学生の教育効果が示唆された。吉田遊子、神﨑良子 |
| | **14.「北九州市認知症支援・介護予防センターと本学部の連駅のもと、地域で行っている「尿もれ予防体験会」について」**<br>（地域連携センター教育・研究年報　創る 繋ぐ 育てる）創刊号, 令和 5（2023）年度）<br>(概要)北九州市からの委託を受けて 2015 年度から地域で行っている「尿もれ予防体験会」の概要と、2015 年～2022 年の実績について報告した。8 年間で 108 会場で開催し、参加者総数は 2,342 名であった。担当者は参加者の身体機能レベルやグループのニーズなどに応じて柔軟に対応しおり、介護予防事業に理学療法士が関わる意義を再認識した。吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子 |
| | **【学会発表】**<br>**1.　北九州市における高齢者尿失禁予防事業への関わり～理学療法士の立場から～**<br>吉田遊子、神﨑良子、中藤佳絵、橋元 隆、久保かおり、佐野志郎、西井久枝、松本哲朗<br>（第 28 回　日本老年泌尿器科学会，平成 27(2015)年 5 月）学会長賞受賞 |
| | **2.　北九州市における「女性のための尿失禁予防教室」参加者の高齢者実態調査について**<br>吉田遊子、神﨑良子、中藤佳絵、橋元 隆、久保かおり、佐野志郎、西井久枝、松本哲朗<br>（第 28 回　日本老年泌尿器科学会，平成 27(2015)年 5 月） |
| | **3.　北九州市における理学療法士による「尿もれ予防体験会」の課題～体験会実施後報告書より～**　吉田遊子、中藤佳絵、神﨑良子、橋元 隆、久保かおり、西井久枝、藤本直浩、松本哲朗<br>（第 30 回　日本老年泌尿器科学会，平成 29(2017)年 6 月） |
| | **4. 女子大学生の健康知識とヘルスリテラシーが生活習慣に及ぼす影響**<br>吉田遊子、戸ヶ里泰輔、横山由香里<br>（第 27 回　日本健康教育学会学術大会，平成 30(2018)年 7 月） |
| | **5. 地域在住高齢者における呼吸筋力に影響を与える要因**<br>井元 淳、神﨑 良子、廣滋恵一、四元孝道、吉田 遊子、中藤佳絵、烏山昌起、早川智之、橋元 隆<br>（九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡，令和 4(2022) 年 11 月） |
| | **6. 地域在住高齢者における 栄養状態と食品群別摂取状況との関連**<br>早川智之、井元 淳、神﨑良子、廣滋恵一、四元孝道、吉田遊子、中藤佳絵、烏山昌起、橋元 隆<br>（九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡，令和 4(2022)年 11 月） |
| | **【その他】**<br>**1. 「尿もれ予防相談会」（北九州市委託事業）講師**（年 1 回程度）<br>（平成 25（2013）年～現在、北九州市内市民センター等） |
| | **2. 「尿もれ予防体験会」（北九州市委託事業）講師**（年 5 回程度）<br>（平成 27（2015）年～現在、北九州市内公民館等） |
| | **3. 泌尿器科外来における女性尿失禁患者に対する理学療法指導～骨盤底筋と体幹筋の筋力が尿失禁症状に及ぼす影響～**（平成 27(2015)年 8 月～平成 29(2017)年 3 月，産業医科大学病院泌尿器科外来） |
| | **4. 第 6 回日本運動器理学療法学会学術大会　「ウィメンズヘルス理学療法の革新」におけるシンポジスト**平成 30(2018)年 12 月 16 日, 福岡国際会議場） |
| | **5. 第 29 回福岡県理学療法士会学会におけるシンポジウム座長**<br>テーマ「理学療法士の職域拡大に挑戦しよう！」（令和 2(2020)年 2 月 2 日、福岡国際会議場） |
| | **6. 市民向け健康体操ページ「尿もれ予防体操」執筆**<br>（公益社団法人福岡県理学療法士会広報誌「ぴしゃっと！No. 17」（2022 年 9 月号） |
| | **7. 市民向け健康体操ページ「尿もれ予防体操」執筆**<br>（公益社団法人福岡県理学療法士会広報誌「ぴしゃっと！No. 18」2023 年 2 月号） |

| | |
|---|---|
| 主な社会活動 | ・宗像市・福間町介護認定審査会委員　(平成13(2001)年4月～平成17(2005)年3月) |
| | ・北九州市介護認定審査会委員　(平成18(2006)年4月～平成22(2010)年3月) |
| | ・北九州市立年長者研修大学校研修会講師　(平成17年(2005)～現在に至る) |
| | ・北九州市による女性のための尿失禁予防事業　(平成19(2007)年～平成28(2016)年) |
| | ・尿もれ予防講座講師（北九州市委託事業）　(平成24(2012)年～現在に至る) |
| | ・尿もれ予防体験会講師（北九州市委託事業）　(平成27(2015)年～現在に至る) |
| | ・福岡県理学療法士会論文査読者　(平成29(2017)年6月～令和元(2019)年6月) |
| | ・第6回日本運動器理学療法学会学術大会講師　(平成30(2018)年12月) |
| | ・福岡県理学療法士会　生活環境支援理学療法演題査読　(令和元(2019)年6月～令和3(2021)年6月) |
| | ・福岡県理学療法士会　広報部部長　(令和元(2019)年6月～令和5(2023)年5月 |
| | ・第2回臨床実習指導者福岡県講習会講師（九州医療スポーツ専門学校）（令和元(2019)年8月) |
| | ・第7回日本運動器理学療法学会学術大会一般演題座長　(令和元(2019)年10月) |
| | ・第4回臨床実習指導者福岡県講習会世話人　(令和元(2019)年10月) |
| | ・第29回福岡県理学療法士学会　シンポジウム座長　(令和2(2020)年2月) |
| | ・「高齢者等住宅相談員」「すこやか住宅改造助成事業施工業者」研修会講師　(令和2（2020）年8月) |
| | ・北九州市障害支援区分認定審査会委員　(令和3(2021)年4月～現在に至る) |
| | ・臨床実習指導者福岡県講習会（北九州リハビリテーション学院）講師および世話人　(令和4(2022)年2月) |
| | ・第743回臨床実習指導者福岡県講習会（九州栄養福祉大学）講師および世話人　(令和4(2022)年6月) |
| | ・第743回臨床実習指導者福岡県講習会（九州栄養福祉大学）講師および世話人　(令和4(2022)年6月) |
| | ・第757回臨床実習指導者福岡県講習会（九州栄養福祉大学）講師および世話人　(令和4(2022)年6月) |
| | ・第773回臨床実習指導者福岡県講習会（九州栄養福祉大学）講師および世話人　(令和4(2022)年7月) |
| | ・日本ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法研究会　学術大会演題査読　(令和5(2023)年9月～現在) |
| | ・日本ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法研究会　評議員　(令和5(2023)年9月12日～現在) |
| | ・第8回日本ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法研究会　学術大会座長　(令和5（2023）11月) |
| | ・高齢者の運動指導研修会講師　テーマ：「尿もれ予防体操」　(令和6（2024）年1月) |
| | ・第11回日本ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法研究会学術大会　準備委員　(令和6年(2024)年5月～) |
| 所属学会 | 日本理学療法士協会　会員　(平成7(1995)年4月～現在に至る)<br>認定理学療法士（介護予防）（日本理学療法士協会）登録番号08-293　(平成20(2008)年9月～現在に至る)<br>専門理学療法士（生活環境支援理学療法士）（日本理学療法士協会）登録番号5-68　(平成21(2009)年12月～現在に至る)<br>日本老年泌尿器科学会　会員　(平成27(2015)年～現在に至る)<br>NPO法人　排泄ケアを考える会　幹事　(平成27(2015)年～現在に至る)<br>日本健康教育学会　会員　(平成29(2017)年～和4年3月) |
| 受賞歴 | 第28回日本老年泌尿器科学会学会長賞受賞　(平成27(2015)年5月)<br>福岡県理学療法士会　功労賞受賞　(令和6（2024）年4月) |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

神﨑（カンザキ） 良子（リョウコ） KANZAKI Ryoko 准教授

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部 理学療法学科〕<br>・理学療法ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ<br>・スタートアップ教育Ⅰ・Ⅱ<br>・理学療法評価学統合演習Ⅰ・Ⅱ<br>・内部疾患系理学療法Ⅱ<br>・理学療法総合演習Ⅰ・Ⅱ<br>・理学療法総合研究<br>・理学療法研究法演習<br>・先端医療と理学療法<br>・性差医療と理学療法<br>・臨床実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ |
| 専門分野 | ■ 循環器疾患の理学療法<br>■ ウィメンズヘルス理学療法<br>■ 3学会合同呼吸療法認定士<br>■ 心臓リハビリテーション指導士<br>■ 専門理学療法士（心血管、呼吸） |
| 最終学歴 | 九州保健福祉大学大学院(通信制) 博士後期課程 単位取得満期退学 |
| 学位 | 修士（保健科学） |
| 職歴 | ○社会保険小倉記念病院 (1997年4月～2007年3月)<br>専門学校 九州リハビリテーション大学校 講師 (2007年4月～2013年3月)<br>○運動療法学Ⅰ、疾患別理学療法学Ⅲ担当<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 講師 (2013年4月～2021年3月)<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 准教授 (2021年4月～現在に至る)<br>○理学療法評価学統合演習Ⅰ・Ⅱ、内部疾患理学療法Ⅱ担当 |
| 教育上の業績 | ○演習用動画の作成<br>教員間で患者役、理学療法士役を設定し、理学療法評価場面の動画を作成した。回復期病棟における脳血管疾患患者の設定で、入院時と3ヶ月後の評価風景を撮影、初期評価と最終評価の比較やプログラムの再考も考察できるよう工夫した。 |
| | ○学内実習向け教育動画の作成<br>臨床実習指導者の協力を得て、COPD患者に対する理学療法評価や治療介入の風景、指導者のコメントを入れた動画を作成、学内実習で活用した。また、教員間で患者役、理学療法士役となり会話の動画を作成し、会話の中から重要な情報を抜き出す問診の学習に活用した。 |
| | ○理学療法管理学 ((株)医歯薬出版) 2018<br>編著者代表：奈良勲<br>編著者：橋元隆，淺井仁，藤村昌彦<br>執筆者：神﨑良子，他36名<br>分担部分：10章-2 慢性期呼吸器疾患のマネジメント p156-160 |
| 主な研究活動 | 【著書】 |
| | 1. 理学療法管理学 ((株)医歯薬出版) 2018～2021<br>編著者代表：奈良勲<br>編著者：橋元隆，淺井仁，藤村昌彦<br>執筆者：神﨑良子，他36名<br>分担部分：10章-2 慢性期呼吸器疾患のマネジメント p156-160 |
| | （概要）呼吸器疾患は慢性化に伴い、酸素療法の導入や身体活動量の低下などにより日常生活活動が低下する。生活自立に対する支援と増悪予防のためのセルフケア、酸素療法の概要を中心にまとめた。 |
| | 【学術論文】 |
| | 1. 神﨑良子，松尾大樹，林 佑，中井恵美，松﨑英章，竹田裕亮，末松廣郎，津上 勝，木村美子，大峯三郎: |

「高齢透析患者に対する低負荷運動療法についての一考察」
（九州栄養福祉大学研究紀要 12, 19-26, 2015）

（概要）透析患者に対する低強度運動療法による効果を検証、ベースラインと 1 ヶ月後の比較で 30 秒椅子立ち上がりテストが有意に改善し、低強度負荷でも一定の効果があることを示した。

**2.** 神﨑良子, 木村美子, 吉田大輔, 四元孝道, 室井廣大, 石橋敏郎, 大丸　幸
「リハビリテーション学部における就職支援について　-学生に対する就職アンケートの分析から-」
（九州栄養福祉大学研究紀要 13, 195-205, 2016）

（概要）学生を対象とした就職支援に関するアンケート結果をもとに、2 年間の就職支援を検証した。1 年目のアンケート結果を次年度の就職支援に活かしたことで、学生の就職活動が早期から活発となり、就職支援に対する満足度も高まったことを報告した。

**3.** 神﨑良子, 井元　淳, 木村多寿子, 嶋田誠治, 佐藤祥代, 艫居祐輔, 曽我芳光, 安藤献児, 樋口博之:
「末梢動脈疾患患者に対する血管内治療後の在宅運動療法の効果」
（日本心臓リハビリテーション学会誌 24（3・4）, 226-231, 2018）

（概要）血管内治療を行った症例に対し、歩行練習群とレジスタンストレーニング付加群に分け、在宅での運動療法の効果を検証した。レジスタンストレーニングを付加した群のみ歩行距離や膝伸展筋力が有意に改善、在宅での運動指導には歩行練習だけでは不十分であることを示した。

**4.** 西井久枝, 吉田正貴, 吉田遊子, 中藤佳絵, 神﨑良子, 橋元隆, 上田真由美, 山下博志, 松本哲朗, 藤本直浩
「健康長寿を目指した高齢者排尿管理における多職種連携」
（西日本泌尿器科 80（5）208-218, 2018）

（概要）北九州市における尿もれ予防事業について草創期から多職種連携への発展、本事業の効果検証を経て、講座や体験会など新たな取り組みが成熟する過程を報告した。

**5.** 吉田遊子, 中藤佳絵, 神﨑良子
「尿漏れ予防体験会参加者の講座内容理解度と尿漏れ予防対策継続実施状況の検討
～介護予防事業における理学療法士の関わりから～」
（九州栄養福祉大学研究紀要 16, 25-36, 2019）

（概要）尿もれ予防体験会の参加者に対し、体験会後とその 3 ヶ月後にアンケート調査を実施した。3 ヶ月後も体操や生活上の工夫を実践しているのは 7 割で、継続できない理由として一人ではできない、改善しないことが挙がった。継続を支援が必要であることが示唆された。

**6.** 松﨑英章, 松尾大樹, 林佑, 津上勝, 川嶋恵美, 末松廣郎, 神﨑良子, 大峯三郎, 木村美子
「高齢入院患者に対する低強度運動の安全性と有効性」
（日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌 17（1）, 115-124, 2019）

（概要）高齢入院患者に対する低強度の運動負荷が運動機能や ADL の改善に寄与するか、移動手段で分けて検証した。車いす群において ADL の改善や運動機能の改善、歩行群においては運動機能の改善を認め、その有効性が示唆された。

**7.** 河上淳一，烏山昌起，神﨑良子，吉岡奈々，四元孝道，佐野幹剛，室井廣大，石橋敏郎
「遠隔授業に対するリメディアル教育・学修支援委員の取り組み」
（九州栄養福祉大学研究紀要 17, 1-7, 2020）

（概要）COVID-19 感染拡大により導入した、遠隔授業に対する学生アンケートを実施、課題を検証した。学生の集中力が続かないことや配布資料、チャットサーバーの問題が明らかとなった。

**8.** 吉田遊子，井元淳，中藤佳絵，神﨑良子，廣滋恵一，四元孝道，橋元隆
「地域在住高齢女性における尿失禁に影響を与える要因」
（九州栄養福祉大学研究紀要 19, 1-11, 2022）

（概要）地域在住高齢者を対象に、尿失禁の有無と骨格筋量、運動機能との関連を検討した。尿失禁群では BMI と SMI が有意に高値で、2 ステップ値は小さい傾向を認めた。

**9.** 神﨑良子，髙橋精一郎，樋口博之
「運動療法を実施する際のマスク装着の影響」
（健康支援 25（2）, 149-154, 2023）

（概要）マスクと室温が運動中の心拍数と自律神経活動、自覚的運動強度に及ぼす影響を比較した。マスク群の方が室温 24℃で心拍数が低値で、自覚的運動強度は高値であった。マスク装着に

よる自覚的運動強度の増大を防ぐには、室温を下げることが有効であることが示唆された。

10. 大場健一郎，川上慧，神﨑良子，松永崇史，池内智之，髙橋精一郎，津田徹
**「β1 遮断薬を内服した慢性閉塞性肺疾患患者の運動耐容能と呼吸循環応答について」**
（日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 31（3）, 311-316, 2023）

（概要）COPD 患者を対象に、β1 遮断薬投与開始前後の運動耐容能などを比較した。β1 遮断薬内服後に運動持続時間、労作時息切れ、運動時の最高脈拍が有意に改善、β1 遮断薬は頻拍の安定期 COPD 患者に対し運動耐容能や自覚症状の改善が期待できることを明らかにした。

11. 吉田遊子，神﨑良子
**「記念館での「北九州市立年長者研修大学校」研修会実績報告～参加者および学生アンケートからみた研修会の意義～」**
（日本リハビリテーション発祥地記念館 九州リハビリテーション大学校記念館　記念館誌第 4 号（令和 4 年度版）, 2023）

（概要）北九州市立年長者研修大学校の受講生を対象に、本学の体力測定会参加者・学生アンケートの結果について報告した。7 年間で 19 回の研修会を開催し、参加者総数は 635 名であった。参加者は「学生との交流」に大変満足していた。学生は「測定時の説明」「リスク管理」が不十分、「今回の経験を今後の実習で活かせそう」と回答しており、学生の教育効果が示唆された。

12. 吉田遊子，中藤佳絵，神﨑良子
**「北九州市認知症支援・介護予防センターと本学部の連駅のもと、地域で行っている「尿もれ予防体験会」について」**
（地域連携センター教育・研究年報　創る 繋ぐ 育てる　創刊号，2023）

（概要）北九州市委託事業「尿もれ予防体験会」の概要と、2015 年～2022 年の実績について報告した。8 年間、108 会場で開催し、参加者総数は 2,342 名であった。担当者は参加者の身体機能レベルやグループのニーズなどに応じて柔軟に対応しており、介護予防事業に理学療法士が関わる意義を再認識した。

【学会発表】

1. 松﨑英章，中井恵美，神﨑良子，津上　勝
**「入院高齢人工透析患者に対する低強度運動負荷の経験」**
〈主　　催〉日本腎臓リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉東京
〈開催年月日〉2015 年 3 月 21 日、22 日

（概要）入院中の 75 歳以上の人工透析患者を対象に、安静時心拍数の 30%の運動負荷で理学療法を実施した効果を検証した。1 か月の介入により上肢の FIM と握力が改善した。有害事象はなく、低負荷でも安全かつ効果的に運動療法を提供できる可能性が示唆された。

2. 中井恵美，松﨑英章，神﨑良子，津上　勝
**「入院高齢人工透析患者に対する低強度運動負荷の経験-栄養状態に着目して-」**
〈主　　催〉日本腎臓リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉東京
〈開催年月日〉2015 年 3 月 21 日、22 日

（概要）入院中の人工透析患者を対象に・安静時心拍数の 30%負荷で理学療法を実施した効果を検証した。生化学検査のアルブミン値 2.8g/ml を基準に正常群と低栄養群に分け握力や ADL 評価の結果を分析した。アルブミン値の違いで結果に相違はなかったが・シャントからの出血によりヘモグロビン値の急激な低下を来した症例のみ・その後の身体指標に低下を認めた。

3. 神﨑良子，吉田遊子，中藤佳絵，橋元　隆，佐野志郎，久保かおり，西井久枝，松本哲朗
**「北九州市における「女性のための尿失禁予防教室」参加者の高齢者実態調査について」**
〈主　　催〉日本老年泌尿器科学会
〈開 催 場 所〉浜松
〈開催年月日〉2015 年 5 月 8 日、9 日

（概要）北九州市における尿失禁予防教室について、介護予防に寄与しているかを検証するためこれまで教室に参加し 1 年以上経過した者を対象に実施したアンケート調査の結果を報告した。教室参加による尿もれの効果を 75%が実感しており、要支援・要介護認定率は 6.2%と全国平均を下回るなど一定の効果があったと結論付けた。

4. 吉田遊子, 神﨑良子, 中藤佳絵, 橋元　隆, 佐野志郎, 久保かおり, 西井久枝, 松本哲朗
「北九州市における高齢者尿失禁予防事業への関わり-理学療法士の立場から-」
〈主　　催〉日本老年泌尿器科学会
〈開 催 場 所〉浜松
〈開催年月日〉2015 年 5 月 8 日、9 日

（概要）尿失禁予防教室が参加者の QOL や尿失禁の改善に寄与するかを検証し、尿もれ回数の有意な減少や QOL の有意な改善を認めたことを報告した。本学会の優秀演題賞に選ばれた。

5. 神﨑良子, 井元　淳, 木村多寿子, 嶋田誠治, 佐藤祥代, 艫居祐輔, 曽我芳光, 安藤献児, 樋口博之
「末梢動脈疾患患者に対する血管内治療後の在宅運動療法の効果」
〈主　　催〉日本心臓リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉岐阜
〈開催年月日〉2017 年 7 月 15 日、16 日

（概要）血管内治療後の在宅運動療法の効果を検証した。治療ガイドラインでは歩行を中心とした運動ガス使用されているが、本研究の結果、歩行だけでは 6 分間歩行距離や筋力の改善は図れずレジスタンストレーニングを付加することが有用であることを報告した。

6. 川村良太, 神﨑良子, 手嶋祐佳, 田中愛子, 冬野喜郎, 古賀義則, 瀬川　潤, 岡崎昌博
「地域包括ケア病床に転棟する当院心不全患者の特徴」
〈主　　催〉日本心臓リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉岐阜
〈開催年月日〉2017 年 7 月 15 日、16 日

（概要）自宅退院した心不全患者と地域包括ケア病棟へ転棟した心不全患者を比較した。入院時の ADL は地域包括ケア病棟群の方が高く、入院中の病態の変化や年齢等が自宅退院となるか否かに影響している可能性があることを報告した。

7. 神﨑良子, 木村多寿子, 嶋田誠治, 佐藤祥代, 甲斐辰徳, 曽我芳光, 安藤献児
「心臓再同期療法後の運動耐容能の変化と遠隔期における運動習慣との関連」
〈主　　催〉日本心臓リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉横浜
〈開催年月日〉2018 年 7 月 14 日、15 日

（概要）心臓再同期療法治療前から治療後 3 年間にわたり運動耐容能を追跡調査した結果を報告した。治療後も何らかの運動・活動を継続している者は運動耐容能が高く、治療後も運動療法を継続する必要性が示唆された。

8. 神﨑良子, 中藤佳絵, 吉田遊子, 橋元　隆, 久保かおり, 宮永敬市, 西井久枝, 松本哲朗
「北九州市における尿もれ予防教室の効果」
〈主　　催〉日本予防理学療法学会
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2018 年 10 月 20 日、21 日

（概要）尿もれ予防教室について、予防・改善効果を検証した。333 例を対象に解析し BMI や腹囲、尿もれ量、回数、QOL が有意に改善、蓄尿機能も改善を認めた。予防や改善に一定の効果があったことを報告した。

9. 大場健一郎・神﨑良子・津田徹, 他
「高頻拍の COPD 患者に対する $\beta_1$ 遮断薬が身体機能へ及ぼす影響」
〈主　　催〉日本呼吸ケア・リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉名古屋
〈開催年月日〉2019 年 11 月 11 日、12 日

（概要）$\beta$1 遮断薬を処方された COPD 患者を対象に、投与開始前と投与開始から 1 ヶ月後の運動耐容能などを比較した。$\beta$1 遮断薬内服後に運動持続時間、労作時息切れ、運動時の最高脈拍が有意に改善したことを明らかにした。

10. 神﨑良子, 髙橋精一郎, 樋口博之
「運動療法を実施する際のマスク装着の影響」
〈主　　催〉日本運動療法学会

| | |
|---|---|
| | 〈開 催 場 所〉web<br>〈開催年月日〉2022 年 7 月 2 日 |
| | （概要）マスク装着下で AT 強度の運動を行った際の心拍数、自覚的運動強度、自律神経活動の変化を、室温 20℃と 24℃で比較した。室温 24℃で非マスク群と比較してマスク群で自覚的運動強度は増加、心拍数は減少することを報告した。 |
| | **11.** 井元淳，神﨑良子，廣滋恵一，四元孝道，吉田遊子，中藤佳絵，烏山昌起，早川智之，橋元隆<br>**「地域在住高齢者における呼吸筋力に影響を与える要因」**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会九州ブロック会<br>〈開 催 場 所〉北九州市<br>〈開催年月日〉2022 年 11 月 26 日、27 日 |
| | （概要）地域在住高齢者における呼吸筋力に影響を与える要因を検討した。高齢女性において低強度身体活動量が呼吸筋力と関連する可能性があることが推測された。 |
| | **12.** 早川智之，井元淳，神﨑良子，廣滋恵一，四元孝道，吉田遊子，中藤佳絵，烏山昌起，橋元隆<br>**「地域在住高齢者における栄養状態と食品群別摂取状況との関連」**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会九州ブロック会<br>〈開 催 場 所〉北九州市<br>〈開催年月日〉2022 年 11 月 26 日、27 日 |
| | （概要）地域高齢者での栄養状態と食品群別摂取状況との関連を検討した。高齢者では食品群別の摂取状況の違いにより栄養状態の特異的な特徴と関連することが示唆された。 |
| 主な社会活動 | ・北九州市女性のための尿失禁予防教室　（2007 年 4 月～2015 年 3 月）<br>・北九州市立年長者研修大学校講師　（2007 年～現在に至る）<br>・北九州市介護認定審査会審査委員　（2010 年 2 月～2023 年 3 月）<br>・メディックスクラブ小倉支部運営委員　（2011 年 3 月～2023 年 3 月）<br>・尿もれ予防相談会　講師（北九州市委託事業）　（2012 年 4 月～現在に至る）<br>・介護サービス従事者向け高齢者排泄ケア講習会　（2014 年 11 月）<br>「下部尿路障害とその対処法」講師<br>・尿もれ予防体験会　講師（北九州市委託事業）　（2015 年～現在に至る）<br>・第 22 回日本心臓リハビリテーション学会「患者さんの声を聞こう part2」講師　（2016 年 7 月）<br>・第 100 回福岡県理学療法士会学術研修大会　座長　（2017 年 6 月）<br>・北部福岡 NST 研究会世話人　（2018 年 4 月～現在に至る）<br>・日本理学療法士協会診療ガイドライン<br>（心血管理学療法）システマティックレビュー班員　（2018 年 4 月～2021 年 3 月）<br>・九州理学療法士学術大会 2019 座長（口述）　（2019 年 10 月）<br>・介護認定調査員向け研修会　講師　（2019 年 10 月）<br>・第 29 回福岡県理学療法士学会シンポジウム講師　（2020 年 2 月）<br>・ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法部門ガイドライン翻訳事業（分担：pp1507-1512）　（2020 年 8 月～11 月）<br>・第 9 回日本運動器理学療法学術大会シンポジウム 2「骨盤底理学療法の標準化（臨床・研究・地域の側面から）」講師　（2021 年 9 月）<br>・日本ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法研究会選挙管理委員長　（2021 年 11 月～現在に至る）<br>・九州理学療法士学術大会 2022 座長（口述）　（2022 年 11 月） |
| | ・臨床指導者福岡県講習会世話人　（2022 年 2 月，6 月，7 月，8 月）（2023 年 9 月） |
| | ・地域ケア個別会議アドバイザー　（2023 年 8 月～現在に至る）<br>・北九州市障害支援区分認定審査会審査委員　（2023 年 8 月～現在に至る） |
| 所 属 学 会 | 日本理学療法士協会会員　（1997 年～現在に至る）<br>日本心臓リハビリテーション学会会員　（2001 年～現在に至る）<br>日本心血管インターベーション学会会員　（2001 年～現在に至る）<br>日本呼吸療法医学会会員　（2004 年～現在に至る） |

| | | |
|---|---|---|
| | NPO 法人　ジャパンハートクラブ活動会員 | (2005 年～現在に至る) |
| | NPO 法人　日本コンチネンス協会会員 | (2013 年～現在に至る) |
| | 日本腎臓リハビリテーション学会会員 | (2014 年～現在に至る) |
| | 排泄ケアを考える会会員 | (2015 年～現在に至る) |
| | 日本運動療法学会会員 | (2022 年～現在に至る) |
| | 日本健康支援学会会員 | (2023 年～現在に至る) |
| 受　賞　歴 | 北九州市功労賞 | (2022 年 2 月) |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

時任（トキトウ） 真幸（マサキ）　TOKITOH Masaki　講師

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ<br>・先端医療と理学療法<br>・骨・関節疾患系理学療法Ⅱ<br>・運動療法学演習<br>・スポーツ系理学療法<br>・パラスポーツ<br>・スタートアップ教育Ⅰ、スタートアップ教育Ⅱ<br>・理学療法総合演習Ⅰ、理学療法総合演習Ⅱ<br>・臨床実習Ⅰ、臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ、臨床実習Ⅴ<br>〔リハビリテーション学部　作業療法学科〕<br>・パラスポーツ |
| 専門分野 | ■スポーツ系理学療法学<br>■骨関節疾患理学療法学<br>■パラスポーツ分野<br>（資格）<br>公益財団法人日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー<br>公益財団法人日本パラスポーツ協会公認中級パラスポーツ指導員 |
| 最終学歴 | 放送大学　教養学部心理と教育コース　卒業 |
| 学位 | 学士（教養） |
| 職歴 | 熊本整形外科病院（現社会医療法人令和会 熊本整形外科病院）（1998年4月～2003年3月）<br>学校法人神村学園 神村学園医療福祉専門学校　教務（2003年4月～2011年3月）<br>〇運動学、臨床運動学、日常生活活動　担当<br>学校法人神村学園 神村学園専修学校　教務主任（2011年4月～2013年3月）<br>〇臨床運動学、臨床医学英語、疾患別理学療法Ⅴ　担当<br>学校法人神村学園 神村学園専修学校　学科長（2013年4月～2015年3月）<br>〇臨床運動学、解剖学、生理学　担当<br>学校法人神村学園 神村学園専修学校　教頭（2015年4月～2019年3月）<br>〇臨床運動学　担当<br>学校法人神村学園 神村学園専修学校　教務主任（2019年4月～2022年3月）<br>〇臨床運動学Ⅰ・Ⅱ、疾患別理学療法Ⅲ・Ⅳ　担当<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 講師（2022年4月～現在に至る）<br>〇スポーツ系理学療法、パラスポーツ等　担当 |
| 教育上の業績 | 〇学生の主体的な学びを促進するための取り組み<br>担当科目において目標提示→予習→レクチャー→グループによるアクティブ・ラーニング→到達度確認をおこない、個人学習から共同学習への展開実施 |
| | 〇MicrosoftTeamsによるタブレット活用教育について<br>MicrosoftTeams を利用し、クラス・教科管理、ファイル共有、授業動画等の作成・共有・MicrosoftForms を用いたテスト、アンケートの実施・回収等を実施 |
| | 〇授業外でのパラスポーツ教育活動<br>車いすバスケットボール国際大会への観戦（観戦前のルールや実技実践も含む） |
| | 〇理学療法士教育における準備教育モデル・コア・カリキュラムの作成メンバーとして |
| | 基本理念および理学療法学の基礎としての化学・生物・物理を担当し作成した |
| 主な研究活動 | 【著書】 |
| | 1. 『理学療法アクティブ・ラーニング・テキスト骨関節障害系理学療法学』（共著）文光堂<br>編集：対馬栄輝（学術編集）、有馬慶美（教育編集）編集協力：加藤研太郎<br>著者：対馬栄輝、笹川健吾、米ヶ田宜久、石田水里、小宮山与一、有馬慶美、阿南雅也、中俣修、鈴木克彦、加藤研太郎、葉清規、三浦信明、根地嶋誠、時任真幸、乙戸崇寛、池田耕治、櫻井好美、川人裕也、髙 |

| | |
|---|---|
| | 橋純平、鈴木裕治、海津貴裕、土田和可子、長谷川諒、新岡大和、佐々木広人　2020年2月<br>（概要）分担執筆は第8章スポーツ傷害（外傷・障害）：下肢を担当 |

| | |
|---|---|
| | 【学会発表】<br>**1. 時任真幸： 臨床実習が特性的自己効力感の変容に及ぼす影響**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会<br>〈開 催 場 所〉パシフィコ横浜（神奈川県）<br>〈開催年月日〉2014年5月30日～6月1日<br>（概要）第49回理学療法学術大会にて臨床実習における学生の特性的自己効力感の変化とその要因を発表した。 |
| | **2. 時任真幸：「臨床実習に対する到達目標の設定の仕方が特性的自己効力感や自尊感情におよぼす影響」**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会<br>〈開 催 場 所〉東京国際フォーラム（東京都）<br>〈開催年月日〉2015年6月5日～6月7日<br>（概要）第50回理学療法学術大会にて臨床実習における到達目標を半構造型インタビューにて設定し、このことが自尊感情や特性的自己効力感にどう影響を与えるかを発表した。 |
| | **3. 河上淳一，時任真幸，烏山 昌起：AIと筋骨格シミュレーションモデルを用いた動作分析：新しい学校教育の形（共同演者）**<br>〈主　　催〉日本理学療法士協会 九州ブロック会<br>〈開 催 場 所〉市民会館シアーズホーム夢ホール（熊本市民会館）<br>〈開催年月日〉2023年11月25日(土)・26日(日)<br>（概要）スマートフォン撮影による動作の動画をWeb サービスの Plask に取り込むことで、2次元データから3 次元データに構築（BVH ファイル形式）し、運動学的データを生成。その後、筋骨格シュミレーションモデルソフトに取り込み、逆動力学解析にて運動力学的データを推定する。<br>このことにより、運動力学データが作成される。学生の考える力を引き出し、動作の専門家になるための学生教育の一助になることを目的とした報告である。 |
| | **4. 時任 真幸, 川原 靖弘鈴木 雄太：筋電計と床反力計を用いた足関節背屈可動域の違いによる片脚立ち上がりテストの差異の検討**<br>〈主　　催〉電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーショングループ<br>〈開 催 場 所〉北九州コンベンション協会　AIM3F<br>〈開催年月日〉2023年12月11日(月)～2023年12月13日(水)<br>（概要）足関節背屈可動域制限群と制限なし群に分け、片脚立ち上がりテストについて、筋電計と床反力を分析することにより運動学および運動力学的に分析することを目的とした報告である。 |
| 主な社会活動 | ・ソニーセミコンダクタマニュファクチュアリング女子ハンドボールチームトレーナー　（2006年3月～2016年3月）<br>・鹿児島県成年女子ハンドボール（国体チーム）トレーナー　（2006年、2008年、2009年、2012年、2013年、2014年、2015年）<br>・公益財団法人日本ハンドボール協会トレーナー部会 九州代表委員　（2015年1月～ 2019年3月）<br>・公益財団法人鹿児島県スポーツ協会 スポーツ指導者協議会常任委員　（2015年4月～2021年5）<br>・鹿児島県少年男子ハンドボール（国体チーム）トレーナー　（2018年7月～現在に至る）<br>・JOC ジュニアオリンピックカップ鹿児島県選抜チームトレーナー　（2018年12月、2021年12月、2022年12月）<br>・公益財団法人鹿児島県スポーツ協会 アスレティックトレーナー協議会理事　（2019年5月～現在に至る）<br>・公益財団法人鹿児島県スポーツ協会鹿児島県アスレティックトレーナー協議会研修会講師　（2021年6月） |

| | |
|---|---|
| | ・地域スポーツ人材の活用実践支援事業 (2022 年 1 月)<br>・地域スポーツ人材の活用実践支援事業 (2022 年 1 月)<br>・地域スポーツ人材の活用実践支援事業 (2022 年 1 月)<br>・周望学舎シニアカレッジ講師 (2022 年 9 月)<br>・地域在住高齢者に対する多面的健康づくり教室講 (2022 年 10 月)<br>・日本理学療法教育学会コアカリキュラム委員 (2021 年 11 月～2023 年 6 月) |
| 所 属 学 会 | 公益財団法人日本ハンドボール協会トレーナー部会 (2013 年 1 月～現在に至る)<br>公益財団法人鹿児島県スポーツ協会アスレティックトレーナー協議会 (2019 年 5 月～現在に至る)<br>一般社団法人日本理学療法教育学会 (2021 年 4 月～現在に至る) |
| 受 賞 歴 | なし |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

鈴木 雄太（すずき ゆうた）　SUZUKI Yuta　助教

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部 理学療法学科〕<br>・スタートアップ教育Ⅰ・Ⅱ<br>・理学療法ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ<br>・中枢神経疾患理学療法Ⅰ<br>・骨・関節疾患理学療法Ⅰ<br>・動作分析演習Ⅱ<br>・理学療法評価学統合演習Ⅱ<br>・先端医療と理学療法<br>・理学療法総合演習Ⅰ・Ⅱ<br>・理学療法総合研究<br>・臨床実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ |
| 専門分野 | ■ 中枢神経系理学療法学<br>■ スポーツ理学療法学<br>■ ロボットリハビリテーション<br>■ 健康増進・Well-being<br>【資格】<br>理学療法士<br>日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー<br>理学療法士作業療法士 専任教養成講習会 修了 |
| 最終学歴 | 広島大学大学院 博士課程後期　医歯薬保健学研究科 保健学専攻　修了 |
| 学位 | 博士（保健学）／修士（保健学）／保健学学士 |
| 職歴 | 医療法人エム・エム会 マッターホルンリハビリテーション病院　(2015年4月～2021年3月)<br>リハビリテーション部<br>医療法人エム・エム会 マッターホルンリハビリテーション病院　(2021年4月～2022年3月)<br>リハビリテーション部　主任<br>九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 助教　(2022年4月～現在に至る) |
| 教育上の業績 | ・理学療法士養成校の臨床実習生指導<br>・日本理学療法士協会 理学療法ガイドライン・用語策定委員会<br>ACL システマティックレビュー班 副班長 |
| 主な研究活動 | 【総説】<br>**1. テーピングー基本的な考え方とスポーツ現場における活用－：水泳競技におけるテーピングの実際**<br>三富陽輔、鈴木雄太、松浦由生子<br>臨床スポーツ医学、36(9)、1012-1016、2019年9月、文光堂<br>(概要)<br>水泳競技でテーピングを使用する際には、水中という競技特性を考慮した対応が求められる。複数の具体的な事例を交え、テーピング使用時の注意点および工夫について解説した。<br>**2. 大腿骨近位部骨折と転倒**<br>森川将徳、浦辺幸夫、鈴木雄太、前田慶明<br>臨床雑誌整形外科、72(6)、700-703、2021年5月、南江堂<br>(概要)<br>転倒と大腿骨近位部骨折の受傷について解説した。近年（2016～2020年）の文献から得られた知見を主に調査し、いつ、どこで、どのような患者が、どのように転倒して大腿骨近位部骨折を受傷するのかをまとめた。<br>**3. 高齢者に対するバランスエクササイズの効果**<br>鈴木雄太<br>Monthly Book Medical Rehabilitation、280、125-130、2022年10月、全日本病院出版会<br>(概要)<br>バランスという用語の文脈における捉え方の違いについて整理し、バランス能力の加齢に伴う変化、バランス能力 |

のシステム理論モデルに基づいた評価および介入、そして転倒予防に対する運動介入の効果について最新の知見をまとめた。

【学術論文】

**1. 競泳ストリームライン姿勢での上肢挙上角度と脊柱アライメントの関係－大学競泳選手と一般大学生での比較－（筆頭）**

鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、笹代純平、森田美穂

理学療法科学、31(2)、209-212、2016 年 4 月

（概要）

競泳競技の基本姿勢であるストリームライン姿勢（けのび姿勢）の上肢挙上角度と脊柱アライメントを競泳経験者と未経験者で比較した。競泳経験者ではストリームライン姿勢で上肢挙上角度が大きく、胸椎の後弯角度、腰椎の前弯角度、骨盤の前傾角度が小さいことで、より直線的なストリームライン姿勢を保持ししていることを示した。

**2. 広島県ジュニア競泳選手の肩関節障害と柔軟性の関連（筆頭）**

鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、森田美穂、永田和久

水と健康医学研究会誌、19(1)、39-44、2016 年 10 月

（概要）

広島県のジュニア競泳選手 86 名を対象とした横断研究を行い、肩関節障害が最も発生頻度の高い障害であることを示した。また、第 2 肢位での肩関節内旋可動域の低下が肩関節障害に関連する因子であることを示した。

**3. 陸上空間で模倣したクロール泳の体幹回旋加速度と水中競技パフォーマンスの関係（筆頭）**

鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、白川泰山

Journal of Athletic Rehabilitation、14(1)、3-8、2018 年 3 月

（概要）

陸上空間で模倣したクロール泳のストローク動作実施中の体幹回旋運動を、加速度計により定量的に評価することを試みた。得られた加速度波形に対して周波数解析を行い、得られた指標と水中での競技パフォーマンスが相関することを示した。

**4. 「踵挙げテスト」による足関節捻挫経験者の不安定性の特徴（共著）**

尾上仁志、浦辺幸夫、鈴木雄太、白川泰山

広島スポーツ医学研究会誌、19(1)、37-39、2018 年 7 月

（概要）

足関節の機能的および構造的な不安定性を検出するため、つま先立ちで片脚立位を保持する「踵上げテスト」を考案し、その有用性を検証した。足関節外反捻挫既往者では「踵上げテスト」の時間が短く、足関節不安定性を評価する有効な検査法である可能性を示唆した。

**5. 高齢者に対するバランスエクササイズの即時的効果（筆頭）**

鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、白川泰山

運動器リハビリテーション、29(3)、325-329、2018 年 10 月

（概要）

高齢者に対する効果的なバランスエクササイズを実施するために、株式会社 MIKASA との共同研究としてバランスボードを試作し、その効果を確認した。5 分間のバランスエクササイズの実施後に片脚立位時間および重心動揺が対照群と比較して有意に改善し、開発したバランスボードが高齢者にとって有用なツールであることを示した。

**6. 大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に必要な身体機能は居住地によって異なるか（共著）**

村上弘晃、浦辺幸夫、鈴木雄太、尾上仁志、大岡恒雄、白川泰山

理学療法の臨床と研究、28(1)、47-50、2019 年 3 月

（概要）

大腿骨近位部骨折の受傷時の居住地の地理的特徴が、回復期リハビリテーション病棟からの自宅退院に影響するかを診療録より後方視的に調査した。広島県呉市の特徴的な地形である傾斜地への自宅退院には高い歩行能力が求められ、介助者がいることで傾斜地への自宅退院が有利になる可能性を示した。

**7. 倉橋島に居住する大腿骨近位部骨折術後患者の退院先に関係する因子（共著）**

石橋直樹、浦辺幸夫、鈴木雄太、尾上仁志、大岡恒雄、白川泰山

理学療法の臨床と研究、28(1)、73-76、2019 年 3 月

（概要）

診療録を用いた後方視的な調査から、大腿骨近位部骨折術後患者が島嶼部に所在する自宅へ退院する場合には、術前の歩行能力を維持し、自立した ADL を獲得することが重要な要因であることを示した。

**8. 足関節捻挫の治療の現状と課題（共著）**
浦辺幸夫、鈴木雄太、小宮 諒、酒井章吾、笹代純平、前田慶明
Journal of Athletic Rehabilitation、15(1)、27-34、2019 年 3 月

（概要）
医療機関やスポーツ現場での足関節捻挫の治療に関する現状のアンケート調査を実施した。回答の得られた 316 名の理学療法士やアスレティックトレーナーのうち、約半数が日常業務で足関節捻挫の治療を行っていた。足関節捻挫の治療に対する問題点は、選手や指導者から足関節捻挫が軽視されていること、治療者の知識や技術の不足、医師からの処方が少ないことなどがあげられた。

**9. 大学競泳選手における Upper Quarter Y Balance Test と身体機能の関係（筆頭）**
鈴木雄太、浦辺幸夫、事柴壮武、穴見圭汰朗、笹代純平、前田慶明
水と健康医学研究会誌、21(1)、41-47、2019 年 4 月

（概要）
大学競泳選手を対象に、Upper Quarter Y Balance Test のスコアと肩関節や体幹の柔軟性および肩甲帯周囲筋力の関連を調査した。競技力の高い競泳選手では Upper Quarter Y Balance Test のスコアが高かった。また、競技レベルの違いにより Upper Quarter Y Balance Test の成績と関連する身体機能が異なることを示した。

**10. 成長期の日本人女子バレエダンサーにおける傷害発生と年齢・練習時間の関係（共著）**
鍔木悠里奈、浦辺幸夫、藤井絵里、酒井章吾、橋本留緒、笹代純平、前田慶明、鈴木雄太
ダンス医科学研究、2(1)、25-29、2019 年 7 月

（概要）
9 歳から 18 歳のバレエダンサーを対象に傷害調査を行った。年齢や練習時間の増加にともない傷害発生率が上昇し、全ての年代で足関節の傷害発生率が最も高いことを示した。

**11. 広島県ジュニア競泳選手の障害既往と身体的特徴（筆頭）**
鈴木雄太、浦辺幸夫、金田和輝、前田慶明、笹代純平、白川泰山
理学療法の臨床と研究、29(1)、29-35、2020 年 3 月

（概要）
中学から高校生のジュニア競泳選手 132 名を対象とし、横断的に傷害調査および柔軟性の測定を実施した。その結果、半数以上が競技に関連した障害既往を有し、男女ともに肩関節障害が最も多いことを示した。また、柔軟性は女子で高く、男女とも高学年になるにしたがい筋の柔軟性は低下するが、関節弛緩性は増加することを示した。

**12. 高齢者の階段昇降に貢献する身体機能は何か（共著）**
坂本麻美、浦辺幸夫、大岡恒雄、鈴木雄太、白川泰山
理学療法の臨床と研究、29(1)、77-81、2020 年 3 月

（概要）
高齢者の階段昇降能力に関連する要因を横断的に調査し、階段昇降能力は歩行速度、歩行耐久性および下肢筋力と中等度以上の相関関係があった一方で、年齢との相関関係が低いことを示した。

**13. 体幹前屈動作時の脊柱運動とハムストリングの柔軟性の関連性（共著）**
岡田泰河、浦辺幸夫、鈴木雄太、吉田康兵、白川泰山
理学療法の臨床と研究、29(1)、71-75、2020 年 3 月

（概要）
健常成人を対象に、体幹前屈動作中の脊柱アライメントの変化とハムストリングの柔軟性の関連を検討した。ハムストリングの柔軟性が低い者ほど、体幹前屈動作の初期で骨盤の前傾が小さく、代償的に腰椎の屈曲が大きくなることを示した。

**14. 大学男子サッカー選手における足関節捻挫受傷後の受療行動に関する調査（共著）**
田城翼、浦辺幸夫、鈴木雄太、酒井章吾、小宮 諒、笹代純平、前田慶明
理学療法の臨床と研究、29(1)、83-87、2020 年 3 月

（概要）
大学サッカー選手において、足関節捻挫後に受診する者が約半数にとどまっている現状を示し、受診しなかったものの多くは、「治療しなくても治ると思った」と回答するなど、足関節捻挫後の治療の重要性が選手間で十分に認識されていない可能性があることを示唆した。

**15. 世代別でのバランス能力の違い（共著）**
浦辺幸夫、福井一輝、笹代純平、前田慶明、鈴木雄太、白川泰山
日本アスレティックトレーニング学会誌、5(2)、133-139、2020 年 4 月

（概要）
10 代から 80 代までの 541 名のバランス能力を調査し、10 代の約半数で閉眼片脚立位時間が 30 秒以下であったこと、30 代のバランス能力が最も優れていたこと、40 代以降では閉眼片脚立位時間が徐々に短縮する傾向を示すことなどを示した。

**16. 85 歳未満と 85 歳以上の高齢者に生じた大腿骨近位部骨折受傷時の転倒方向の違い（共著）**
森川将徳、浦辺幸夫、鈴木雄太、前田慶明、笹代純平、白川泰山
運動器リハビリテーション、31(1)、35-39、2020 年 6 月

（概要）
回復期リハビリテーション病棟の診療録を用いた後方視的な調査により 79 名の高齢者の大腿骨近位部骨折受傷時の転倒方向を調査した。85 歳未満では側方転倒での受傷が多く、85 歳以上では後方転倒での受傷が多いことを示した。

**17. COVID-19 流行下における高校生ハンドボール選手へのトレーナーサポート**
平戸大悟、北川勝也、濵田蒼樹、鈴木雄太、白川泰山、浦辺幸夫
広島スポーツ医学研究会誌第 22 巻 1 号 p.17-20

（概要）
新型コロナウイルスの感染拡大により、直接的な対応が制限されたなかで、選手のコンディショニングの維持や傷害予防のために取り組んだセルフチェックの仕組みづくりや講義動画の配信の取り組みについて報告した。

**18. Physical Activity Changes and Its Risk Factors among Community-Dwelling Japanese Older Adults during the COVID-19 Epidemic: Associations with Subjective Well-Being and Health-Related Quality of Life（筆頭）**
（COVID-19 流行時の地域在住日本人高齢者における身体活動の変化とそのリスク因子：主観的幸福感および健康関連 QOL との関連）
SUZUKI Yuta, MAEDA Noriaki, HIRADO Daigo, SHIRAKAWA Taizan, URABE Yukio
International Journal of Environmental Research and Public Health, 17(18), 6591, 2020 年 9 月

（概要）
COVID-19 の感染拡大に伴う高齢者の身体活動量、主観的幸福度、健康関連 QOL の変化を調査した。有効回答 165 名のうち、47%の対象で COVID-19 流行前と比較して身体活動量が減少し、主観的幸福感が低下していた。緊急事態宣言の発令前に中等度以上の強度の運動・スポーツ活動量が多いこと、健康関連 QOL が低いことが身体活動量の低下のリスク因子として示された。

**19. 両上肢による投動作中の体幹伸展可動域と最大テイクバック動作時の胸椎，腰椎の弯曲角度および遠投距離の関係（共著）**
福井一輝、浦辺幸夫、笹代純平、鈴木雄太、前田慶明
運動器リハビリテーション、31(2)、140-146、2020 年 10 月

（概要）
メディシンボールを前方に投擲する際の体幹伸展可動域と脊柱の弯曲角度との関係を調査した。投擲距離が大きい対象ほど、投擲動作開始時からテイクバックにかけて胸椎の伸展方向への変化量が大きく、投動作において体幹の伸展可動域と胸椎の伸展可動域が関係していることを示した。

**20. Functional Predictors for Home Discharge after Hip Fracture in Patients Living in Sloped Neighborhoods or Islands: An 8-Year Retrospective Cohort Study（筆頭）**
（傾斜地や島嶼地域に住む股関節骨折後患者の自宅退院に関連する機能的予測因子：8 年間の後ろ向きコホート研究）
SUZUKI Yuta, MAEDA Noriaki, ISHIBASHI Naoki, MURAKAMI Hiroaki, MORIKAWA Masanori, SASADAI Junpei, SHIRAKAWA Taizan, URABE Yukio
Geriatrics, 5(4), 93, 2020 年 11 月

（概要）
回復期リハビリテーション病棟に入院した大腿骨近位部骨折術後患者 437 名のカルテを後方視的に調査し、受傷時傾斜地や島嶼地域に住む患者の自宅退院に関連する予測因子とそのカットオフ値を求めた。傾斜地居住者では Functional Independence Measure の運動項目（69 点）、6 分間歩行距離（150m）と改定長谷川式簡易知能評価スケール（18 点）が自宅退院の予測因子としてあげられ、自宅周囲の地形によって自宅退院に求められる身体機能が異なることを示した。

**21. Association between falling direction and age in older patients with hip fractures（共著）**

（高齢の股関節骨折患者における転倒方向と年齢の関連）

MORIKAWA Masanori, URABE Yukio, MAEDA Noriaki, SUZUKI Yuta, SASADAI Junpei, KOBAYASHI Toshiki, SHIRAKAWA Taizan

Zeitschrift für Gerontologie und Geriatrie, 54(6), 547-554, 2020 年 12 月

（概要）

大腿骨近位部骨折患者における年齢と転倒方向との関連を検討するため、診療録を後方視的に調査し、受傷状況が記録されていた入院患者 91 名を解析した。65～84 歳の群と比較して、85 歳以上の群では側方転倒による受傷割合が低く、後方転倒による受傷割合が高医ことを示した。また、多変量解析により、転倒方向は年齢とのみ関連していることを示した。

**22. Ultrasonographic Evaluation of the Shoulders and Its Associations with Shoulder Pain, Age, and Swim Training in Masters Swimmers（筆頭）**

（マスターズスイマーにおける肩の超音波評価と肩痛，年齢および水泳トレーニングの関連）

SUZUKI Yuta, MAEDA Noriaki, SASADAI Junpei, KANEDA Kazuki, SHIRAKAWA Taizan, URABE Yukio

Medicina, 57(1), 29,2020 年 12 月

（概要）

マスターズ水泳選手における肩の超音波画像検査の異常所見と肩痛、年齢、練習量との関連を調査した。回旋筋腱板や上腕二頭筋長頭腱の腱炎、断裂、石灰化などの異常所見は、対照群に比べて水泳選手で有所見率が高いことを示した。上腕二頭筋長頭腱炎と棘上筋腱炎は肩痛と関連し、これらは年齢、競技歴、練習量の影響をうけることを示した。

**23. Cross-Sectional Study of the Prevalence and Symptoms of Urinary Incontinence among Japanese Older Adults: Associations with Physical Activity, Health-Related Quality of Life, and Well-Being（共著）**

（日本人高齢者における尿失禁の有病率および症状に関する横断的研究：身体活動、健康関連 QOL および主観的幸福感の関連）

MAEDA Noriaki, URABE Yukio, SUZUKI Yuta, HIRADO Daigo, MORIKAWA Masanori, KOMIYA Makoto, MIZUTA Rami, NAITO Koichi, SHIRAKAWA Taizan

International Journal of Environmental Research and Public Health, 18(2), 360, 2021 年 1 月

（概要）

高齢者における尿失禁の有病率と症状を調査し、尿失禁症状と身体活動量、健康関連 QOL、主観的幸福感との関連を検討した。有効回答 145 人のうち、50%が尿失禁症状を有しており、尿失禁症状をもつ患者では身体活動、健康関連 QOL、主観的幸福感が低下していることを示した。多変量解析により、尿失禁症状と年齢、糖尿病の有無，主観的幸福感の関連を示した。

**24. 中国・四国地区における障がい者水泳選手のスポーツ傷害調査（共著）**

金田和輝、浦辺幸夫、鈴木雄太、前田慶明

理学療法の臨床と研究、30(1)、41-46、2021 年 4 月

（概要）

切断・欠損、脳性麻痺、片麻痺、脊髄損傷、視覚障がいなどを有する障がい者水泳選手の傷害調査を実施した。肩関節の障がい既往率が最も高く、次いで手指、腰部、頚部の順に障がいが多く発生していることを示した。

**25. 体幹傾斜角度と腰椎彎曲角度がシッティングバレーボールを想定した座位姿勢での選択反応時間におよぼす影響（共著）**

有馬知志、浦辺幸夫、鈴木雄太、小宮 諒，福井一輝、田城 翼、前田慶明

理学療法の臨床と研究、30(1)、47-51、2021 年 4 月

（概要）

シッティングバレーボールを想定した座位での体幹傾斜角度の違いと、前後方向の移動時の反応時間の関係を検討した。前方移動時と比較して後方移動時には移動時間が短縮し、後方へ移動する際は体幹を後傾した姿勢でより素早く移動できる可能性を示した。

**26. 重度栄養障害を呈した大腿骨頚部骨折患者に対し、体重に着目して介入した一症例（共著）**

岡田泰河、鈴木雄太、吉田康兵、浦辺幸夫、白川泰山

理学療法の臨床と研究、30(1)、115-118、2021 年 4 月

（概要）
回復期リハビリテーション病棟入院時に重度栄養障害を呈した 80 代の大腿骨頚部骨折患者に対し、体重を指標として運動強度を設定し、病棟看護師や栄養士などの多職種で連携した介入を行うことで、栄養状態、日常生活活動動作および歩行能力の改善につながり、自宅退院が可能となった症例を報告した。

**27. 日本における COVID-19 による大学生の歩数の減少ースマートフォンアプリケーションによる調査ー（共著）**

浦辺幸夫、前田慶明、森川将徳、 鍔木悠里奈、鈴木雄太、白川泰山
体力科学、70(2)、175-179、2021 年 4 月

（概要）
COVID-19 の流行にともなう大学生の歩数の変化を 221 名のスマートフォンのウォーキングアプリデータを使用して解析した。緊急事態宣言が発令された 2020 年 4 月から 5 月にかけて、緊急事態宣言の発令前と比較して歩数は 64%程度に減少したことを示した。

**28. Impact of the COVID-19 Pandemic on Life Space Extent and Apathy: A Comparison of Competitive Japanese Swimmers with and without Disabilities（共著）**

（COVID-19 の流行が生活空間のひろがりとアパシーに与えた影響：健常競泳選手と障がい者競泳選手の比較）
KANEDA Kazuki, MAEDA Noriaki, SUZUKI Yuta, FUKUI Kazuki, URABE Yukio
International Journal of Environmental Research and Public Health, 18(10), 5106, 2021 年 5 月

（概要）
COVID-19 の流行が障がい者水泳選手の生活のひろがりとアパシーに与える影響をアンケートにより調査し、健常競泳選手と比較した。女性の障がい者水泳選手では、COVID-19 の流行にともない生活空間が狭小し、メンタルヘルスが悪化しやすい可能性があることを示した。

**29. Tensiomyographic Neuromuscular Response of the Peroneus Longus and Tibialis Anterior with Chronic Ankle Instability（共著）**

（慢性足関節不安定症者における長腓骨筋と前脛骨筋のテンシオマイオグラフィーによる神経筋反応）
TASHIRO Tsubasa, MAEDA Noriaki, SASADAI Junpei, KOTOSHIBA Somu, SAKAI Shogo, SUZUKI Yuta, FUJISHITA Hironori, URABE Urabe
Healthcare, 9(6), 707, 2021 年 6 月

（概要）
足関節捻挫後の慢性足関節不安定症（CAI）において、CAI の足部では長腓骨筋と前脛骨筋の筋力や筋厚が健側と比較して差がないにもかかわらず、長腓骨筋の収縮反応が遅延することを示した。CAI を有するものでは、筋力強化だけでなく、神経筋反応の改善に向けたアプローチが求められる可能性を示唆した。

**30. Do “Stay-at-Home Exercise” Videos Induce Behavioral Changes in College Students? A Randomized Controlled Trial（共著）**

（「ステイホームエクササイズ」動画は大学生の行動変容を誘発するか？無作為化比較試験）
FUKUI Kazuki, SUZUKI Yuta, KANEDA Kazuki, KURODA Sayo, KOMIYA Makoto, MAEDA Noriaki, URABE Yukio
Sustainability, 13(21), 11600, 2021 年 10 月

（概要）
COVID-19 の流行にともなう運動不足の解消に向けて、自宅でできる運動がさまざまなプラットフォームで配信されている。このような動画の配信が大学生の行動変容につながるかを RCT により検証した。動画配信のみでは身体活動量の増加にはつながらなかったが、動画を視聴することで精神的健康に好影響をもたらすことを示した。

**31. Effect of 6-Week Balance Exercise by Real-Time Postural Feedback System on Walking Ability for Patients with Chronic Stroke: A Pilot Single-Blind Randomized Controlled Trial（共著）**

（慢性期脳卒中患者におけるリアルタイム姿勢フィードバックシステムを用いた 6 週間のバランスエクササイズの歩行能力に対する効果：パイロット単盲検無作為化比較試験）
KOMIYA Makoto, MAEDA Noriaki, NARAHARA Taku, SUZUKI Yuta, FUKUI Kazuki, TSUTSUMI Shogo, YOSHIMI Mistuhiro, ISHIBASHI Naoki, SHIRAKAWA Taizan, URABE Yukio
Brain Sciences, 11(11), 1493, 2021 年 11 月

（概要）
慢性期の脳卒中患者を対象に、RCT によりリアルタイムの姿勢フィードバックシステムを用いたバランス運動の長

期的効果と持ち越し効果を検証した。6 週間の介入により TUG テストおよび歩行に関連する自己効力感が改善し、その効果は介入後 4 週まで継続することを示した。本研究で用いた介入プロトコルは、慢性期の脳卒中患者において安全かつ効果的にできるバランスエクササイズであることを示唆した。

**32. The relationship between the severity of perimenstrual symptoms and a regular exercise habit in Japanese young women: A cross-sectional online survey（共著）**

（日本人若年女性における月経周辺症状の重症度と定期的な運動習慣の関係：オンラインによる横断調査）

MIZUTA Rami, MAEDA Noriaki, KOMIYA Makoto, SUZUKI Yuta, TASHIRO Tsubasa, KANEDA Kazuki, TSUTSUMI Shogo, ISHIHARA Honoka, KURODA Sayo, URABE Yukio

BMC Women's Health, 22(1), 200, 2022 年 5 月

（概要）

若年日本人女性を対象に、運動習慣と月経周辺症状の重症度の関連を横断的なオンラインアンケートにより調査した。週 2 回、1 回あたり 30 分以上の運動習慣がある対象では、運動習慣のない対象と比較して月経前および月経中の重症度が低いことを示した。

**33. 大腿骨近位部骨折術後患者に対する足浴が身体機能に及ぼす急性効果（共著）**

山口和真、鈴木雄太、白川泰山、浦辺幸夫

運動器リハビリテーション、33(1)、43-48、2022 年 6 月

（概要）

大腿骨近位部骨折術後患者 16 名をランダムに介入群と対照群の 2 群にわけ、15 分間の足浴による歩行能力やバランス能力の即時的な変化を確認した。10m歩行時間や Timed Up and Go Test が短縮することを示した。

**34. Factors associated with injuries and gender difference in Japanese adolescent athletes returning to sports following the COVID-19 restriction（共著）**

（新型コロナウイルス感染症の流行によるスポーツ活動の制限後に競技を再開した日本人思春期アスリートにおける傷害と性差に関連する要因）

TASHIRO Tsubasa, MAEDA Noriaki, SUZUKI Yuta, TSUTSUMI Shogo, FUKUI Kazuki, MIZUTA Rami, ISHIHARA Honoka, KOMIYA Makoto, URABE Yukio

Journal of Men's Health, 18(8), 175, 2022 年 8 月

（概要）

新型コロナウイルス感染症の流行による部活動などのスポーツ活動が制限された思春期アスリートを対象に、競技再開後の傷害発生の特徴や性差を明らかにすることを目的にオンラインアンケート調査を行った。258 名から有効回答が得られた。過去の傷害既往が競技再開後の傷害発生と関連していること、傷害発生のあった対象では競技再開後に練習時間が増加したこと、女性の傷害発生率が高いことを示した。

**35. 変形性膝関節症患者の自宅での 8 週間のハムストリング強化エクササイズが筋断面積および筋輝度に与える変化（共著）**

平戸大悟、鈴木雄太、小宮 諒、前田慶明、白川泰山、浦辺幸夫

理学療法の臨床と研究、32(1)、10-14、2022 年 9 月

（概要）

自宅でのハムストリング強化エクササイズによって変形性膝関節症患者の歩行時痛や筋力、筋形態の変化を確認した。12 名の対象を介入群と対照群に分け、介入群はゴムチューブを使用したセルフエクササイズを 8 週間行った。その結果、介入群では歩行時痛の減少、等尺性膝屈曲筋力の増加がみられ、セルフエクササイズとしてのハムストリングの筋力強化の有効性を示した。

**36. COVID-19 による生活環境変化が地方在住の健常水泳選手とパラ水泳選手の生活範囲と精神的健康に与える影響（共著）**

金田和輝、前田慶明、鈴木雄太、寺田大輝、小宮 諒、浦辺幸夫

日本アスレティックトレーニング学会誌、8(1)、117-123、2022 年 10 月

（概要）

健常水泳選手とパラ水泳選手に対し、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言の発令中と解除後にアンケート調査を行い、生活環境の変化が生活範囲と精神的健康に与えた影響を検討した。生活範囲は全対象者で緊急事態宣言の解除後に増加し、女性パラ水泳選手では精神的健康度が低下していたことを示した。

**37. ジュニア競泳選手の筋柔軟性および関節弛緩性の年代差および性差（筆頭）**

鈴木雄太、奥田鉄人、三瀬貴生、國分裕一、栗木明裕、髙山弘幹、前田慶明、浦辺幸夫

日本臨床スポーツ医学会誌、31(1)、122-129、2023 年 1 月

（概要）

6 府県の中学・高校競泳選手 452 名の全身の筋柔軟性および関節弛緩性を横断的に調査し、年代さおよび性差について検討した。筋柔軟性は高学年で低値を示していたのに対し、関節弛緩性は高学年で高値であり、競技の継続と関節弛緩性の増大の関連が示唆された。また、多くの測定項目で性差が認められた。

**38. 女性アスリートの月経に伴う症状によるスポーツ活動への影響とコンディショニングについて：オンラインアンケート調査（共著）**

水田良実、前田慶明、小宮 諒、田城 翼、鈴木雄太、浦辺幸夫

スポーツ理学療法学、1(1)、7-12、2023 年 3 月

（概要）

女性アスリートの月経に関連したスポーツ活動中の不調の経験および月経症状に対する対処方法の問題点を探った。151 名から有効回答が得られ，全体の 80%が月経周期によってコンディションの変動があるとし，75%がスポーツ活動に影響があると答えた。一方で、婦人科の受診経験があるのは 14%にとどまり、多くのアスリートが相談しにくい環境にいることを示した。

**39. Quality of life by dysmenorrhea severity in young and adult Japanese females: A web-based cross-sectional study（共著）**

（日本人の若年および成人女性における月経困難症の重症度による生活の質：ウェブベースの横断的研究）

MIZUTA Rami, MAEDA Noriaki, TASHIRO Tsubasa, SUZUKI Yuta, ODA Sakura, KOMIYA Makoto, URABE Yukio

PLoS One, 18(3), e0283130, 2023 年 3 月

（概要）

月経困難症の重症度によって感情や症状への対処方法、QOL への影響が異なるかをオンラインアンケートを用いて調査した。月経困難症者 471 名を重症度によって 3 群に分けて検討し、月経困難症の重症度が高い対象で QOL が低く、QOL のなかでも特に身体的、心理的、環境的下位尺度の点数が低いことを示した。

**40. 広島県におけるジュニア競泳選手の足部形態と足趾把持力の関連（共著）**

金田和輝、前田慶明、田城 翼、堤 省吾、有馬知志、鈴木雄太、小宮 諒、浦辺幸夫

水と健康医学研究会誌第、24(1)、35-41、2023 年 4 月

（概要）

競泳選手の足部形態と足趾把持力の関連について、同世代の他競技選手と比較した。競泳選手では、母趾外転筋の筋断面積が大きいほど舟状骨降下量が小さく、足趾把持力が大きいことが示された。

**41. COVID-19 による緊急事態宣言下のスポーツ活動制限が競技再開後の競泳選手の傷害発生にあたえる影響（筆頭）**

鈴木雄太、田城翼、金田和輝、浦辺幸夫

水と健康医学研究会誌第、24(1)、49-58、2023 年 4 月

（概要）

新型コロナウイルス感染症の流行によるスポーツ活動の制限後に、競泳選手が競技を再開した際の傷害発生状況を調査した。有効回答 134 名のうち、傷害発生率は 20.9%であり、外傷が 46.8%、障害が 53.2%であった。男性よりも女性で傷害を受傷した選手の割合が高く、過去 1 年間になにかしらの傷害既往のある選手が新たな部位の傷害を受傷することが多いことを示した。

**42. Differences in Center of Pressure Displacement and Lower Limb Muscle Activity During Releve Descending Phase Comparing Flat Shoes and Pointe Shoes（共著）**

（フラットシューズとポワントシューズの比較によるレレベ動作下降期の足圧中心変位と下肢筋活動の違い）

TSUBAKI Yurina, MAEDA Noriaki, SUZUKI Yuta, MORIKAWA Masanori, MIZUMURA Mayumi, URABE Yukio

Medical Problems of Performing Artists, 38(2), 104-109, 2023 年 6 月

（概要）

バレエダンサーのレレベ動作下降フェーズの足圧中心変位と下肢筋活動について、フラットシューズとトウシューズの違いを検討した。トウシューズでは足圧中心が外側にシフトし、この原因として前脛骨筋と腓腹筋の筋活動の関与を示唆した。

**43. The Features of Foot Morphology and Intrinsic Foot Muscle Property in Adolescent Swimmers: An Ultrasound-Based Study（共著）**

（若年水泳選手の足部形態と足部内在筋の特徴：超音波画像診断装置による研究）

KANEDA Kazuki, MAEDA Noriaki, IKUTA Yasunari, TASHIRO Tsubasa, TSUTSUMI Shogo, ARIMA Satoshi, SASADAI Junpei, SUZUKI Yuta, MORIKAWA Masanori, KOMIYA Makoto, ADACHI Nobuo, URABE Yukio
Journal of Human Kinetics, 88(1), 95-103, 2023 年 7 月

（概要）
水泳選手と他競技アスリートとの間で足の形状と足部内在筋の関係を調査した。水泳選手の足の舟状骨高は他競技アスリートに比べて低く、水泳選手における舟状骨高を足趾底筋の断面積との関連を明らかにした。

**44. Effectiveness of Metaverse Space-Based Exercise Video Distribution in Young Adults: Randomized Controlled Trial（共著）**
（若者におけるメタバース空間ベースの運動ビデオ配信の有効性：ランダム化比較試験）
MIZUTA Rami, MAEDA Noriaki, TASHIRO Tsubasa, SUZUKI Yuta, KURODA Sayo, ISHIDA Ayano, ODA Sakura, WATANABE Tomoya, TAMURA Yuki, KOMIYA Makoto, URABE Yukio
JMIR Mhealth Uhealth, 16(12), e46397, 2024 年 1 月

（概要）
メタバース空間を利用した運動動画配信が、若者の身体活動量や精神的健康に与える影響を調査した。Youtube で動画を配信する群と比較してメタバース空間を利用すると 8 週間の介入により身体活動量が増加することを示した。

【報告】

**1. 第 10 回アジアエージグループ選手権帯同報告**
村田大樹，奥田鉄人，鈴木雄太
水と健康医学研究会誌 22(1)，61-69，2020 年 4 月

（概要）
バンガロール（インド）で行われた第 10 回アジアエージグループ選手権の水球競技へ日本代表選手団トレーナーとして帯同し、感染症対策や衛生管理、コンディショニングおよび外傷対応についての活動内容を報告した。

【学会発表】
（国際学会 筆頭発表のみ）

**1. Motion characteristics of the thoracic, lumbar, and pelvic movements during trunk extension in the standing position in athletes**
（スポーツ選手の立位体幹伸展時の胸椎・腰椎・骨盤の運動特性）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio
〈主　　催〉The 35th SITEMSH Congress
〈開催場所〉Japan
〈開催年月日〉2016 年 3 月 13 - 18 日

（概要）
オーバーヘッドアスリートの体幹伸展動作時の胸椎、腰椎および骨盤の関連を検討し、下部腰椎の運動が小さい者では、上部腰椎および骨盤の運動が大きくなることを示し、下部腰椎の運動が大きい者では、骨盤の運動が小さいことを示した。

**2. The incidence and risk factors of shoulder pain in junior competitive swimmers**
（ジュニア競泳選手における肩痛の発生率と危険因子）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio, MAEDA Noriaki, MORITA Miho, SHIMA Toshiya, SHIRAKAWA Taizan
〈主　　催〉IOC World Conference Prevention of Injury & Illness in Sports
〈開催場所〉Monaco
〈開催年月日〉2017 年 3 月 16 - 19 日

（概要）
ジュニア競泳選手において、肩関節障害は最も発生頻度の高い障害であり、第 2 肢位での肩関節内旋可動域の低下が肩関節障害発生のリスクファクターであることを示した。

**3. Relationship between the parameters of body roll in front crawl swimming derived from accelerometer and swimming performance**
（クロール泳における加速度センサーから得られた体幹回旋のパラメータと泳パフォーマンスの関係）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio, MAEDA Noriaki, SHIRAKAWA Taizan

〈主　　催〉The 8th Asian Conference on Kinesiology
〈開催場所〉Daegu, Korea
〈開催年月日〉2017 年 11 月 29 － 12 月 3 日

（概要）
陸上空間において、クロール泳のストローク動作中の体幹回旋運動を加速度計にて測定し、競技パフォーマンスとの関連を検討した。加速度波形のパワースペクトラム解析から得られた指標が低値であるほど水中での競技パフォーマンスが高いことが示された。

**4. Measurement of front crawl stroke technique using accelerometer simulated in dry-land space**
（陸上空間における加速度計によるクロール泳のストローク技術の計測）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio, MAEDA Noriaki
〈主　　催〉The 13th International Symposium on Biomechanics and Medicine in Swimming
〈開催場所〉Tsukuba, Japan
〈開催年月日〉2018 年 9 月 18 － 21 日

（概要）
三軸加速度により定量化したクロール泳のストローク動作は、柔軟性や筋力などの身体機能や競技パフォーマンスを反映しており、三軸加速度による評価が妥当な指標であることを示した。

**5. Relationship between Upper Quarter Y Balance Test and physical function in collegiate swimmer**
（大学水泳選手における Upper Quarter Y Balance Test と身体機能の関連）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio, KOTOSHIBA Somu, SASADAI Junpei, MAEDA Noriaki
〈主　　催〉World Confederation for Physical Therapy Congress 2019
〈開催場所〉Geneva, Switzerland
〈開催年月日〉2019 年 5 月 10 － 13 日

（概要）
競技レベルの高い競泳選手と低い選手で、Upper Quarter Y Balance Test のスコアと関連する筋力や柔軟性などの身体機能が異なることを示し、競技力の違いによる身体の運動制御の違いを反映している可能性を示唆した。

**6. The differences in physical functions necessary for discharge to home after hip fracture on pre-injury residence area**
（股関節骨折後の自宅退院に必要な身体機能の受傷前居住地での違い）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio, SASADAI Junpei, MAEDA Noriaki, SHIRAKAWA Taizan
〈主　　催〉International Society of Physical and Rehabilitation Medicine 2019
〈開催場所〉Kobe, Japan
〈開催年月日〉2019 年 6 月 9 － 13 日

（概要）
受傷前の居住地の地理的特徴が大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に影響するかを調査した。傾斜地への自宅退院には、高い ADL 自立度と歩行耐久性が求められ、島嶼部への自宅退院には ADL の自立が不可欠であることを示した。

**7. Does the physical function required for discharge to own home after hip fracture differ depending on the residential area before the injury?**
（股関節骨折後の自宅退院に必要な身体機能は、受傷前の居住地域によって異なるか？）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio, SASADAI Junpei, MAEDA Noriaki, SHIRAKAWA Taizan
〈主　　催〉7th Asia-Oceanian Conference of Physical & Rehabilitation Medicine 2020
〈開催場所〉Seoul, Korea（Web 学会）
〈開催年月日〉2020 年 7 月 17 － 18 日

（概要）
大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院する際に求められる身体機能を調査した。受傷前の居住地に関係なく、ADL の自立が自宅退院に不可欠であり、加えて傾斜地への自宅退院では、歩行耐久性の獲得と認知機能の維持が必要であることを示した。

**8. Effects of COVID-19 home confinement on physical activity and subjective well-being**
（COVID-19 による自宅隔離が身体活動および主観的幸福感におよぼす影響）
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, URABE Yukio, MAEDA Noriaki, SHIRAKAWA Taizan

〈主　　催〉Asian Confederation for Physical Therapy Congress 2020
〈開催場所〉Macau, China (Web 学会)
〈開催年月日〉2020 年 10 月 24 - 25 日

(概要)
COVID-19 の流行前後で、高齢者の身体活動量および主観的幸福感の変化を調査した。流行前に身体活動量が高かった対象では、COVID-19 流行語に身体活動量が低下し、主観的幸福感が低下するが、もともと身体活動量が低かった対象では、主観的幸福感の変化はみられなかった。

**9. Factors affecting the improvement of gait independence in patients with stroke using robot-assisted gait training: a five-case series**
(ロボット支援歩行練習による脳卒中患者の歩行自立度の改善に影響を及ぼす要因:5 症例のケースシリーズ研究)
〈共同発表者〉SUZUKI Yuta, HIRADO Daigo, SHIRAKAWA Taizan, URABE Yukio
〈主　　催〉World Physiotherapy Congress 2023
〈開催場所〉Dubai, UAE
〈開催年月日〉2023 年 6 月 2 - 4 日

(概要)
Hybrid Assistive Limb (HAL) による歩行自立度の改善に影響する介入開始時の要因について、5 症例に対する 4 週間の介入結果から記述的に検討した。回復期の脳卒中患者において、HAL を使用した歩行練習による歩行自立度の改善には、介入開始までの日数や運動麻痺の程度、日常生活自立度、歩行練習距離よりも、介入開始時の年齢や認知機能の低下、あるいは併存疾患の存在が影響する可能性を示唆した。

【学会発表】
(国内学会　筆頭発表のみ)

**1.　競泳ストリームライン姿勢での立位脊柱アライメントー非競泳選手と大学競泳選手での比較ー**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、藤井絵里、山本圭彦、森山信彰、河原大陸、森田美穂
〈主　　催〉第 50 回日本理学療法学会学術集会
〈開催場所〉東京
〈開催年月日〉2015 年 6 月 5 - 7 日

(概要)
競泳競技の基本姿勢であるストリームライン姿勢において、上肢挙上角度が大きな競泳経験者では、胸椎の後弯角度、腰椎の前弯角度、骨盤の前傾角度が小さいことで、より直線的なストリームライン姿勢が保持できることを示した。

**2.　居住地域の地理的条件は高齢大腿骨近位部骨折術後患者の退院先に影響するか**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、藤井絵里、山本圭彦、森山信彰、河原大陸、森田美穂
〈主　　催〉第 50 回日本理学療法学会学術集会
〈開催場所〉東京
〈開催年月日〉2015 年 6 月 5 - 7 日

(概要)
大腿骨近位部骨折術後患者が傾斜地へ自宅退院する場合は高い歩行能力が求められることを示唆し、島嶼部では、身体機能や独居の有無に関わらず自宅退院率が低いことを示した。

**3.　大学競泳選手における体幹伸展動作時の胸椎、腰椎および骨盤の連動**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、島 俊也、白川泰山
〈主　　催〉第 2 回日本スポーツ理学療法学会学術大会
〈開催場所〉東京
〈開催年月日〉2016 年 1 月 9 日

(概要)
体幹伸展動作における腰椎、胸椎および骨盤の運動を計測し、下部腰椎の運動が小さい者では、上部腰椎および骨盤の運動が大きいことを示し、下部腰椎の運動が大きい者では、上部腰椎および骨盤の運動が小さいことを示した。

**4.　ジュニア競泳選手における障がい既往と柔軟性の関連ー肩関節障がいに着目してー**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、森田美穂、島 俊也、白川泰山、永田和久
〈主　　催〉第 19 回水と健康医学研究会

〈開催場所 〉東京
〈開催年月日〉2016 年 6 月 4 日

（概要）
広島県のジュニア競泳選手の約 40%が肩関節障害の既往を有し、肩関節障害の発生と第 2 肢位での肩関節内旋可動域の低下との関連を示した。

**5. 高齢者におけるバランスエクササイズの即時的効果**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、島 俊也、白川泰山
〈主　　催〉第 28 回日本運動器科学会
〈開催場所〉福島
〈開催年月日〉2016 年 7 月 9 － 10 日

（概要）
株式会社 MIKASA 社と共同で独自のバランスボードを使用した 5 分間のバランスエクササイズによって、高齢者の片脚立位時間や重心動揺が即時的に改善することを示した。

**6. ジュニア競泳選手の肩関節障がいに関連する柔軟性の検討**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、島 俊也、白川泰山、永田和久
〈主　　催〉第 71 回日本体力医学会大会
〈開催場所〉岩手
〈開催年月日〉2016 年 9 月 23 － 25 日

（概要）
広島県のジュニア競泳選手を対象に傷害既往調査とフィジカルチェックを行い、肩関節障害の発生には、男女とも第 2 肢位での肩関節内旋可動域の低下が関連することを示した。

**7. 競泳選手の胸郭回旋運動の加速度と競技パフォーマンスの関係**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明
〈主　　催〉スポーツ選手のためのリハビリテーション研究会第 34 回研修会
〈開催場所〉兵庫
〈開催年月日〉2017 年 3 月 12 日

（概要）
陸上空間で模倣したクロール泳のストローク動作を加速度計にて定量的に評価することを試みた研究の第一報である。加速度の波形解析から得られた指標と水中での競技パフォーマンスの関連を示し、有用な評価指標である可能性を示した。

**8. 加速度計による競泳選手の胸郭回旋運動評価の試み**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、島 俊也、白川泰山
〈主　　催〉第 52 回日本理学療法学会学術集会
〈開 催 場 所〉千葉
〈開催年月日〉2017 年 5 月 12 － 14 日

（概要）
クロール泳中の胸郭回旋運動を加速度計にて定量的に測定した研究の第二報である。加速度波形のパワースペクトラム解析および RMS を用いることで、水中での競技パフォーマンスを反映する評価指標として確立した。

**9. 大学競泳選手における Upper Quarter Y Balance Test と身体機能の関係**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、事柴壮武、笹代純平、前田慶明
〈主　　催〉第 21 回水と健康医学研究会
〈開 催 場 所〉東京
〈開催年月日〉2018 年 6 月 9 日

（概要）
競技レベルの高い競泳選手では Upper Quarter Y Balance Test の成績が良く、その要因として、競技レベルの高い選手と低い選手で Upper Quarter Y Balance Test の成績と関連する身体機能が異なることを示した。

**10. 足関節捻挫治療の現状と諸外国との比較**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、小宮 諒、酒井章吾、笹代純平、前田慶明
〈主　　催〉第 7 回日本アスレティックトレーニング学会
〈開 催 場 所〉神奈川
〈開催年月日〉2018 年 7 月 7 － 8 日

（概要）
我が国での足関節捻挫後の治療内容を調査し、その結果を諸外国の報告と比較した。共通していた治療の内容は、疼痛・腫脹のコントロール、可動域練習、筋力トレーニング、動作指導であり、諸外国では、バランストレーニングを積極的に推奨していることを示した。

**11. 広島県ジュニア競泳選手の障害既往と身体的特徴**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、金田和輝、笹代純平、前田慶明
〈主　　催〉第23回広島県理学療法士学会
〈開 催 場 所〉広島
〈開催年月日〉2018年12月2日

（概要）
ジュニア競泳選手の半数以上が競技に関連した障害既往を有し、男女ともに肩関節障害が最も多いことを示した。また、柔軟性は女子で高く、男女とも高学年になるにしたがい筋の柔軟性は低下するが、関節弛緩性は増加することを示した。

**12. 居住地域の地理的条件による大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に必要な身体機能の違い**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、森川将徳、前田慶明、笹代純平、白川泰山
〈主　　催〉第31回日本運動器科学会
〈開 催 場 所〉岡山
〈開催年月日〉2019年7月6－7日

（概要）
受傷前の居住地の地理的特徴が大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に影響するかを調査した。傾斜地への自宅退院には、高いADL自立度と歩行耐久性が求められ、島嶼部への自宅退院にはADLの自立が不可欠であることを示した。

**13. 自宅周囲の地理的特徴による大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に必要な身体機能の違い**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、森川将徳、前田慶明、笹代純平、白川泰山
〈主　　催〉第6回日本予防理学療法学会学術大会
〈開 催 場 所〉広島
〈開催年月日〉2019年10月19－20日

（概要）
大腿骨近位部骨折術後患者が自宅退院する際に必要な身体機能を、受傷前の居住地域別に比較した。居住地に関係なくADL能力は自宅退院に重要な因子であり、傾斜地への自宅退院では歩行耐久性が求められることを示した。

**14. What is necessary for the prevention of ankle sprain from the standpoint of physical therapists and athletes**
（理学療法士とアスリートの立場からみた足関節捻挫の予防に必要なこと）
〈共同発表者〉Yuta Suzuki, Yukio Urabe, Tsubasa Tashiro, Makoto Komiya, Shogo Sakai, Junpei Sasadai, Noriaki Maeda
〈主　　催〉第6回日本予防理学療法学会学術大会
〈開 催 場 所〉広島
〈開催年月日〉2019年10月19－20日

（概要）
足関節捻挫受傷後に、多くの選手がリハビリテーションを受けておらず、再発予防のためには、選手が捻挫の再発や慢性化のリスクを認識し、正しい治療を受けることが必要であることを示した。

**15. ジュニア競泳選手の肩関節痛の発生率および柔軟性の性差**
〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、金田和輝、笹代純平、前田慶明、白川泰山
〈主　　催〉第1回広島スポーツ理学療法研究会
〈開 催 場 所〉広島
〈開催年月日〉2020年1月5日

（概要）
男性では第2肢位の内旋角度の減少と外旋角度の増加が肩関節痛に関連することが示されたが、女性では肩関節痛と柔軟性の関連はなく、他の要因が関連する可能性を示唆し、男女差を踏まえた対応が求められることを示した。

**16. ジュニア競泳選手の柔軟性および関節弛緩性の年代による違い**

〈共同発表者〉鈴木雄太、奥田鉄人、三瀬貴生、國分裕一、栗木明裕、髙山弘幹、前田慶明、浦辺幸夫
〈主　　催〉第31回日本臨床スポーツ医学会学術集会
〈開 催 場 所〉Web 開催
〈開催年月日〉2020年11月4 - 30日

（概要）
6府県のスイミングクラブで選手コースに所属する小学5年生から高校3年生までの競泳選手437名に対し、上肢5項目、下肢7項目の柔軟性および弛緩性の測定を実施し、年代による違いを確認した。肩関節や股関節などの体幹部から近位にある筋・関節の柔軟性は高学年で低く，膝関節や足関節などの体幹部から遠位の関節の弛緩性は高学年で高いことが示された。

**17. ジュニア競泳選手の肩関節痛に関連する柔軟性の性差**

〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、金田和輝、前田慶明、白川泰山
〈主　　催〉第9回日本アスレティックトレーニング学会
〈開 催 場 所〉Web 開催
〈開催年月日〉2020年12月4 - 6日

（概要）
ジュニア競泳選手の肩関節痛の発生と柔軟性の関連について、1年間の前向き調査を実施した。男性では第2肢位の肩関節外旋角度の増加が肩関節痛に関連することが示されたが、女性では肩関節痛と柔軟性の関連はなく、他の要因が関連する可能性を示唆し、男女差を考慮した対応が求められることを示した。

**18. マスターズスイマーの肩超音波画像検査の異常所見と肩関節痛の関連**

〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、白川泰山
〈主　　催〉第32回日本運動器科学会
〈開 催 場 所〉Web 開催
〈開催年月日〉2021年5月8 - 9日

（概要）
マスターズスイマーを対象に、超音波画像診断装置を用いて上腕二頭筋長頭腱，棘上筋，棘下筋，肩甲下筋の水腫，腱炎，損傷，石灰化などの異常所見の陽性率と肩関節痛の関連を調査した。肩関節痛を有する対象で、上腕二頭筋長頭腱炎および棘上筋腱炎初見が多いことが示された。

**19. COVID-19の流行による地域在住高齢者の活動量および主観的幸福感の変化**

〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明、白川泰山
〈主　　催〉第58回日本リハビリテーション医学会学術集会
〈開 催 場 所〉Web 開催
〈開催年月日〉2021年6月10 - 13日

（概要）
新型コロナウイルスの感染拡大にともなう地域在住高齢者の身体活動量と主観的幸福感の変化を縦断的に調査した。緊急事態宣言の発令により身体活動量が減少した高齢者では主観的幸福感が低下し、緊急事態宣言が解除された後も身体活動量および主観的幸福感は発令前の水準まで回復しないことを示した。

**20. COVID-19 によるスポーツ活動制限からの競技再開後の水泳選手の傷害発生状況**

〈共同発表者〉鈴木雄太、浦辺幸夫
〈主　　催〉第24回水と健康医学研究会
〈開 催 場 所〉東京
〈開催年月日〉2022年6月4日

（概要）
COVID-19 の感染拡大にともなうスポーツ活動の中止後に、競技を再開した際の競泳選手の傷害発生状況を調査した。134 名から回答が得られ、外傷、障害ともに半数以上が初回の受傷であること、外傷の発生頻度の少ない競泳選手で競技以外の日常生活で外傷が多く発生していたこと、傷害発生の有無で基本情報やスポーツ活動の中止期間に差がないことなどを示した。

**21. 重度変形性膝関節症および心不全を併存した脳梗塞患者に対し HAL を用いて歩行自立度の改善を得た一症例**

〈共同発表者〉鈴木雄太、平戸大悟、浦辺幸夫、白川泰山

〈主　　催〉第20回日本神経理学療法学会学術大会
〈開 催 場 所〉大阪
〈開催年月日〉2022年10月15 - 16日

（概要）
重度変形性膝関節症と心不全を併存した脳梗塞の患者に対し、ロボットスーツHybrid Assist Limb（HAL）を用いたリハビリテーションの効果を報告した。マルチモビディティの患者では、症状の多様性からリハビリテーションの進行に難渋する例も多いが、HAL によるアシストと免荷式トレッドミルの併用により歩行自立度が向上する可能性を示した。

**22. 回復期リハビリテーション病棟入棟時の栄養状態と ADL 自立度が脳卒中患者の自宅退院におよぼす影響**
〈共同発表者〉鈴木雄太、岡田泰河、平戸大悟、廣滋恵一、浦辺幸夫、白川泰山
〈主　　催〉九州理学療法士学術大会2022 in 福岡
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2022年11月26 - 27日

（概要）
脳卒中後の患者の回復期リハビリテーション病棟入棟時の栄養状態とADL自立度が退院先に影響するかを診療録より後方視的に調査した。89名を解析対象とし、回復期病棟入棟時ADL自立度および栄養状態からクラスター解析を行った。入院時のADL自立度が高いクラスターは自宅退院率が高く、入院時の栄養状態が境界域～低栄養のクラスターでは、ADL自立度の改善が乏しく、自宅退院率が低かったことを示した。

**23. Hybrid Assistive Limb による歩行練習が歩行時の筋シナジーに与える即時効果**
〈共同発表者〉鈴木雄太、平戸大悟、岡田泰河、浦辺幸夫、白川泰山
〈主　　催〉第21回日本神経理学療法学会学術大会
〈開 催 場 所〉横浜
〈開催年月日〉2023年9月9 - 10日

（概要）
回復期の脳卒中患者2名に対し、Hybrid Assistive Limb（HAL）を用いた1回30分の歩行練習を行い、介入前後での歩行中の筋シナジーの即時的変化を確認した。歩行練習により、歩行中の筋シナジー数および構成する筋の重み付けが即時的に変化することを示し、加えて、併合した筋シナジーが分画する過程には複数のパターンが存在する可能性を示唆した。

**24. Hybrid Assistive Limb を用いた歩行練習による歩行自立度の改善に影響する要因：5症例によるケースシリーズ研究**
〈共同発表者〉鈴木雄太、岡田泰河、平戸大悟、浦辺幸夫、白川泰山
〈主　　催〉九州理学療法士学術大会2023 in 熊本
〈開 催 場 所〉熊本
〈開催年月日〉2023年11月25 - 26日

（概要）
Hybrid Assistive Limb（HAL）による歩行自立度の改善に影響する介入開始時の要因について記述的に検討した。回復期の脳卒中患者において、HAL を使用した歩行練習による歩行自立度の改善には、介入開始までの日数や運動麻痺の程度よりも、認知機能の低下や歩行練習に影響する併存疾患の存在が影響する可能性を示唆した。

**25. 脳卒中患者における歩行時の筋シナジーおよび臨床指標の経時的変化**
〈共同発表者〉鈴木雄太、平戸大悟、浦辺幸夫、白川泰山
〈主　　催〉第28回日本基礎理学療法学会学術大会
〈開 催 場 所〉広島
〈開催年月日〉2023年12月2 - 3日

（概要）
脳梗塞を呈した回復期患者に対し、Hybrid Assistive Limb（HAL）を用いた歩行練習を4週間継続し、運動麻痺や歩行能力および歩行中の筋シナジーの経時的な変化を確認した。本症例では歩行自立度および歩行速度の改善、遊脚期の筋シナジーの変化が確認され、臨床的指標と筋シナジーの変化の関連を示唆した。

**26. 脳卒中後患者の筋シナジーに対するHAL歩行練習の急性効果**
〈共同発表者〉鈴木雄太、平戸大悟、白川泰山
〈主　　催〉第12回日本脳神経HAL研究会

| | |
|---|---|
| | 〈開 催 場 所〉福岡<br>〈開催年月日〉2023 年 12 月 16 日<br>（概要）<br>回復期の脳卒中患者 3 名の異常歩行パターンに応じた Hybrid Assistive Limb（HAL）のアシスト設定が、歩行中の筋シナジーを即時的に変化させるかを確認した。30 分間の歩行練習により、すべての症例でシナジー数が 2→3 へ増加し、異常歩行パターンの改善とシナジーの分離が同時にみられることを示した。 |
| | **27. HAL®歩行練習による歩行自立の可否を分ける介入開始時の臨床的特徴**<br>〈共同発表者〉鈴木雄太、平戸大悟、白川泰山<br>〈主　　催〉第 4 回九州 HAL 愛好会<br>〈開 催 場 所〉福岡<br>〈開催年月日〉2024 年 4 月 27 日<br>（概要）<br>脳梗塞を呈した回復期患者 20 名に対し、Hybrid Assistive Limb（HAL）を用いた歩行練習を 4 週間継続し、4 週後の歩行自立の可否を分ける介入開始時の臨床的指標を検討した。4 週間後に歩行が自立した者は、介入開始時の下肢随意性、体幹機能、非麻痺側機能、認知機能が高く、これらが HAL 介入による歩行自立の可否を分ける指標となる可能性を示唆した。 |
| | 【競争的資金】 |
| | **1. 公益社団法人広島県理学療法士会 平成 29 年度学術研究助成（代表）**<br>課題名：広島県ジュニア競泳選手の傷害既往と身体的特徴の関連の検討と傷害予防対策の構築<br>研究期間：2017 年 6 月 18 日 ～ 2019 年 12 月 31 日<br>助成金額：133,000 円 |
| | **2. 一般社団法人日本運動器科学会 学術プロジェクト研究助成（分担）**<br>課題名：テレワークの増加に伴う若年者のロコモティブシンドロームに対する継続可能なエクササイズツールの検討および運動習慣の獲得<br>研究期間：2020 年 7 月 27 日 ～ 2021 年 3 月 31 日<br>助成金額：2,700,000 円 |
| | **3. 公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団**<br>**2022 年度（前期）在宅医療推進のための調査研究等への助成（分担）**<br>課題名：在宅要介護高齢者の身体活動量やソーシャルキャピタルの向上につながるオンラインホームエクサイズの開発<br>研究期間：2022 年 8 月 1 日 ～ 2025 年 9 月 30 日<br>助成金額：900,000 円 |
| | **4. 日本学術振興会 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援（代表）**<br>課題名：脳卒中患者に対するロボットスーツ HAL を用いた歩行練習の適応基準の確立<br>研究期間：2022 年 9 月 1 日 ～ 2024 年 3 月 31 日<br>助成金額：2,860,000 円 |
| | **4. 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究（代表）**<br>課題名：脳卒中患者の歩行支援ロボットトリハビリテーション：筋シナジーに基づく新規アプローチ<br>研究期間：2024 年 4 月 1 日 ～ 2027 年 3 月 31 日<br>助成金額：4,680,000 円 |
| 主な社会活動 | 【講演・シンポジウム】 |
| | ・第 21 回水と健康医学研究会 シンポジウム　(2016 年 2 月 14 日)<br>「中央と地方が連携したフィジカルチェックの取り組み～<br>各地域での取り組みでわかってきたこと～」 |
| | ・スポーツ選手のためのリハビリテーション研究会　(2019 年 3 月 17 日)<br>第 36 回研修会 シンポジウム「トレーナー活動と傷害予防」 |
| | ・第 6 回日本予防理学療法学会学術大会　特別企画①　(2019 年 10 月 19 日)<br>「平和都市広島と健康増進」 |

| | |
|---|---|
| | 【研修会・セミナー講師】 |
| | ・日本水泳ドクター会議・トレーナー会議合同 第3回 中国・四国ブロック研修会「広島での活動からみえてきた フィットネスチェックと障害予防」 (2018年2月25日) |
| | ・日本水泳連盟 学生委員会 中国・四国支部主催 2019年度 スイムクリニック「勝つためのコンディショニング」 (2019年10月5日) |
| | ・株式会社 Rebel Flag 主催　エポックセミナー 「初学者のための臨床研究入門」 (2022年2月10日、24日、3月10日、24日) |
| | ・株式会社 Rebel Flag 主催　エポックセミナー 「PT・OT・STのための臨床研究・統計学のすすめ」 (2022年9月8日、10月13日、11月10日、12月8日、1月12日、2月9日) |
| | ・株式会社 Rebel Flag 主催　エポックセミナー 「医療従事者のための統計学入門」 (2023年6月23日) |
| | ・株式会社 Rebel Flag 主催　エポックセミナー 「初学者のための臨床研究入門」 (2023年10月2日、11月6、12月4日、1月8日) |
| | 【座長等】 |
| | ・第10回日本ロボットリハビリテーション・ケア研究大会 研究報告Ⅰ セッションアドバイザー (2021年10月10日) |
| | 【協会・団体 委員等】 |
| | ・International Society for Snowsports Medicine 35th SITEMSH Congress National Organizing Committee (2015年4月～2016年3月) |
| | ・広島県スポーツ協会 スポーツ医・科学サポート事業 フィジカルトレーナー（水泳競技） (2015年4月～2022年3月) |
| | ・日本理学療法士協会 ガイドライン・用語策定委員会 ACLシステマティックレビュー班 副班長 (2018年3月～2021年6月) |
| | ・広島県水泳連盟 競技力向上委員会 医・科学委員 (2018年6月～2023年6月) |
| | ・日本理学療法士協会 第6回日本予防理学療法学会学術大会 準備委員（企画部門） (2019年5月～2020年1月) |
| | ・日本ロボットリハビリテーション・ケア研究会 世話人 (2021年4月～現在に至る) |
| | ・日本水泳連盟 医事委員会連携組織 日本水泳トレーナー会議<br>運営委員 (2023年4月～現在に至る)<br>学術・研究推進部　委員 (2023年4月～現在に至る)<br>ブロック活動推進部　中国・四国ブロック 世話人 (2017年5月～現在に至る) |
| | ・福岡県水泳連盟 競技力向上委員会 医・科学委員 (2023年4月～現在に至る) |
| | ・日本アスレティックトレーニング学会 学術委員会 代議員外委員 (2023年8月～現在に至る) |
| | ・日本神経理学療法学会 戦略的課題解決委員会 タスクフォース 脳卒中歩行障害班 班員 (2023年12月～現在に至る) |
| | 【その他】 |
| | ・10th Asian Age Group Championships 2019 日本代表選手団（水球）トレーナー (2019年9月～2019年10月) |
| | ・東京オリンピック・パラリンピック競技大会 医療支援スタッフ（パラ水泳 選手用医務室 理学療法士） (2021年8月～2021年9月) |
| 所　属　学　会 | 日本理学療法士協会　会員 (2015年4月～現在に至る)<br>日本臨床スポーツ医学会　会員 (2015年9月～現在に至る)<br>日本水泳・水中運動学会　会員 (2017年10月～現在に至る)<br>日本アスレティックトレーニング学会　会員 (2018年5月～現在に至る)<br>日本運動器科学会　会員 (2019年4月～現在に至る)<br>日本ロボットリハビリテーション・ケア研究会　世話人 (2021年4月～現在に至る)<br>日本予防理学療法学会　専門会員A (2021年5月～現在に至る) |

| | | |
|---|---|---|
| | 日本スポーツ理学療法学会　専門会員 A | (2021 年 7 月～現在に至る) |
| | 日本再生医療とリハビリテーション学会　会員 | (2021 年 12 月～現在に至る) |
| | 日本神経理学療法学会　専門会員 A | (2022 年 5 月～現在に至る) |
| 受　賞　歴 | ・スポーツ選手のためのリハビリテーション研究会<br>第 34 回研修会 一般演題　奨励賞<br>「競泳選手の胸郭回旋運動の加速度と競技パフォーマンスの関係」(鈴木雄太、浦辺幸夫、前田慶明) | (2017 年 3 月) |
| | ・平成 29 年度「広島大学エクセレント・スチューデント・スカラシップ」優秀学生表彰 | (2017 年 12 月) |
| | ・第 44 回広島県病院学会 一般口述演題 優秀賞<br>「大腿骨近位部骨折患者に対する 4 週間のバランスエクササイズの介入効果」(高田優輝、浦辺幸夫、鈴木雄太、田中悠太、吉田康兵、白川泰山) | (2019 年 2 月) |
| | ・令和 2 年度「広島大学エクセレント・スチューデント・スカラシップ」優秀学生表彰 | (2020 年 12 月) |
| | ・日本運動器科学会　論文奨励賞<br>「両上肢による投動作中の体幹伸展可動域と最大テイクバック動作時の胸椎, 腰椎の弯曲角度および遠投距離の関係」<br>(福井一輝、浦辺幸夫、笹代純平、鈴木雄太、前田慶明) | (2021 年 5 月) |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

長野（ナガノ） 友彦（トモヒコ）　NAGANO Tomohiko　助教

| | |
|---|---|
| 所属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部　理学療法学科〕<br>・高齢期理学療法学<br>・生活環境論<br>・中枢神経疾患理学療法Ⅱ<br>・神経・筋疾患理学療法<br>・高次脳機能理学療法<br>・地域理学療法学<br>・先端医療と理学療法<br>・理学療法総合研究<br>・理学療法総合演習<br>・スタートアップ教育Ⅰ、スタートアップ教育Ⅱ<br>・理学療法ゼミナールⅠ、理学療法ゼミナールⅡ、理学療法ゼミナールⅢ<br>・臨床実習Ⅰ、臨床実習Ⅱ、臨床実習Ⅲ、臨床実習Ⅳ、臨床実習Ⅴ |
| 専門分野 | ■高齢期理学療法<br>■中枢神経系理学療法<br>（資格）<br>認定理学療法士（脳卒中）<br>理学療法士作業療法士専任教員養成講習会 修了<br>介護支援専門員 |
| 最終学歴 | 久留米大学大学院 医学研究科 医科学専攻 バイオ統計学群 修士（医科学）<br>（2018年4月～2020年3月） |
| 学位 | 修士（医科学） |
| 職歴 | 医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院<br>（2007年4月～2023年3月）<br>九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科　助教<br>（2023年4月～現在に至る） |
| 教育上の業績 | ・理学療法士養成校の臨床実習生の教育指導<br>（2012年4月～2023年3月）<br>・臨床実習指導者講習会修了（第2019－20－026 号）<br>（2019年7月）<br>・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会修了（第22041号）<br>（2022年9月）<br>・理学療法士作業療法士専任教員養成講習会修了（第20243057号）<br>（2024年2月） |
| 主な研究活動 | 【学術論文】<br>1. 友田秀紀，田口 脩，小柳亨介，長野友彦，森山雅志，小泉幸毅，山本大誠，服部 聡<br>「脳卒中患者の歩行自立に至る期間の統計学的考察 多施設共同研究における予測モデルの検証」<br>（理学療法学 41(2):110-111, 2014）<br>2. 長野友彦，立丸允啓，友田秀紀，砂川尚也，小泉幸毅，大野重雄<br>「障害者施設等一般病棟における三肢切断患者へのリハビリテーション<br>－活動・参加水準が向上した一症例－」<br>（理学療法福岡 30号:93-98, 2017）<br>3. 長野友彦，友田秀紀，小泉幸毅，森山雅志，山本大誠，赤津嘉樹，徳永武男，梅津祐一<br>「脳卒中患者における障害の重症度と低栄養が歩行自立再獲得日数に及ぼす影響<br>－共分散構造分析による検証－」<br>（理学療法学 45(1):9-17, 2018） |

4. 大野素子，山田麻依子，越戸 慶，増﨑 力，金井孝典，八丁亜由美，長野友彦，中濵亮士，安部美穂，大野重雄，萩原正剛，藤田雅章，河津隆三，梅津祐一，浜村明徳
「障害者施設等一般病棟の現状と課題
ー障害者施設等一般病棟の実際（1）小倉リハビリテーション病院の場合ー」
(JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION 28(5): 474-478, 2019)

5. 長野友彦，角間辰之
「パーキンソン病患者における栄養状態と日常生活動作の改善との関連性の探索」
(久留米醫學會雜誌 83(4/5): 103-103, 2020)（久留米大学医学研究科 修士論文）

6. Nagano T, Kakuma T, Umezu Y, Yanagawa T
「Nutritional status and activities of daily living in patients with Parkinson's disease」
(PLoS ONE 16(2):e0246329, 2021)

7. 長野友彦，立丸允啓，小泉幸毅
「パーキンソン病患者の栄養とリハビリテーション」
(難病と在宅ケア 29(1): 55-57, 2023)

8. 立丸允啓，大峯三郎，馬場健太郎，福井貴暁，緒方宏武，和田菜摘，長野友彦，小泉幸毅
「脳卒中患者における歩行自立判定指標としての杖把持片脚立位時間の妥当性検証」
(理学療法学 50(2):33-41, 2023)

【学会発表】

1. 髙橋義和，長野友彦，濵﨑崇史，伊藤元貴，立丸允啓，友田秀紀，砂川尚也，小泉幸毅
「回復期リハ病棟からのソフトランディングに関する一考察
ー退院後の生活機能変化には何が関係し，何をなすべきかー」
〈主　　催〉リハビリテーション・ケア合同研究大会福井 2008
〈開 催 場 所〉福井県
〈開催年月日〉2008 年 11 月

2. 芦塚美奈子，長野友彦，若林修子，友田秀紀，砂川尚也
「若年障害者に対するリハビリテーションと就学への支援
ー四肢麻痺と中途視覚障害を有する症例を通してー」
〈主　　催〉第 19 回福岡県理学療法士学会
〈開 催 場 所〉福岡県
〈開催年月日〉2009 年 3 月

3. 長野友彦，砂川尚也，中尾浩之，末永真奈美，米中幸代，三村麻由子，濵﨑崇史，中村満史，髙橋義和，岩立智子，伊藤元貴，立丸允啓，友田秀紀，小泉幸毅
「脳卒中患者における病棟歩行自立の判断基準に関する一考察（第 1 報）」
〈主　　催〉第 44 回日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉東京都
〈開催年月日〉2009 年 5 月

4. 髙橋義和，友田秀紀，平野雅也，濵﨑崇史，長野友彦，中村隼平，古野友佳，川崎裕史，伊藤元貴，立丸允啓，村山謙治，小泉幸毅
「脳卒中患者における病棟歩行自立の判断基準に関する一考察（第 2 報）」
〈主　　催〉第 45 回日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉岐阜県
〈開催年月日〉2010 年 5 月

5. 若林修子，長野友彦，大場勇輔，新野尾嘉孝，柴田 薫，川満尚彦，山野優子，芦塚美奈子，江藤友梨，野田沙弥香，友田秀紀，小泉幸毅
「入院患者における褥瘡悪化要因の分析とその対応」
〈主　　催〉第 33 回九州理学療法士・作業療法士合同学会
〈開 催 場 所〉福岡県
〈開催年月日〉2011 年 11 月

6. Nagano T, Asahara R, Noritake K, Aranoo Y, Abiru T, Tomoda H, Moriyama M, Koizumi K, Umezu Y
「Influence of different speeds on Sit - To - Stand for cardiopulmonary function

－A pilot study－」
〈主　　催〉第１回日韓合同カンファレンス
〈開 催 場 所〉長崎県
〈開催年月日〉2012 年 11 月

7. 中村隼平，濵﨑崇史，小樋雅隆，横枕 崇，中尾 淳，片渕 恒，後藤健志，久保田健仁，宮崎陽子，田口 脩，古野友佳，川崎裕史，長野友彦，髙橋義和，立丸允啓，友田秀紀，村山謙治，小泉幸毅
「日常生活機能評価に着目した重症脳卒中患者の改善経過と支援内容の分析」
〈主　　催〉第 48 回日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉愛知県
〈開催年月日〉2013 年 5 月

8. Tomoda H, Taguchi O, Koyanagi K, Nagano T, Moriyama M, Koizumi K, Yamamoto T, Hattori S
「Simple prediction rules for days to independent ambulatory of stroke patients in convalescent rehabilitation wards using Accelerated-Failure Time Model」
〈主　　催〉The scientific committee of the WCPT-AWP & ACPT congress, Taichung
〈開 催 場 所〉Taiwan
〈開催年月日〉2013 年 5 月

9. 長野友彦，後藤健志，横枕 崇，小樋雅隆，須間理恵子，宇都周作，片渕 恒，土川さとみ，則竹賢人，千代野滝太，久保田健仁，井村沙織，友田秀紀，小泉幸毅，徳永武男
「低栄養が脳卒中患者の歩行自立に与える影響」
〈主　　催〉第 49 回日本理学療法学術大会
〈開 催 場 所〉神奈川県
〈開催年月日〉2014 年 5 月

10. 横枕 崇，長野友彦，小樋雅隆，須間理恵子，土川さとみ，千代野滝太，田抜良江，井村沙織，伊藤元貴，友田秀紀，小泉幸毅
「低栄養患者の歩行自立に影響を与えた嚥下障害との関連因子」
〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2014 in 佐賀
〈開 催 場 所〉佐賀県
〈開催年月日〉2014 年 11 月

11. Nagano T, Tatemaru M, Fujiwara K, Yokomakura T, Goto K, Yanagida Y, Sakemi S, Takahashi Y, Ito M, Tomoda H, Moriyama M, Koizumi K, Yamamoto T, Akatsu Y, Tokunaga T, Umezu Y
「Influence of both Malnutrition and Severity in Stroke Patients for Length of Independent Ambulation verified by Covariance Structure Analysis」
〈主　　催〉World Confederation for Physical Therapy Congress 17th International Congress
〈開 催 場 所〉Singapore
〈開催年月日〉2015 年 5 月

12. 田口 脩，綱取雅紀，東馬場要，阿比留友樹，長野友彦，友田秀紀，小泉幸毅
「脳卒中患者はいつごろ歩行が自立する？　－全国データによる予測モデルの検証－」
〈主　　催〉リハビリテーション・ケア合同研究大会・神戸 2015
〈開 催 場 所〉兵庫県
〈開催年月日〉2015 年 10 月

13. 長野友彦，立丸允啓，増﨑 力，中武聖貴，友田秀紀，砂川尚也，小泉幸毅
「障害者施設等一般病棟における三肢切断患者へのリハビリテーション
－活動・参加水準の向上を求めて－」
〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2015 in 大分
〈開 催 場 所〉大分県
〈開催年月日〉2015 年 11 月

14. 長野友彦，髙橋義和，友田秀紀，砂川尚也，矢野浩二，森山雅志，小泉幸毅，赤津嘉樹，大野重雄，梅津祐一
「生活期失調患者に対するバランス練習アシストの効果」

〈主　　催〉リハビリテーション・ケア合同研究大会・茨城 2016
〈開 催 場 所〉茨城県
〈開催年月日〉2016 年 10 月

**15.** 田口 脩, 古野友佳, 綱取雅紀, 井上かおり, 長野友彦, 増﨑 力, 立丸允啓, 友田秀紀, 砂川尚也, 小泉幸毅
「生活期における障害者施設等一般病棟の役割　－自宅から入院した患者に着目して－」
〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2016 in 鹿児島
〈開 催 場 所〉鹿児島県
〈開催年月日〉2016 年 10 月

**16.** 髙橋義和, 馬場健太郎, 長野友彦, 中野智洋, 出羽柊介, 立丸允啓, 友田秀紀, 砂川尚也, 矢野浩二, 森山雅志, 小泉幸毅, 赤津嘉樹, 大野重雄, 梅津祐一
「脳卒中片麻痺患者への歩行練習アシストの効果
－発症から 3 ヶ月後にロボット練習を実施した 2 症例－」
〈主　　催〉第 52 回日本理学療法学術大会千葉
〈開 催 場 所〉千葉県
〈開催年月日〉2017 年 5 月

**17.** 長野友彦, 柳田 優, 井村沙織, 徳永武男
「サルコペニアを呈したパーキンソン病患者の機能的予後への関連因子の検証」
〈主　　催〉第 33 回日本静脈経腸栄養学会学術集会横浜
〈開 催 場 所〉神奈川県
〈開催年月日〉2018 年 2 月

**18.** 中野智洋, 谷口典久, 辻 嘉秀, 出羽柊介, 古野友佳, 長野友彦, 髙橋義和, 友田秀紀, 小泉幸毅, 赤津嘉樹, 大野重雄
「脳卒中患者における歩行練習アシスト（GEAR）の効果検証
－機能レベルと GEAR 設定値の経時的変化に着目して－」
〈主　　催〉回復期リハビリテーション病棟協会 第 31 回研究大会 in 岩手
〈開 催 場 所〉岩手県
〈開催年月日〉2018 年 2 月

**19.** 古野友佳, 黒木恒輔, 山本健太郎, 後藤健志, 長野友彦, 髙橋義和, 友田秀紀, 小泉幸毅, 赤津嘉樹, 大野重雄
「重度脳卒中片麻痺患者への歩行練習法を再考する
－ウェルウォークを応用活用して安全かつ効率的に歩行練習が可能であった一例－」
〈主　　催〉リハビリテーション・ケア合同研究大会 米子 2018
〈開 催 場 所〉鳥取県
〈開催年月日〉2018 年 10 月

**20.** 鮎川博樹, 富田尚吾, 杉本将太郎, 久保享子, 上村 誠, 長野友彦, 平野雅也, 立丸允啓, 小泉幸毅, 山本美江子
「大腿骨骨折患者の歩行自立獲得時期に関する予測モデルの検証」
〈主　　催〉九州理学療法士学術大会 2019 in 鹿児島 黎明学会
〈開 催 場 所〉鹿児島県
〈開催年月日〉2019 年 10 月

**21.** 谷口典久, 辻 嘉秀, 出羽柊介, 東馬場要, 黒木恒輔, 後藤健志, 中野智洋, 長野友彦, 髙橋義和, 友田秀紀, 小泉幸毅, 河津隆三
「重度・重複障害の脳卒中患者への歩行練習の工夫と効果」
〈主　　催〉九州理学療法士学術大会 2019 in 鹿児島 黎明学会
〈開 催 場 所〉鹿児島県
〈開催年月日〉2019 年 10 月

**22.** 福井貴暁, 緒方宏武, 大園菜摘, 岡崎拓海, 馬場健太郎, 長野友彦, 立丸允啓, 小泉幸毅, 大野重雄
「脳卒中患者の歩行自立判定指標の開発　第 3 報
－病棟歩行開始から 14 日目の自立判定でその後の転倒を防止する－」

| | |
|---|---|
| | 〈主　　催〉第８回日本予防理学療法学会学術大会<br>〈開 催 場 所〉Web 開催<br>〈開催年月日〉2021 年 11 月 |
| | **23.** 新垣綾子, 横枕 崇, 後藤健志, 田口 脩, 長野友彦, 立丸允啓, 小泉幸毅, 大野重雄, 梅津祐一<br>**「デジタル画像を用いた AI による栄養状態の評価（第１報）**<br>**－「低骨格筋量」と「低栄養」に関する判別精度の検証－」**<br>〈主　　催〉第７回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会<br>〈開 催 場 所〉宮崎県<br>〈開催年月日〉2023 年 11 月 |
| | **24.** 田口 脩, 出羽柊介, 中村隼平, 長野友彦, 立丸允啓<br>**「福岡県遠賀郡にある２つのサロンへの多面的な支援方法の考察」**<br>〈主　　催〉第 10 回日本地域理学療法学会学術大会<br>〈開 催 場 所〉東京都<br>〈開催年月日〉2023 年 12 月 |
| 主な社会活動 | **1.** リハビリテーション・ケア合同研究大会・神戸 2015　座長（口述）<br>（2015 年 10 月）<br>**2.** リハビリテーション・ケア合同研究大会・茨城 2016　座長（口述）<br>（2016 年 10 月）<br>**3.** 第 23 回星城大学リハビリテーション研究会　シンポジスト<br>**「脳卒中患者はいつごろ歩行が自立する？ －予測モデルの紹介，低栄養の関連について－」**<br>（2017 年９月）<br>**4.** 第４回ジャピタルフーズフェア熊本　パネルディスカッション<br>**「“食べる”を支える多職種連携」**<br>髙山仁子，山本恵仙，月足亜佐美，今田吉彦，長野友彦<br>（2020 年２月）<br>**5.** 第 18 回北九州パーキンソン病リハビリテーション研究会　講師<br>**「パーキンソン病患者の栄養とリハビリテーションとの関連性」**<br>（2022 年 10 月）<br>**6.** 北九州市立年長者研修大学校周望学舎シニアカレッジ　講師<br>**「運動と栄養で転倒予防！」**<br>（2023 年９月）<br>**7.** 多面的健康づくり教室　講師<br>**「運動と栄養で元気に！フレイル・サルコペニア予防！」**<br>（2024 年１月） |
| 所 属 学 会 | 日本理学療法士協会　（2007 年６月～現在に至る）<br>日本神経理学療法学会　（2021 年４月～現在に至る）<br>日本予防理学療法学会　（2021 年４月～現在に至る）<br>日本リハビリテーション栄養学会　（2022 年５月～現在に至る）<br>日本栄養･嚥下理学療法学会　（2023 年４月～現在に至る）<br>日本理学療法教育学会　（2023 年 11 月～現在に至る）<br>日本支援工学理学療法学会　（2024 年２月～現在に至る） |
| 受　賞　歴 | 九州理学療法士学術大会 2019 in 鹿児島　優秀演題賞（共同演者）　（2019 年 10 月） |

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学
Kyushu Nutrition Welfare University

松﨑（マツザキ） 英章（ヒデアキ）　MATSUZAKI Hideaki　助教

| | |
|---|---|
| 所　属 | 九州栄養福祉大学　リハビリテーション学部　理学療法学科 |
| 担当科目 | 〔リハビリテーション学部 理学療法学科〕<br>・基礎生物学<br>・医療人のための科学<br>・スタートアップ教育Ⅰ・Ⅱ |
| 専門分野 | ■予防理学療法学<br>■地域理学療法学<br>■介護予防に関する疫学<br>■高齢者の転倒予防に関する理学療法<br>【関連資格】<br>・専門理学療法士（予防理学療法）：日本理学療法士協会<br>・認定理学療法士（健康増進・参加）：日本理学療法士協会<br>・フレイル対策推進マネジャー：日本理学療法士協会 |
| 最終学歴 | 九州大学大学大学院博士後期課程　人間環境学府行動システム専攻　単位取得満期退学 |
| 学　位 | 修士（人間環境学） |
| 職　歴 | 医療法人秋桜会新中間病院リハビリセンター　(2012年4月～2016年3月)<br>医療法人相生会福岡みらい病院リハビリテーションセンター　(2016年4月～2020年3月)<br>医療法人相生会福岡みらい病院リハビリテーションセンター　(2020年4月～2024年3月)<br>主任<br>九州栄養福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科 助教　(2024年4月～現在に至る) |
| 教育上の業績 | ○理学療法学科学生に対する臨床実習指導者および臨床実習受け入れ施設側責任者<br>内　容：医療法人相生会福岡みらい病院にて臨床実習生の受け入れ対象としている大学の理学療法学科学生に対する臨床実習指導者としての実務およびそれらの管理責任者を務めた。<br>※臨床実習指導者講習会修了（2019年12月1日）<br>年月日：2020年4月1日～2022年3月31日 |
| | ○医療法人相生会福岡みらい病院 教育・研修委員<br>内　容：医療法人相生会（福岡市内3病院）におけるリハビリテーション科職員を対象とした法人内共通教育ラダー制度に関する管理マニュアルの作成および実運用を担当した。<br>年月日：2020年4月1日～2024年3月31日 |
| | ○FSA定例勉強会 予防分野におけるセラピストの役割～多角的視点から予防を考える～ 講師<br>内　容：疫学研究によるフレイルに関する知見<br>年月日：2020年9月17日 |
| | ○公益社団法人福岡県医師会県民健康づくりセミナー 講師<br>内　容：今、話題のフレイルってなに？<br>年月日：2022年1月（オンデマンド配信） |
| | ○第31回福岡県理学療法士学会ランチタイムセミナー 講師<br>内　容：超高齢社会における理学療法の再考－加齢性変化を理解した理学療法介入とは－<br>年月日：2022年2月13日 |
| | ○福岡県理学療法士会福岡1地区研修会 講師<br>内　容：フレイル予防<br>年月日：2022年8月24日 |
| | ○九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡 座長（一般演題：ポスター）<br>年月日：2022年11月26日 |
| | ○FSA定例勉強会 講師<br>内　容：地域理学療法における評価指標とその解釈<br>年月日：2022年12月16日 |
| | ○第104回福岡県理学療法士会学術研修大会市民公開講座 講師<br>内　容：高齢者を対象としたフレイル予防の内容<br>年月日：2023年1月22日 |

| | |
|---|---|
| | ○福岡県理学療法士会 2023 年度臨床実習指導者フォローアップセミナー ファシリテーター<br>内　容：グループワークにおけるファシリテーターを担当した。<br>年月日：2023 年 11 月 18 日 |
| 主な研究活動 | 【学術論文】筆頭 |
| | **1. 高齢入院患者に対する低強度運動の安全性と有効性（査読あり）**<br>松﨑 英章，松尾 大樹，林 佑，津上 勝，川嶋 恵美，末松 廣郎，神﨑 良子，大峯 三郎，木村 美子<br>（日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌，17，115-124，2019） |
| | （概要）<br>骨関節疾患や脳血管疾患等を有する高齢入院患者を対象として実施した低強度運動による介入研究である。低栄養や併存疾患の重症化等によって治療が難渋することの多い高齢入院患者に対する理学療法において、運動療法の一つの手段として低強度運動が安全かつ有効であったことを示した。 |
| | **2. 地域在住自立高齢者における中高強度身体活動と転倒の関連性はバランス機能に影響される（査読あり）**<br>松﨑 英章，齊藤 貴文，楢﨑 兼司，熊谷 秋三<br>（理学療法学，48，63-71，2021） |
| | （概要）<br>地域在住高齢者約 600 名を対象とした 2 年間の前向き追跡研究である。高齢者が発生する骨折の主要因である転倒と中高強度身体活動の関連性がバランス機能の高低によって異なることを示し、転倒予防を検討する際にはバラス機能を事前に評価して把握しておくことが重要であることを示唆した。 |
| | **3. パーキンソン病に対する反復経頭蓋磁気刺激治療と理学療法（特集）**<br>松﨑 英章，髙橋 真紀<br>（理学療法ジャーナル，55，1213-1214，2021） |
| | （概要）<br>パーキンソン病患者に対する理学療法の特集号において、反復経頭蓋磁気刺激治療と理学療法の併用治療のメカニズムに関する概要およびこれまでの先行研究（メタアナリシス）で示されてきたエビデンスの説明を記した。また、福岡みらい病院でこれまでに取り組んできた上記治療の概要およびその実績について統計的解析の結果を含めて紹介した。 |
| | **4. Predictive ability of the total score of the Kihon checklist for the incidence of functional disability in older Japanese adults: An 8 - year prospective study（査読あり）**<br>Hideaki Matsuzaki, Hiro Kishimoto, Yu Nofuji, Tao Chen, Kenji Narazaki<br>（Geriatrics &Gerontology International，22，723-729，2022） |
| | （概要）<br>地域高齢者約 2,000 名を対象とした 8 年間の前向き追跡研究である。運動器、口腔機能、栄養、閉じこもり、認知機能、抑うつ等の包括的な高齢者機能評価尺度である基本チェックリストの合計得点が長期間（8 年間）の要支援・要介護認定リスクと関連し、その予測妥当性を有することを示した。 |
| | **5. 基本チェックリストを用いた要介護化リスク評価尺度の試作と予備的検証－8 年間の前向き疫学研究 -（寄稿）**<br>松﨑 英章，辻 大士，野藤 悠，岸本 裕歩，陳 涛，楢﨑 兼司<br>（厚生の指標，70，9-16，2023） |
| | （概要）<br>本論文は、厚生の指標編集部より寄稿の依頼を受け、第 80 回日本公衆衛生学会総会で口頭発表した予備的研究内容を基に構成した論文である。地域高齢者約 2,000 名を対象とした 8 年間の前向き追跡研究であり、基本チェックリストを基に要介護化リスクに対する長期予測に優れた要介護化リスク評価尺度の試作と予測妥当性の検討を試みた。 |
| | **6. 要支援・要介護リスク評価尺度における追跡 9 年の要支援・要介護認定リスクに対するカットオフ値の検討（査読あり）**<br>松﨑 英章，辻 大士，陳 涛，陳 三妹，野藤 悠，楢﨑 兼司<br>（公衆衛生雑誌，in press，2024） |
| | （概要）<br>地域高齢者約 2,000 名を対象とした 9 年間の前向き追跡研究であり、基本チェックリストを基に作成された |

要支援・要介護リスク評価尺度における長期（9 年間）の要介護化リスクに対するカットオフ値の算出を試みた。

【学術論文】共著

**1. Changes of Oral and Physical Functions in Older Japanese Who Participated in Keyboard Harmonica and Exercise Classes during COVID-19-Related Movement Restrictions（共著）**

Shinsuke Mizutani, Hideaki Matsuzaki, Kiyomi Iyota, Asuka Tani, Saori Oku, Hiroaki Tabuchi, Akiko Fujiwara, Shizuka Hase-Tamaru, Hiro Kishimoto, Kenji Narazaki

（International Journal of Environmental Research and Public Health，20，3700，2023）

（概要）

介護予防教室（鍵盤ハーモニカ教室もしくは運動教室）に参加する地域高齢者を対象として、コロナウィルス感染症が蔓延して緊急事態宣言等の行動制限が発令されていた時期（コロナ禍）における口腔機能および身体機能の変化を調査した。

**2. Frailty and occupational falls among older Japanese workers: An Internet - based cross - sectional study**

Ryutaro Matsugaki, Hideaki Matsuzaki, Satoru Saeki, Yoshihisa Fujino, Shinya Matsuda

（Journal of Occupational Health，65，e12424，2023）

（概要）

高齢労働者における健康・就業上の問題である職業性転倒の有無にフレイルが関連するかどうか調べた横断研究である。高齢労働者 5,000 名を対象として調査した結果、6.1%が過去 12 ヵ月間に少なくとも 1 回の職業性転倒を経験しており、他の転倒リスク因子とは独立してフレイルが職業性転倒の有意なリスク因子であることが明らかとなった。

【学術論文】その他

**1. Author's reply to comments on “Predictive ability of the total score of the Kihon checklist for the incidence of functional disability in older Japanese adults: An 8 - year prospective study”**

Hideaki Matsuzaki, Hiro Kishimoto, Yu Nofuji, Tao Chen, Kenji Narazaki

（Geriatrics & Gerontology International，22，985-986，2022）

（概要）

Predictive ability of the total score of the Kihon checklist for the incidence of functional disability in older Japanese adults: An 8 - year prospective study に対するレターへの返答論文。

【学会発表】筆頭演者

**1. 入院高齢人工透析患者に対する低強度運動負荷の経験**

〈主　　催〉日本腎臓リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉東京
〈開催年月日〉2015 年 3 月 21 日

**2. 血液透析患者に対する監視下運動療法の効果と運動習慣に関する一症例での検証 ～E-SAS を使用して～**

〈主　　催〉日本腎臓リハビリテーション学会
〈開 催 場 所〉岡山
〈開催年月日〉2016 年 3 月 27 日

**3. パーキンソン病の運動症状に及ぼす反復経頭蓋磁気刺激治療とリハビリテーションの併用効果の検討**

〈主　　催〉日本神経理学療法学会
〈開 催 場 所〉仙台
〈開催年月日〉2016 年 11 月 26 日

**4. 高齢フレイル患者に対する低強度運動の効果:低栄養とサルコペニアの合併が及ぼす影響についての検討**

〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2017 in 宮崎
〈開 催 場 所〉宮崎
〈開催年月日〉2017 年 11 月 11 日

| | |
|---|---|
| | 5. パーキンソン病に対する反復経頭蓋磁気刺激治療とリハビリテーションの併用による QOL が向上した一例<br>〈主　　催〉日本支援工学理学療法学会<br>〈開 催 場 所〉北九州<br>〈開催年月日〉2018 年 9 月 30 日 |
| | 6. パーキンソン病の運動症状に対するリハビリテーションと反復経頭蓋磁気刺激治療の併用効果の検討<br>〈主　　催〉日本神経理学療法学会<br>〈開 催 場 所〉大阪<br>〈開催年月日〉2018 年 11 月 10 日 |
| | 7. 三次元動作解析による高齢大腿骨近位部骨折患者の歩行変動と転倒危険因子の関連性<br>〈主　　催〉福岡県理学療法士会<br>〈開 催 場 所〉福岡<br>〈開催年月日〉2020 年 2 月 2 日 |
| | 8. 主観的口腔機能とフレイル表現型の発症との関連<br>〈主　　催〉日本体力医学会<br>〈開 催 場 所〉オンライン<br>〈開催年月日〉2020 年 9 月 24 日 |
| | 9. 基本チェックリストの合計点と要支援・要介護認定の関連 ～8 年間の前向き追跡研究～<br>〈主　　催〉日本健康支援学会および日本介護予防・健康づくり学会<br>〈開 催 場 所〉オンライン<br>〈開催年月日〉2021 年 3 月 6 日 |
| | 10. 基本チェックリストを用いた要介護認定リスクスコアの開発と検証：8 年間の前向き研究<br>〈主　　催〉日本公衆衛生学会<br>〈開 催 場 所〉オンライン<br>〈開催年月日〉2021 年 12 月 21 日 |
| | 11. 大腿骨近位部骨折後の歩行能力と退院 3 か月後における手段的日常生活活動能力の関連<br>〈主　　催〉日本予防理学療法学会<br>〈開 催 場 所〉東京<br>〈開催年月日〉2022 年 11 月 20 日 |
| | 12. 基本チェックリストを用いた要介護化リスク評価尺度のカットオフ値の妥当性 －9 年間の前向き追跡研究－<br>〈主　　催〉日本健康支援学会<br>〈開 催 場 所〉福岡<br>〈開催年月日〉2023 年 3 月 4 日 |
| | 13. 大腿骨近位部骨折患者の歩行の動的安定性における転倒リスクに対する予測能の検討～1 年間の前向き追跡研究～<br>〈主　　催〉日本予防理学療法学会<br>〈開 催 場 所〉北海道<br>〈開催年月日〉2023 年 10 月 28 日 |
| | 【学会発表】共同演者 |
| | 1. 入院透析患者に対する低強度運動負荷の経験 ～栄養状態に着目して～<br>〈主　　催〉日本腎臓リハビリテーション学会<br>〈開 催 場 所〉東京<br>〈開催年月日〉2015 年 3 月 22 日 |
| | 2. パーキンソン病患者に対する rTMS とリハビリテーションの併用効果 ～歩行に及ぼす影響について～<br>〈主　　催〉日本神経理学療法学会<br>〈開 催 場 所〉仙台<br>〈開催年月日〉2016 年 11 月 27 日 |
| | 3. 入院高齢患者に対するリハビリテーションの効果:栄養状態との関連 |

〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2017 in 宮崎
〈開 催 場 所〉宮崎
〈開催年月日〉2017 年 11 月 11 日

**4. 高齢者に対する至適運動強度の検討 低負荷筋力強化運動の効果**
〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2017 in 宮崎
〈開 催 場 所〉宮崎
〈開催年月日〉2017 年 11 月 11 日

**5. パーキンソン病に対する反復経頭蓋磁気刺激治療 チームでの取り組み**
〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2017 in 宮崎
〈開 催 場 所〉宮崎
〈開催年月日〉2017 年 11 月 12 日

**6. 反復経頭蓋磁気刺激治療と集中的リハビリテーションの併用により活動性に向上がみられた一例**
〈主　　催〉九州理学療法士・作業療法士合同学会 2017 in 宮崎
〈開 催 場 所〉宮崎
〈開催年月日〉2017 年 11 月 12 日

**7. rTMS とリハビリテーションの併用によるパーキンソン病患者の歩行の変化**
〈主　　催〉日本神経理学療法学会
〈開 催 場 所〉大阪
〈開催年月日〉2018 年 11 月 10 日

**8. rTMS とリハビリテーションの併用がパーキンソン病のバランス機能に及ぼす効果**
〈主　　催〉日本神経理学療法学会
〈開 催 場 所〉大阪
〈開催年月日〉2018 年 11 月 10 日

**9. 慢性期脳卒中患者の歩行に対する自己効力感の実態の解明と関連項目の調査**
〈主　　催〉日本神経理学療法学会
〈開 催 場 所〉大阪
〈開催年月日〉2018 年 11 月 10 日

**10. 高齢入院患者に対する低強度運動の効果－フレイル状態への影響－**
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2019 年 2 月 3 日

**11. 反復経頭蓋磁気刺激治療と理学療法の併用がパーキンソン病のバランス機能に及ぼす効果 Mini-BESTest による検討**
〈主　　催〉日本神経理学療法学会
〈開 催 場 所〉横浜
〈開催年月日〉2019 年 9 月 28 日

**12. 高齢運動器疾患に対する電気刺激療法を併用した低強度筋力増強運動の効果**
〈主　　催〉日本物理療法学会
〈開 催 場 所〉仙台
〈開催年月日〉2019 年 10 月 19 日

**13. 歩行速度向上に難渋した症例に対して HONDA 歩行アシストを使用し歩行速度向上に至った症例 左不全片麻痺患者の足部クリアランスに着目して**
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2021 年 2 月 14 日

**14. 三次元動作解析装置を用いて測定した大腿骨近位部骨折患者の歩行中における股関節運動域と歩行速度の関連**
〈主　　催〉日本運動器理学療法学会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2021 年 9 月 11 日

15. 外来リハビリテーション継続 3 ヶ月後の肩関節周囲炎患者における夜間痛の持続状況に関連する因子の検討
〈主　　催〉日本運動器疼痛学会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2021 年 11 月 20 日

16. 高齢運動器疾患患者に対する神経筋電気刺激と筋力増強運動の併用効果とサルコペニアによる交互作用の検討
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2022 年 2 月 13 日

17. 胸腰椎黄色靭帯骨化症による歩行障害に対し、エネルギーバランスを下に BWSTT を用いた歩行練習の経験
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2022 年 2 月 13 日

18. 弱視と難聴を有するパーキンソン病患者に対して行なったトレッドミル歩行練習の経験
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2022 年 2 月 13 日

19. 回復期リハビリテーションにおける BWSTT に FES を併用した歩行訓練の積極的実施により歩行を再獲得した高齢脊髄損傷不全麻痺症例
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉オンライン
〈開催年月日〉2022 年 2 月 13 日

20. 新生涯学習制度導入に伴う法人内新人理学療法士教育システムへの反映
〈主　　催〉九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2022 年 11 月 26 日

21. 高齢運動器疾患患者に対する NMES を併用した筋力増強運動効果に影響を及ぼす関連因子の検討
〈主　　催〉九州理学療法士学術大会 2022 in 福岡
〈開 催 場 所〉北九州
〈開催年月日〉2022 年 11 月 27 日

22. 三軸加速度センサーを用いて測定した地域在住前期高齢者の歩行能力指標と認知機能の関連
〈主　　催〉日本健康支援学会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2023 年 3 月 4 日

23. 頚椎症性脊髄症による歩行障害の改善に対して BWSTT に体幹トレーニングの付加が有効であった症例
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2023 年 5 月 21 日

24. 大腿骨頚部骨折に対する人工骨頭挿入術を施行した症例における靴下着脱動作の獲得事例
〈主　　催〉福岡県理学療法士会
〈開 催 場 所〉福岡
〈開催年月日〉2023 年 5 月 21 日

25. 大腿骨近位部骨折患者における受傷前の転倒経験と回復期リハビリテーション病棟退棟時の歩行能力との関連
〈主　　催〉日本運動器理学療法学会
〈開 催 場 所〉福岡

| | |
|---|---|
| | 〈開催年月日〉2023 年 10 月 14 日 |
| | **26. ステップ長非対称性が著明な人工股関節全置換術後患者における術後 2 週時点の歩行特徴**<br>〈主　　催〉日本運動器理学療法学会<br>〈開 催 場 所〉福岡<br>〈開催年月日〉2023 年 10 月 14 日 |
| | 【競争的資金獲得】 |
| | **1. 公益財団法人日本生命財団 2020 年度高齢社会若手実践的課題研究助成（代表）**<br>〈課題名〉主観的口腔機能と要介護認定発生の関連：8 年間の前向き追跡研究<br>〈助成期間〉2020 年 10 月 1 日～2021 年 12 月 31 日<br>〈助成金額〉750,000 円 |
| 主な社会活動 | ○第 5 回日本予防理学療法学会学術大会 運営スタッフ　（2018 年 10 月）<br>○福岡県理学療法士会 部長　（2019 年 6 月～現在に至る）<br>・福岡県民における理学療法（士）に対する認知度調査を実施および報告書の作成　（2021 年 12 月 17 日）<br>・理学療法の日（体力測定会）イベントを担当　（2022 年 7 月 17 日）<br>・市民公開講座のイベントを担当　（2023 年 1 月 22 日）<br>○日本予防理学療法学会 評議員　（2021 年 7 月～現在に至る）<br>○福岡県理学療法士会代議員　（2024 年 2 月～2024 年 3 月）<br>○日本予防理学療法学会 査読委員　（2024 年 4 月～現在に至る） |
| 所 属 学 会 | 日本理学療法士協会　（2012 年 4 月～現在に至る）<br>日本サルコペニア・フレイル学会　（2017 年 7 月～現在に至る）<br>日本体力医学会　（2020 年 5 月～現在に至る）<br>日本健康支援学会　（2020 年 12 月～現在に至る）<br>日本予防理学療法学会　（2021 年 4 月～現在に至る）<br>日本地域理学療法学会　（2021 年 4 月～現在に至る）<br>日本運動器理学療法学会　（2021 年 4 月～現在に至る）<br>日本公衆衛生学会　（2021 年 12 月～現在に至る） |
| 受　賞　歴 | 第 22 回日本健康支援学会年次学術大会 大会優秀賞　（2021 年 3 月） |